
雨の中のうさぎ

れんじょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の中のうさぎ

【Nコード】

N6348U

【作者名】

れんじょう

【あらすじ】

大雨の中でなぜかくつついてきたうさぎを拾いました。

そのうさぎはともかわいくてアパートの中で一緒に暮らし始めます。

ところが、何かするたびに『ちりん』という音が聞こえるようになりました。

そのたびうさぎが賢くなっていくように感じるのは、どうしてでしょう？

第一話

大雨の降る、ある夜のこと。

ざあざあ而降る雨に負けまいと、傘をさしてひとりの女の人が街の中を歩いていました。

その女は、時折何かを確認しているように後ろを振り向き、ほっとため息をついてまた前を向いて歩き始めるのです。

彼女の後ろでは、雨に弱いはずのうさぎが一羽、なぜか彼女の後ろを距離を置いて飛び跳ねながらついてきていました。

彼女が止まると、うさぎも止まります。

彼女が歩き始めると、うさぎもぴょんぴょんといいてきます。

そんなこんなが10分くらい続いたでしょうか。

そろそろ彼女の家にたどり着くだろうところに、彼女はもう一度後ろを振り返ってうさぎを探してみました。

——いました。

焦茶色こげちやの身体にツキノワグマのような白い模様。

ずぶ濡れになりながらも彼女の後を追ってやってきていました。じっと彼女を見つめるそのつばらな瞳はまるで『僕をひろってください』と語りかけているようです。

「……くる？」

思わず口に出した言葉は雨音に混ざってうさぎにはとどかなかつたはずなのに、そのうさぎはこくりとうなづいてぴょんぴょんと彼女の足元にやってきました。

びっくりしたのは、彼女です。

まさか聞こえると思っていなかった言葉と、まるで言葉を理解しているようなうさぎの行動に、彼女は驚いて傘を落としてしまいました。

ざあざあと降りしきる雨が、彼女とうさぎを濡らします。

うさぎは濡れるのもお構いなしに、彼女の足元で後ろ足で立って、女に少しでも近づけるようにとぐいと背筋を伸ばしました。

彼女はそんなうさぎを掴んで、肩に寄りかかるように抱きかかえると、空いた手で傘を持ってこれ以上濡れないようにしました。

その時です。

ちりーん♪

透き通った綺麗な金属音に似た音が彼女の耳に聞こえました。

「え？」

驚いた彼女はきよろきよろと辺りを見回して音の出所を探しましたが、激しい雨音に紛れて聞こえるほど近くに金属らしいものが見当たりません。

不思議に思いながらも何も見つからないので気にしないようにして、家であるアパートに入って行きました。

彼女の肩に凭れかかっているうさぎが音とともに目を細めたのに、
彼女が気づくことはありませんでした。

第二話

部屋に新聞紙を引いて、その上ですぐ濡れになっているうさぎを
ちよこんと座らせました。

警戒心が強いでしょう。

うさぎは新聞紙の上から降りようとはしませんでした。

そこで彼女は自分が濡れているのも構わずに、清潔な石鹸の香りがするバスタオルを持ってきて、濡れたうさぎをわしゃわしゃと拭き始めました。

うさぎはその間もじっとして、全く動こうとはしませんでした。

随分と軽やかな毛並みが戻ったところ。

やっと彼女は自分の濡れた服が身体にまとわりついて気持ち悪いことに気がついたようで、うさぎに「じっとしていてね」と言い残し、シャワーを浴びに行きました。

急いでシャワーからでてくると、うさぎはまるで言葉がわかるようにじっと新聞紙の上で彼女を待っていました。

「おりこうさんな、うさぎさんね」

彼女はうさぎを目線の高さまで抱き上げると、まじまじとうさぎを見て言いました。

「君は男の子？それとも女の子？うさぎの性別なんて調べたことがないからわからないなあ」

すると今までおりこうさんだったうさぎが急にじたばたと暴れ始めたので、新聞紙の上にゆっくりと下ろしました。

なんとなくほっと息をついたように見えたのは錯覚だったかもしれない。

「私の名前は柚里ゆづりというの。君の名前はなにしようかな。男の子か女の子かわからないから、中性的な名前がいいかもね」

自己紹介なんて思いましたが、やはりここは一緒に暮らすのだからとうさぎに名前を伝えようと思いました。いかんせん、うさぎに名前はありません。

そこで乾いたうさぎの背中をゆっくりと指の背で撫で上げながら、うさぎに問いかけました。

もちろん、答えなんていうはずはありませんが。

ところが。

『アキ』

どこからか声が聞こえたのです。

そして雨の中に聞こえた『ちりーん』という金属の音も聞こえてきました。

柚里は驚いて周りを見まわしましたが、やはり声の主も綺麗な金属音を出す者ありません。

まさかとは思いましたが、撫で上げているうさぎを見てみたら

こくり

首を縦に振るではありませんか！

まるでそれは、『アキ』と言ったのがうさぎであるかのようでした。

けれどももちろんそんなことはありません。

だって、相手はうさぎです。

しゃべることなんてできませんし、何かを鳴らすこともできませんです。

それでもまさかと思いつつもうさぎに聞いてみたくなりました。

「君は……アキなの？」

するとどうでしょう。

うさぎは柚里のほうに顔を向けて、ゆっくりとうなづいたではありませんか。

「君は女の子？」

そうすると今度はふるふると首を振ります。

「じゃあ君は男の子？」

今度は縦に首を振りました。

その時の柚里の驚きようと言ったらありませんでした。

だってうさぎが人の言葉を理解しているのですから！

どこからか聞こえてきた『アキ』という声も、もしかしたらうさぎがしゃべったのかもしれない。

柚里は驚きのあまり後ずさってソファにどっさりと腰を下ろした

の
で
し
た。

第三話

ぴょん

うさぎが柚里の座るソファの横に飛び乗りました。そして少しでも柚里に近づこうと、ぐぐつと背筋を伸ばしました。するとふわふわとしているソファの上でのことですから、ふんばった拍子にうさぎはぐらつと揺らぎました。

話が分かるうさぎに驚いていて気持ち引き気味の柚里でしたが、ソファから落ちかけたウサギに思わず手を差し伸べてしまいました。そしてそのまま両手でつかみ、膝の上に座らせました。

すると

ちりーん ♪

何回目かの金属音が聞こえてきました。

どうもその音はうさぎから聞こえてくるように思いました。けれどうさぎの体には首輪も何もついていません。どこから金属音が聞こえるのか皆目わかりませんでした。

「不思議なうさぎさんね。言葉もわかるようだし、お返事もするし」

そういえば雨の中でも後をついてきたのだし、そういううさぎなんだと思うと柚里はなんだか楽しくなってきました。だって、そんなうさぎなんて見たことも聞いたこともないからで

す。

柚里だけの不思議なうさぎさんです。

「じゃあ、アキくん。これからよろしくね」

そう言って、耳と耳の間を指でゆっくり撫でてあげました。

するとアキくんはうれしそうにつぶらな黒い瞳をゆっくりと細めました。

さて。

柚里は動物を飼ったことはありません。

ですので、どうやって飼っていいのかもわかりません。

こういうときは便利なものが世の中にはありますので、その文明の利器に頼ろうとパソコンの前に座って検索を始めました。

『うさぎの飼い方』という項目で検索をすると沢山のヒットがありましたのでどれを開けようか悩んでいた時のことです。

膝の上でこくりこくりと安心して寝ていたアキくんが、がばつと起き上がって前足でパソコンのキーボードをがしゃがしゃとむやみやたらに触り始めました。

もちろんそんなことをされて、パソコンが無事にいるわけがありません。

さつきまで画面上にあった検索結果がみごとにどこかにいってしまいました。

「……アキくん？」

ちよつと黒くなつた柚里を垣間見てしまったアキくんは一目散に部屋の隅に逃げ込みましたが、もちろん黒くなつた柚里にあつさりと捕獲されて隣の部屋に連れ込まれました。そして無情にもドアが閉められてしまいました。

柚里は一息をついて、もう一度検索を始めて『うさぎの飼い方』を勉強し始めました。

驚いたことに、うさぎは躡ければ一か所におトイレができるのだそうです。

これには柚里はほつとしてしまいました。

だつてゲージの中に閉じ込めておくなんてかわいそうなことはしたくはなかつたからです。

寝るときも暗くして上げないといけないのでカバーが必要だとか、水は器よりも専用の容器を使ったほうがいいだとかたくさん勉強をして、満足した柚里がアキくんを隣の部屋から連れてこようと思つたとき

だんっ！だんっ！！

なにやら怪しげな音が隣の部屋から聞こえてきました。

それは柚里が一人暮らしをしてから一度も聞いたことのない音でした。

だんっ！だんっ！！

リズムをとりながら何かを叩きつけるような音が聞こえます。

柚里はそーつと隣の部屋のドアを開けました。

するとそこには、ドアの前で後ろを向いたアキくんが、薄ろ足を

使って床をだんだんと力いっぱい踏んでいる姿がありました。

まるで小さな子供がお菓子売り場やおもちや売り場でダダをこねている姿でした。

おっかしーっ！

アキくんはダダをこねているのかもしれませんが、そのまあるい後姿はともかわいらしいものでした。

一人暮らしが淋しかった柚里は、アキくんを拾って本当によかったなあと思いました。

第四話

あくる朝。

『生きものを飼うのならば、その生き物に合わせた快適な環境をその生き物に与えなければならぬ』という大前提のもと、柚里はアキくんに必要なものを揃えにペットショップに行こうと会社を休みました。

と言つても、ずる休みではありません。有給休暇という素晴らしい福祉が会社にはあるのです。

アキくんといえば、昨夜は柚里のベッド下にバスタオルを敷いてもらい、そこで一晩過ごしました。

大雨の中を思えば、とーっても快適な場所を柚里に与えてもらったアキくんなのですが、なんだかもじもじとしています。

それを見た柚里は、そういえばアキくんを拾ってからアキくんは用を足していないことを思い出しました。大失敗です。

それに昨夜ご飯にと器に入れた新鮮な人参をアキくんはすごく不思議そうに首をかしげてじっと見つめていました。

しばらくして新鮮な人参をぼりぼりとかじり始めたアキくんのほっぺたはぶつくりと膨らんでそれが上下する様は本当にかわいらしいものでしたが、黒い瞳には困ったような諦めたような色が浮かんでいました。

うさぎといえば人参とばかり思っていた柚里は、もしかしたらペットショップにアキくんが好きそうなご飯があるのではないかと思つて、これは性急に用意しないとアキくんが弱ってしまうと思つたのです。

開店時間を見計らってペットショップに向かった柚里とアキくん。アキくんが逃げないように、柚里はカバンに入れての出発となりました。

ペットショップではいろいろな種類の動物が狭い箱に入れられて展示されていました。

沢山の猫、沢山の犬、沢山のハムスター。
まるで動物園みたいです。

柚里はすでにアキくんというかわいらしいうさぎがいるので、動物たちに見向きもせずに一目散にうさぎのコーナーにいて、必要なものをいろいろ見て回りました。

うさぎは中くらいの動物なので、ゲージもちょっと大きめが必要なようです。

「アキくんはどんなお家がいいのかな」

カバンの中からひょっこりと首を出しているアキくんに、柚里は話しかけました。

だって、不思議なうさぎのアキくんのことですから、きっと自分が気に入るお家があると思ったからです。

けれどどのゲージを指さしても、アキくんは首を縦に振りません。しかたなしにお家は諦めて、それ以外の必要なものをそろえようと、今度はペットフードのコーナーにやってきました。

うさぎの餌として売られている一番安いものは、ドックフードのようなまあるいものでしたが、アキくんはそっぽを向いてしまいました。

美味しそうなドライフードの果物にも、クッキーのような餌にも、まったく見向きもしませんでした。

こまった柚里は店員さんに問いかけました。

「この子に必要なものはなんですか？」

そうすると店員さんはかわいらしいアキくんに一目ぼれをしたように黄色い歓声をあげて抱き上げました。

とたんにアキくんはじたばたと暴れ出しましたが、うさぎの力なんて人間の力に敵うわけがありません。

店員さんに抱っこされて「かわいーい」といいながらキスをされてしまいました。

その時また、変な音が柚里の耳に聞こえたのです。

今度は綺麗な金属音ではなく、『ちーん』という何やら悲しげな金属音でした。でも店員さんには聞こえなかったようで、アキくんを存分に頼ずりしていました。

その音を聞いたアキくんの顔ったらありません。

全身脱力でげんなりとして、頭の上に暗黒の雲が立ち込めたようになりました。

アキくんのあまりの悲しげな様に柚里は店員さんからアキくんを救出すべく、につこりと最大の笑顔を張り付けて「可愛がつてくださってありがとうございます」といいながら、店員さんに両手を差ししました。大人の対応です。

店員さんは名残惜しげにアキくんを柚里に手渡しました。そしてアキくんに必要なものを吟味しようと、柚里といっしょに店内を歩き始めました。

店員さんの目を盗んでアキくん「どう？」と確認をとっていた

柚里ですが、アキくんは何を見ても縦に首を振ろうとはしませんでした。

困った柚里は店員さんに今回は見ていただけだと説明をして、結局何も買わず家に帰ることになりました。

どうしよう。アキくんのご飯がわからないよ。

しょんぼりしながら家に帰った柚里は、アキくんをカバンから出してあげるとそのままキッチンに行って水を汲みました。
するとどうでしょう。

アキくんがもの欲しそうにそのコップを見つめているではありませんか！

「もしかして、コップから……飲めるとか？」

驚いた柚里でしたが、不思議なうさぎのアキくんのことです。本当に飲めるかもしれません。

ですので、自分のコップではなくて、プラスチックのコップに水を汲んでやりアキくんの目の前に置いてあげました。

アキくんは目をキラキラとさせてそのコップを器用に前足を使って挟み込み、まるで赤ちゃんが初めてコップを使って飲むようにくいつとコップをあおって水をごくごくと飲み始めたではありませんか！

ぷは。

よほど喉が渴いていたのでしょう。

アキくんは満足げに前足で口元をぬぐいました。

柚里は、その有様に目がまんまるになってしまいました。

第五話

お水を豪快に飲み干した不思議うさぎのアキくん。

その時、アキくんの身に猛烈な寒気が襲った模様でした。

ぶるぶると震えだすアキくんは柚里はどうしようとおるおるみつめるばかりでしたが、アキくんはそのままある所に猛ダッシュで走り出したのです！

そしてあるドアを前足でどんと叩き始めました。

そうしてようやく柚里はわかったのです。

アキくんがおトイレに行きたいのだということ。

もともとペットショップにはアキくんのゲージを買うつもりで行ったのです。だってゲージにはおトイレが付き物ですから。

けれどアキくんが気にいったお家がなかったものですから、すっかりそのことを失念してしまっていたのです。

ということは、考えてみたら昨日拾ったときから一度も用をたしていないということです。それは勘弁してほしいところでしょう。

どうりで必死でトイレのドアを叩いているはずです。

でもうさぎって人間のトイレで用を足せるのかな？

柚里は怪しみながらも不思議うさぎのアキくんのことですから、そんなこともあるのかもしれないとトイレのドアを開けてあげました。

すると、ささっとトイレに入っただかと思うと、反対側からちゃんとしてトイレのドアを閉めて用を足し始めたようです。

訓練すればうさぎも一か所でトイレをするって『うさぎの飼い方』にはあったけれど、普通のトイレでするなんて思ってもみなかったな。

たった一日で随分とアキくんが変わったうさぎだということになった袖里ですが、これには本当にびっくりしてしまいました。けれどこのおかげでお家の中に動物臭が籠らなくていいかも、なんてちょっと嬉しく思っていました。

ただアキくんは一人でトイレのドアを開けることはできないので、猫用の小さなドアをトイレに造る必要があります。

結局アキくんをトイレから出してあげた後、袖里は道具を買いにホームセンターに行ってアキくんが袖里がいない時でも一人でトイレが出来るように猫用のドアがついたドアを用意したのでした。

さて、トイレの心配がなくなったアキくんですが、今度は食事の心配です。

新鮮な野菜をあげれば普通のうさぎだったら喜ぶものですが、アキくんはいかんせん、普通のうさぎではないようなのです。

人参は駄目でしたから、つぎにキャベツ、サラダ菜、ブロッコリーと、思いつくものをいろいろ食べさせようとしたのですが、アキくんは人参の時のように仕方なしに食べるという感じです。美味し

いものを食べている感じではありませんでした。

それでもなんとか食べてはくれていたので、柚里は自分のご飯を作り始めました。

一人暮らしが長いと、凝った料理よりも簡単な料理を作るようになります。だって一生懸命作っても美味しいと言ってくれる人がいないのですから。

柚里も例にもれず、今日の昼ごはんはチャーハンと卵スープ。それをテーブルに置いて食べようとした時のこと。

水を望んだ時のように、アキくんはじーっとそのチャーハンを見ていたのです。

「もしかして……もしかして、アキくんはこのチャーハンを食べたいの？」

するとどうでしょう！

やはりアキくんはこくりと頷くのです。

「でも、うさぎは草食動物なんだけどな。これ食べたらお腹壊すかもしれないよ？」

そうすると、まるで『そんなことはないよ』と言いたげに、頭をフルフルと横に振ったではありませんか。

柚里は仕方なしに、小さな器に少しだけチャーハンを盛ってあげて、アキくんの前にことりと置きました。

アキくんは大きな瞳をウルウルとさせて、がっつくように器に飛びつき、湯気の立つチャーハンをまぐまぐと食べ始めました。

本当においしそうに食べます。

新鮮な野菜の時はあんなに嫌そうに食べていたのに、あつあつのチャーハンを熱がりもせず食べています。

ちりん♪

いつもの綺麗な音が聞こえました。

やはりアキくんから音が聞こえてくるようです。

柚里はアキくんをひっくり返して音の出所を調べたかったのですが、美味しそうにご飯を食べているアキくんに、そんなことはできませんでした。

そのかわり、自分の皿からチャーハンをよそってアキくんの器に盛ってあげました。

自分の作ったご飯を、美味しそうに食べてくれる。

柚里はたとえそれがうさぎだとしても、とっても嬉しく思いました。

第五話（後書き）

ホームセンターで購入したものは、なんとドア一枚だったります。

そのドアを加工して、トイレのドアと交換しました。

ほら、アパートですから、トイレのドアを傷つけたら駄目でしょう？（爆）

第六話

はぐはぐと美味しそうにチャーハンを食べ終わったアキくん。
ちょこんと座りなおしてじっと柚里を見つめます。

「ごちそうさまでした。美味しく頂きました」

ちりん ♪

この時の柚里の驚きようつたらありません。
だって、うさがしゃべったんですよ？

普通ならあり得ないことです。

柚里はアキくんを拾ってから一生分驚いたような気がしてきました。

「アキくん……しゃべれるの？」

けれどそこは不思議うさぎのアキくんに微妙に慣れてきた柚里のことです。驚きよりも好奇心のほうが優先しました。

「今しゃべれるようになってん。魔法がちょっと解けたみたいやし」

またまた柚里は驚いてしまいました。

だってしゃべったと思ったたらなぜか大阪弁をしゃべっているではありませんか！

それにアキくんは確か『魔法』といったのです。

ありえないーい。

柚里は天井を仰いでしまいました。
だって、いくらなんでもやりすぎです。
おもしろネタすぎです。

「俺……しゃべったらあかんかった？」

柚里の反応を見てアキくんは自分が失敗したのだと思いました。
美味しいご飯を出してくれたら『ごちそうさま』というのは礼儀
として至極当たり前のことだと思っただのですが、やはりうさはし
やべるものではないようです。

けれどもうしゃべってしまったからには後戻りはできません。

「しゃべったら駄目というよりも……どうして大阪弁？」

やはり何よりそこが気になってしまった柚里でした。

「へ？俺、普通に喋ってるだけやけど。大阪弁ってなに？」

「今アキくんが話している言葉の使い方だよ。私とは違うでしょ？」

たしかにそう言われてみれば違うような気がします。

「だって、これは男のしゃべり方やねんろ？柚里は女の子やから
そんな風にしゃべるんとちゃうん？」

「違います！アキくんは大阪っていう場所で使われる言葉をしゃ
べってる。私とは違うよ」

「あんの馬鹿……」アキくんはふるふると前足を震わせて誰かを
罵倒しているようです。大阪弁で『馬鹿』というのは最上級の悪態

です。

「それに『魔法』ってなに？」

柚里にはわからないことだらけでした。

「あー。詳しく話したら長いで？ええん？」

長かるうが短ろうが、ちゃんとした説明がほしいので、そこはコクコクと頷くほかない柚里でした。

どうせ今日一日はアキくんのために会社を休んでいるので時間はたーっぷりとあります。

こほん。

軽く咳払い（！）をしたうさぎのアキくんは、テーブルの上にあらりました。

そして語り始めたのです。

あるところにフィーヨルという国がありました。

その国の王子であるアキエテラヴオリ（アキくんのことらしい）は、乱暴者でいたずらばかりするやんちゃなものでした。

ある時、宝物庫にある父王が大切にしている国宝の剣を偽物にすり替えて、本物の剣で遊んでいた時に、ちょっとした手違いで剣に込められた魔法が発動してしまい辺りを粉々に打ち砕いてしまいました。まあ、いっちゃえば、城を一つ粉々にしたっていうことです。これには父王も激怒してしまい、アキくんの教育係でもある魔法

使いを呼び寄せてアキくんに罰として魔法をかけて世間を見て来いと国から追い出してしまいました。

その魔法でうさぎになっちゃったアキくんは、世間を見ようにもしゃべることもできませんし、ご飯を食べることもできません。

このまま餓死をするのではないかと思ったときに、柚里を見かけたのだそうです。

「それって、自業自得っていうんじゃない？だって城を壊したんでしょ？」

「うー。そうやねんけど。そないにずばつと言わんでもええやん」

いたたまれなさから前足で耳を垂らして顔を隠すアキくんは、どこからどうみてもうさぎにしか見えません。

とーっても可愛いうさぎの姿なのですが、そのうさぎは悪いことをして罰を与えられている最中なのです。

「じゃあアキくんはこれからどうする？ずっとここにいる？」

よく考えたらアキくんは元は人間のようですから、乙女一人の部屋に置いておくというのもどうかと思いました。

それに『世間を知って来い』という父王の命ともあわないような気がします。

「俺、まだこの世界よう知らんさかい……その、よかつたらここに置いてくれへんやろか」

おやおや。

乱暴者でいたずら大好きだという王子様の言葉とは思えないほど丁寧な願いをしました。

それに見た目は完全にうさぎのアキくんですから、柚里としてはかわいらしいアキくんを本当は手放したくはなかったのです。その上アキくんは柚里の作ったご飯を美味しいといって食べてくれるのです。こんなに嬉しいことはありませんでした。

こうして柚里はおしゃべりできるうさぎのアキくんと一緒に暮らすことになったのです。

第七話

せつかくしゃべれるようになったアキくんがいるのです。

柚里は知りたいことを教えてもらえるかと思って、アキくんに聞いてみることにしました。

「アキくんを雨の中に拾ったときからたまに『ちりーん』と聞こえるのは、魔法の関係？」

「そうやねんけど……詳しく話したらあかんねん」

困ったように耳を垂らして、アキくんは上目遣いで柚里を見ました。

「？」

「あんな？魔法掛けられてるゆうたやん？その魔法解くんにやらなあかんことあるねん。でもその『やらなあかんこと』をゆうてもうたら魔法が解かれへんようになって、俺一生うさぎのままになるねん。そういう枷がある魔法やねん。せやから話されへん」

「王様の言うように世間を知って国に帰ったらうさぎになっている魔法を解いてもらえるんじゃないの？」

「それがちやうねんなあ。そんな簡単なことやったら苦労せんて」

大きくため息をついて、アキくんは続けました。

「俺、そんだけおやし怒らしてもうてんなあ。まあ城壊してもうたから、当たり前っていえば当たり前やねんけどな」

たしかに城を壊すということはとても大変なことなのです。

城というのはその国の要でもありますので、城がなければ守りがなくなり敵に攻め入りやすくさせてしまいます。というか、敵が攻めてきます。

ですから、もしかしたら今頃、アキくんの故郷であるフィヨル国は戦乱の渦に巻き込まれているかもしれません。

父王はアキくんを戦争から遠ざけるために、それとも戦争になる引き金となったアキくんを守るために国外へと脱出させたのかもしれませんが。

問題はアキくんが自分がどれだけ大それたことをしてしまったかという自覚のなさなのです。

それもあって父王は国外に出すことによりアキくんに『王子である自覚』を身につけてもらいたかったのかもしれませんが。

「なんとなく、王様がとーってもお気の毒になってきた」

柚里は会ったこともない王様の心痛を慮って、胸が痛くなりました。

わたしって、もしかして貧乏くじを引いた感じ？

うさぎとしてのアキくんは、とても可愛くて素直そうに見えます。それに話することができるというおまけ付きです。ある意味、かなりお買い得感があります。

けれど人間としてのアキくんは、まだまだ自分の立場に無自覚のおこさまのようです。

無自覚な王子様を教育し直してフィヨル国に返さなければ、戦争だけでは済まないような気がしてきました。

『もしかして貧乏くじ』ではなく、『思いつきり貧乏くじ』です。
はあ。

きよとんとしているアキくんを見ながら、ため息をついてしまったの仕方がないでしょう。

そんな柚里を気遣わしげに「どないしたん？」と聞いてきたけれど、ため息の原因に聞かれても返事のしようがありません。

「なんでもないよ。大丈夫」

こういったときの定番の言葉をアキくんにとって、その場を誤魔化す柚里なのです。

第八話

あくる朝。

柚里はいつもの日常である、お仕事です。

ということは、アキくんが一人でお留守番になるということです。けれども柚里はアキくんを一人で家に置いておくのがちょっとだけ不安でした。

この世界を何も知らないアキくんのことです。何をしでかすかわかったもんじゃありません。

それでも仕事に行かないといけませんでしたので朝早くから仕事用のお弁当とアキくん用にワンプレートに盛ったお昼ご飯を用意しました。

そしてアキくんに言いました。

「私は仕事に行かないといけなくはないけれど、お留守番できるよね？」
「おるすばん？」おるすばん』ってなんや？」

意味がわからなかったようで、首をかしげています。

あらら。

いきなり失敗です。

そういえば、アキくんは王子様でした。

お留守番なんてしたことがないのでしょう。

ですから、お留守番という言葉も意味も知らないということだったようです。

そこで柚里は言いました。

「お留守番っていうのは、お出かけしない人が誰もいなくなる家

を守ることをいうんだけど」

「でも、柚里の家を守るなんて必要ないと思うねんけど」

「どうして？」

「だって、盗られるもんないやろ？宝石とか剣とか、書物もない
ようやん？それに今まで柚里一人でここにおったのに、俺がおるか
ら守らせるっておかしいやん」

ぷちん。

柚里のなにかが切れた音が、柚里の耳にこだましました。

アキくんは柚里のこめかみに急に浮かんだ青い筋をみて驚きまし
た。

どうしてそこにそんなものができるのか、柚里の具合が悪くてそ
んなところに筋が立つのかと思いましたが、それでも口を閉じませ
ん。

「あれやったら、俺外におるさかい。それでええんとちゃうのん
？」

その言葉が終わるか終わらないか、柚里の手がアキくんに延びるか
延びらないか。

気がついたら柚里はうさぎのアキくんの小さなほっぺたを両手で
つまんでうりうりとしていました。

「この口かな？この口がそんな偉そうな言葉を吐くのかな？」

「ゆふり、いはいいいい。いはいつて！ー！」

「ん？聞こえないなあ」

にこやかにほほ笑みつつも、柚里は指をアキくんの頬から離すこ
とはしません。

だって、アキくんはとーっても失礼なことを言っただからです。

どおりで『世間を見て来い』などと王様がいうわけです。納得です。

「あのね、アキくん。王子様の感覚じゃあうちの家は倅しい家かもですけど、私にとってはここは大切な家なんですよ？そりゃあお城に住んでいる人にとっては拭けば飛ぶような家ですけどね。でも私にとってはここはお城と同じなんですよ？それを言うに事欠いて『守る必要がない』とか『盗られるものがない』とか。挙句に『今まで私一人でいたから守る必要がない』ですって？」

「ゆふり！！いいいいいっ！！」

「それに外にいくだあ？この世界のことなーんにも知らないくせに。うさぎの姿で一人で外に行くなんて、のら猫に殺^やられるってことがどうしてわからないんでしょうかねえ？？」

ぐりぐりぐり

ちょっと指に力が入ったようです。

アキくんはひーひーいいながら涙目になりました。

その様子に気がついて、ぱっと手を離れた柚里ですが、アキくんのうらみがましい潤んだ目を見てちよっとだけ反省しました。

やりすぎたかな？

でもあんな風に言われて、かちんとこないほうがおかしいよ。

それに自分の今の姿がどんなに弱いのか、ぜんぜんわかっていない。

一人でなんて外にいけるわけないじゃない。

「柚里、なにすんねん！ほった痛いがな。絶対腫れてるって」

前足で頬をさすりながら、アキくんは文句を言いました。

あいも変わらず涙目ですが。

「何？アキくん。私の話を聞いてなかった？」

「はあ？何ゆつてんねん。ほつぺた痛うてそれどころやないやん」

うつ。

そう言えば確かにそうかも。

柚里は反省しました。

たしかにちゃんと言話を聞いてほしかったら、ほつぺたをつねるのは間違っていました。

「そうね。話をきちんとしてからその減らず口をつねればよかったってことよね？」

「ちやうがなああつ！！」

速攻で突っ込みが入りました。

アキくん。世間を知らない割には『ぼけつつこみ』は知っているようです。

あと足りないのはびしっと張り手をするくらいです。
本当に不思議なうさぎさんですね。

「とりあえず、もう時間だから仕事に行くね。ちゃんこの家の中で私が帰ってくるのを待っててね。……わかった？」

「……わかりました。待ってます」

半眼にした迫力のある柚里の顔を間近までもって来られて、アキくんは引き気味に答えました。

「いってきます」といって玄関から出ていく柚里を見送ったアキくんは、外から鍵を締める音に驚いて、たたたとリビングに逃げ

込みました。

さっきまでは柚里と二人、この狭い部屋で楽しく過ごしていたはずなんです。

それなのに、鍵を閉めるがちゃんとなる音が狭い部屋に響いたと思ったら、部屋が急に大きく膨らんで、お城の大広間よりも大きな部屋になったようにアキくんは感じました。

あの音は、淋しい音やねんなあ
嫌いな音や

アキくんは、まるでそれを見続けていれば今すぐドアが開いて柚里が帰ってくるかのように、玄関をただただ見続けていました。

第九話

うさぎの感度の良すぎる耳には、部屋の音がよく聞こえます。

さつきまで温かった部屋の音は、鍵を閉める音が聞こえた瞬間に冷たく冷めた音になりました。

しーんとしたしじまの音。

その音から逃れたいばかりにアキくんは耳を前足で塞ぎましたが、耳の奥までその音は忍び込んできます。

バスタオルを頭からかぶっても、音はアキくんを悩ませました。

だんだんと音に追い詰められたアキくんは、部屋の片隅でじっとしていることにしました。

そうすることで音など聞こえなくなるんだと、まるで自分に言い聞かしているようでした。

どのくらい部屋の片隅でじっとしていたでしょう。

ふと顔をあげると、薄いカーテンのの向こう側に影を見つけました。

ゆらゆらとカーテンと一緒に動く、海松茶色みんちやのような薄暗い色。

ふうわりと大きくなったかと思うと急にしぼみ、また大きくなる影に、アキくんはびくつきました。

けれどその恐ろしい影はしじまの音を何処かへやってくれましたのでアキくんは少しだけ安心してしまい、その影にお礼が言いたいくらいになりました。

そこで無謀にも影に近づいたのです。

みゃう

カーテンの向こうにいたのは、大きな大きな黒い猫でした。

人間であつたときなら、猫なんてこれっぽっちも怖くなかつたアキくんでしたが、うさぎになった今では、猫は強大で凶暴な捕獲者なのです。恐ろしい化け物になっていました。

その化け物が、ガラス戸の向こうでアキくんをじつと見つめていました。

おいしい餌を見つけたとばかりに舌なめずりをしているように思えました。

怖い

ガラス戸があるかぎり、黒猫は部屋にはいってこれません。

それなのにアキくんはだだだだつと逃げ出しました。

そうしないと食べられてしまうと本能で思つてしまつたのです。

人間のはずのアキくんが、猫をみて本能で逃げるといふのはおかしな話だと思いますが、人間だって自分よりも身体の高い動物を見たら恐怖で固まるか逃げ出してしまうでしょう？それと同じことなのです。

このときになってやっとアキくんは朝出かけるときに柚里が言つていた言葉の意味がわかつたのです。

『うさぎの姿で一人で外に行くなんて、のら猫に殺^やられるつてことがどうしてわからないんでしょうかねえ？』

そうです。アキくんはわかつていませんでした。

だって、うさぎになって国を出されてから雨の中で柚里に会つまでに動物に会わなかつたのです。

ですから自分が人間と同じ感覚のままで外で歩いていたのです。

ガラス越しでもこんなに怖いのに、実際外で出会ったらどんなに恐ろしいことでしょう。

こわごととガラスの向こうを覗いたら、いつの間にか黒猫はいなくなっていました。

そのことに心底ほっとしたアキくんでしたが、しばらくカーテンの近くに行くのはやめようと思いました。

人間やったら猫なんて怖くもなんともないのに、うさぎの俺にはなんて恐ろしい生きものに見えるんやろう

立場が違うとこんなに捉え方が違うなんて思ってもみいひんかったわ……

そしてアキくんは、自分の立ち位置だけじゃなくてその人の立場にならないと物事を理解することがむずかしいんだということが分かったのです。

ちりーん♪

魔法の鈴の音が聞こえました。

こんな当たり前のことでも鈴の音が聞こえるなんて俺ってどんなに何も知らないあほやったんや？

魔法の鈴は、アキくんが成長した証の音。

今まではその音を聞くと早く人間に戻れると単純に喜ぶだけだったのですが、今日のアキくんは違いました。

朝の柚里の言葉のせいかもしれません。

自分がいかににも知らない、知ろうともしない王子だったのか、ちよっただけ理解したからかもしれない。

成長の証の鈴の音。

これから人間に戻るまでにどれだけの鈴の音を聞かないといけ
ないのかと思うと、自分の情けなさにつくりきてしまったアキくん
でした。

第十話

自分が急に臆病になったのかもしれないと怪しんでいたアキくん。

それでもお腹は減るわけで。

ぐううううゝ

うさぎの小さいお腹はでは、一日二回のご飯では身体が持ちませ
ん。

野生の動物ってどうやってお腹を満たしてるんやろうなあ
餌確保するんでもものごつつう大変そうや

俺はたまたま柚里が拾ってくれたけど、もし柚里と会われへんか
ったらどうなってたんやろ

そう思うと柚里に感謝する気持ちかわいて出ました。

アキくんは、王子様です。

それもフィーヨル国は近隣の国々よりも大きな国でした。

商業が発展していて諸外国との流通も盛んですし、経済も安定し
ています。

めったに手に入ることのない果物や干し肉、魚が王宮では当たり
前のように並んでいましたし、いつも食べきれないほどの料理がテ

ーブルに並んでいました。

それに、食事の時間ではなくても部屋の片隅にはかならず果物がつまめるように置いてありました。

つまりアキくんは『お腹が減る』という本当の意味を知らずに大きくなったのです。

そりゃあ人間ですから、お腹がすくのは当たり前です。

ちよつと小腹がすいたなんてことはありますが、お腹の皮と背中の皮がひつつくほどの空腹を、喉をかきむしりたくなるほどの渴きを味わったことなど、王子さまであるアキくんは味わったことがありますでした。

礼儀として食事を出されたら感謝することは知っています。

でもそれは礼儀、なのです。

心のこもる感謝の言葉ではないのです。

ところが昨日は違いました。

柚里の出してくれた食事に、心からの感謝を言うことができた。

死にそうになるほどの空腹のときに出された、温かい食事です。

これを食べたら死なないということと、その料理を出してくれた柚里に心から感謝したのです。

ですからあのときに『ごちそうさまでした。美味しく頂きました』と心からいたからこそ鈴の音が聞こえたのでしょし、言葉も話すことができるようになったのです。

でも本当はまだまだわかっていません。

アキくんが言葉の意味をきちんと理解できるのは、このあともう少し先になります。

アキくんは柚里が用意してくれたワンプレートのお弁当の前にちょこんと座って『いただきます』といいました。

食事を用意してくれた柚里に『ありがとう』という意味です。

残念。

あとちよつと考えを深くしたら『いただきます』という言葉の本当の意味がわかることでしょう。

けれども今までの生活からすると、従者に促されずに『いただきます』と言葉が出たのは初めてのことです。

少しずつでもアキくんは変わっていつているようです。

用意されたお弁当を手づかみ（これは仕方ありません）ではぐはぐと食べ始めましたが、やはり一度では全部食べることができませんでした。

ですが一旦食事を終えるという意味で「ごちそうさまでした」とアキくんは言いました。

誰が聞いているわけでもないのですが、もしかしたら独り言と間違われてしまいそうですが、感謝の言葉は思っているだけではなく口から自然にでるものなのです。

お腹が満腹になったアキくんは、柚里のベッドの下で、自分の寝床になっているバスタオルにごろんとこころがってうとうととし始めました。

お腹は一杯だし、寝床は清潔だし、家の中にいるということでは
心感もあつてか、アキくんは幸せでした。

王子さまだったころはこんなことで幸せを感じるなんてありえま
せんでした。

だって、いつだってお腹は満たされているし、アキくんの不快を
取り除くべくいつだって誰かがそばにいてアキくんの世話を焼いて
くれていましたし、お城という強固な守りと王族を守るべく配置さ
れた衛兵が必ずアキくんのそばに控えていたので安心なのは当たり
前だったのです。

この安心は柚里がアキくんにくれたものでした。
アキくんは、そのことでも柚里に感謝しながら、眠りについたのでした。

第十一話

どのくらいうつらうつらとしていたのでしょうか。

アキくんが緩やかな眠りから覚めて辺りを見回すと、そこは綺麗な茜色の世界でした。

金属にキラキラと反射した光が煌めいて、部屋の中を美しく彩っていました。

その色はもうすぐ夜の帳が下りることを物語っています。けれどもまだ柚里は戻ってはいないようでした。

柚里、まだかなあ

仕事っていつたいいつまでやってんやろ

もう帰ってきてもいいんとちゃうのかなあ

アキくんは王子様なので、時間が決まった仕事などしたことはありませんでしたが、城の中にはいろんな職業の人がいますのである程度の時間というのはわかつているつもりでした。

王様には決められた時間はありませんでした。寝所に下がったとしても火急の用でいつだって使者がやってきますし、食事をとっていてもいつでも宰相が横に控えてなにやら難しい話をしながらの食事をしていました。

宰相が登城するのは陽が昇りはじめる前で、それでも夜遅くまで仕事をしていました。

文官たちの登城は宰相と同じでしたが、日が陰る前に帰って行きました。

武官たちは二交代制でしたから、登城時間もまちまちです。

王様と宰相を除けば、だいたい一人半日ほど働くと帰っていきま

す。

ということは、柚里も朝早く出かけたのですから、もう帰ってきていい時間のはずです。

だいたい女性が文官で働くというのはとても珍しいことだと思っ
ていました。

城で働く女性というのは女官か侍女、もしくは洗濯場ときまつて
いましたから、柚里が文官だということは驚き以外何物でもありま
せんでした。

帰りが遅いんはやっぱり女性で文官してるだけあって柚里が優秀
だからかなあ

あいかわらず物差しが自分なので、世界が違ふということが未だ
にのみ込めていないアキくんなのでした。

起きたついでに小腹が空いたので、お弁当の残りをましましと食
べ始めたころ。

がちゃがちゃがちゃんっ！

「ただいま。アキくん、いい子にしてた？」

柚里が飛び込むように部屋に入ってきました。

そしてアキくんをむんずと掴んで頬ずりをしました。

ちりーん♪

魔法の音楽が聞こえます。

どうしてその音が鳴るのかアキくんも柚里もさっぱりわかりませんでした。柚里は頬ずりをやめることはありませんでした。

なぜって、柚里は嬉しかったんです。

本当に本当に嬉しかったんです。

だって、誰かが家にいてくれるなんてことは、一人暮らしをし始めてからなかったことなのです。

それに相手は王子様といえど今はかわいらしいうさぎさんです。

その姿は愛らしい以外何物でもありません。

愛らしい生きものが家で待っていてくれるなんて、嬉しくないはずがありませんでした。

「遅かったなあ」

「えー？遅くはないよ。いつもこのくらいだし」

「遅いつて！もう暗いやん。一体何時間働かなあかんねん」

「えーつと。だいたい8時間くらいかな？でも通勤時間があるから2時間たして、十時間は帰ってこれないね」

これにはアキくんは驚きました。

だって十時間ですよ？

アキくんは十時間一人で『お留守番』をしていたことになります。それに女性が十時間家事以外で働くというのにも驚きです。

だって、女性は家事をしなくちゃいけないのに、外で十時間働いていたら家事をする時間はなくなりますし、家事をしたら今度は寝る時間がなくなるではありませんか。

「あかん。柚里、そらあかんて」

まだ頬ずりしている柚里のほつたを短い前足でぐいぐいと押して頬ずりをやめさせました。

そして前足でぺしぺしと柚里の鼻を叩いていいました。

「そんな働き過ぎやん。身体おかしなるで？」

「うわー。アキくんが私の心配してくれてるよー」

家に誰かいてくれるということだけでも嬉しすぎてどうしようと思っていた柚里なのに、アキくんは柚里の身体の心配までしてくれるのです。

アキくん、拾ってよかったあ

思わずアキくんにキスをしようとした柚里でしたが、アキくんの前足に阻まれてしまいました。

「あかんて。ほんま。女性がそんなに働くのはようないで？そんなに働いたら寝る暇ないんとちゃうんか」

「寝る暇って。……結構あるけど？」

「えええ？？なんで？？十時間外で働いてて、家に帰ってきたら家事せなあかんのやろ？家事なんてめっちゃ大変やん」

「アキくん……？もしかしてまたアキくんの国の生活とこっちの生活を比べてない？」

「比べるもなにも。家事はどこでもいっしょやん」

ちつつち

ちつつとお下品にも舌をならして柚里は言いました。

「こちらの世界はなんでも機械がしてくれるんだなあ。だからたぶんアキくんの国とは家事にかかる時間が全然違うと思うよ？ほら、お水だつて水道の蛇口をひねると出てくるでしょ？それにトイレだつて水でながせるじゃない」

「水でながせる……？どうやって？」

「どうやってって。昨日アキくん使ったでしょ、おトイレ」

「そら使ったけど。でも水流すって意味がわからんのやけど」

アキくんは心底わからないとばかりに、首をちよつと傾げて柚里の頬を両手で掴みました。

「え……。アキくんってばトイレ使った後に水流さなかったの？」

「だから。なんで水流すとかそういう話になるん？」

「え。え。えええええつつつ?!」

柚里はアキくんを両手に掴んだまま、ごろんと後ろにひっくり返ってしまいました。

だって、トイレに猛ダツシュしたアキくんだから、使い方を知っていたと思ったのです。

だけどよく考えてみたら、アキくんの国はこと違ってもう少し文明が遅れているようなのです。

ということは水洗トイレを知らなくても仕方がないし、本当に水道がないのかもしれない。

はあああああ

アキくんは何を教えるって、生活の一から全部教えなくちゃいけないということに柚里はやっと気がついてがつくりとうなだれてしまったのです。

第十二話

柚里とアキくんの不思議な生活がリズムにのり始めたころ。

柚里はそろそろアキくんが暴れたくて仕方がないんじゃないと思
い始めるようになりました。

だって、アキくんはフィーヨルの国ではやんちゃな王子様だった
のです。それが原因で国から出された身の上です。いくらうさぎに
なったとはいえ生来のやんちゃな気質が素直に治るとは思っていな
かったものですから、ここはひとつ力いっぱい疲れさせてみよう
と考えたのです。

そこでその計画に必要なものをこっそりと揃えることにしました。
夜遅くに帰宅すると心配知るアキくんを思っ、お昼休みにダッ
シユで会社近くのペットショップに行って買ったのです。

日曜日。

日の出とともにむっくり起き出した柚里は、いつものようにお弁
当を手早く作り始めました。

アキくんはうさぎなのでもともと朝がとても早くて、キッチンに
立つ柚里の足元にじゃれついて一通り遊んだ後にソファの上でちょ
んと座って柚里の支度が終わるのを待っていました。

「アキくん。今日は仕事が休みなんだよ。だから外へ一緒に行か
ない？」

アキくんが座るソファの横に座って、覗き込むようにアキくんを
見て柚里が言いました。

「外……？」

「そう。だって家の中だけだったらくさくさするでしょ？だから公園に行って遊ばない？」

その言葉にアキくんはちよつとムツとしました。

柚里がアキくんのことを何歳くらいに思っているのかわかったからです。

いや、本当はわかっていました。

柚里がアキくんをどのくらいに思っているのかなんて。

だって柚里はいつもアキくんを子供扱いしていました。

仕事から帰ってくるといつもアキくんを抱き上げて頬ずりしてくれるのも、アキくんがいくらうさぎだとはいえまだ小さな子だと思っ
ているからできることだと思つと、自分の本当の年齢を柚里に告
げることが得策ではないと自分から口を噤んだので、柚里がアキく
んの年齢を知るのは自分から言うか人間に戻ったときになるはずで
す。

別にうそついてるわけやないし。でもなんか腹立つなあ。

自分を一人前の男として見てくれない柚里にちよつと悲しくなり
耳を垂れたアキくんに、柚里は勘違いをしてしまいました。――

――公園に行きたくないんだつて。

おかしいなあ。絶対暴れたいと思つたんだけど。

それじゃなかったら、カーテンのうちに入って外をじつと見なが
ら後ろ足をだんだんとしないだろうし。

それともアキくんは自分が外に出たいっていうことに気がついて
ないのかな。

こまつたなあ。

柚里は後ろ手に持っている袋を手持無沙汰にいじり始めました。その中にはアキくんにプレゼントしようと思っていたものが入っているのですが、渡す機会をうしないそうです。

がさがさがさ

紙の擦れる音に敏感に反応したうさぎの耳が、アキくんを目覚めさせました。

うさぎは紙が大好きなんです。

新聞紙を与えると、びりびりに破いてしまつくらい大好きなんです。

その大好きな紙の音が柚里の後ろから聞こえてきたので、アキくんは耳をぴょんと立ち上げて柚里の後ろに回りました。

「なあなあ、柚里。この紙袋、何？」

素早いアキくんの行動に驚いた柚里でしたが、これ幸いにアキくんにこのプレゼントを渡すことにしました。

「えーっとね？これ、アキくんにつけてもらおうと思って買ってきたんだ。開けていいよ」

「ええっ？俺にくれるん買^こうてきてくれたん？それってプレゼントやん！」

アキくんは飛び上がって喜びました。

王子さまだったころは献上品と称した賄賂のようなものが当たり前のようにアキくんに渡されてましたが、アキくんはそういったものは受け取ってきませんでした。なぜなら宮廷には派閥という面倒くさいものがあって、もし献上品を受け取ってしまったら派閥の人

たちがいい気になるからです。

ですからそういった下心がないプレゼントというものをアキくんは王様以外からはありませんでしたので、柚里が何かをアキくんのために用意したと聞いたので舞い上がってしまいました。

「うわー、うわー、うわーっ！俺、めっちゃ嬉しいねんけど！」

「……そんなに喜んでもらって嬉しいんだけど、そんなに喜ぶような品物じゃないんだけど」

あまりのアキくんの喜びように驚いて、自分が何を渡すのかと思うとちょっと申し訳なくなった柚里でした。

「なあなあ！開けていいん？開けるで？」

歯で袋を噛みながら、嬉しそうにアキくんは袋を開けていきました。

中から出てきたのは、綺麗なえんじ色に光るエナメルの首輪でした。

「これって……ネックレス？」

「まあ、言いようによつてはそうかも？」

「ネックレスやねんな？」

「う……うん。首輪、っていうんだけどね？」

アキくんはそのネックレスを嬉しそうに持ち上げて、柚里に差しだしてこう言いました。

「つけてくれる？」

「もちろん、いいよ」

実は首輪をアキくんは嫌がるんだと思っていたので、声にならな
いほど喜んでもらえるとは思ってみなかった柚里は、にっこりとほ
ほ笑みながらアキくんに首輪をつけてあげました。

ちりーん♪

いつもの綺麗な魔法の音が聞こえました。

けれど今回もどうして音が鳴るのか柚里にはさっぱりわかりませ
んでしたが、アキくんはその音を聴いてか、どうもさっきからもし
もじとしています。

「アキくん……？どうしたの？様子が変だよ」

「え……？だってそら照れるやん」

「？何を照れるようなことがあった？」

「え？なんで？ネックレスくれたんやから、照れて当然とちゃう
ん？」

柚里はアキくんが何をいつているのかさっぱりわかりませんでし
た。

首輪をアキくんにあげるとどうしてアキくんはてれないといけな
いのでしょうか。

首を傾げているとアキくんが逆に不思議そうに言いました。

「あれ？柚里は俺と結婚したいんやろ？」

第十三話

柚里は耳を疑いました。

たしかに今、とんでもない言葉がアキくんの小さな口から洩れたのです。

「ちょ……ちょっとまって？」

「いくらでも待つけど、なに？」

ネックレスを受け取ってそれと同じものを返したら、フィーヨル国では婚約成立になります。

ですのでアキくんは柚里からのプレゼントを心から喜んで、お返しを返したくてうずうずとしていました。

が、ふとあることに気がついてしまいました。

「あつ！！あかんやんっ！」

いきなりアキくんが大声で叫んだので、柚里は自分のこんがらがった頭の中がきれいにすつとんでしまいました。

そしてアキくんを見てみたら、アキくんは柚里のほうではなく後ろ向きでなだらかな肩をさらにながつくりと落としてしょんぼりしていました。

「アキくん。一体どうしたの？」

「俺……俺、あかんねん……」

大きなまあるい瞳に大粒の涙が盛りあがりました。

「俺、せっかく柚里から求婚されたのに……返されへんねん。こ

「うちの通貨わからんよって、お返し用意でけへん」

ぼろぼろぼろ

その様子に柚里は心底驚きました。

だって——だって柚里はアキくん求婚——結婚を申し込むこと——した覚えがなかったからです。

柚里はアキくんを両手で優しく抱き上げました。

そして自分の膝の上に座らせて、耳と耳の間を指で優しく何度も何度も撫でました。

その間にもアキくんの涙が足元に落ちつづけ、柚里のジーンズを濡らしていきます。

「あのね、アキくん」

柚里はことさら優しく言いました。

「私、アキくん結婚の申し込みしてないよ？」

その瞬間、アキくんの身体がこわばりました。

「な……なんで？ ネットクレスくれたやん……」

「ネットクレスがキーなんだ？ もしかして私がネットクレスをアキくんに渡すと、アキくん結婚を申し込んだことになるのかな？」

「当たり前やん！ そんなにこの世界でもそうやる？」

柚里はちよつと呆れました。

アキくんの世界と柚里の世界では常識が違うということを、そろそろわかってもいいんじゃないかと思ったからです。

優しく背中をなでながら、思わずため息をついてしまいました。

「こつちの世界では、結婚の申し込みにネックレスは使わないと思うけど」

それに女性から申し込むというのもないけどなあと心の中で言いました。

これに驚いたのはアキくんです。

だって、フィーヨル国だろうが他の国だろうが、結婚は女性から申し込み、その時にはかならずネックレスを添えるのが常識だからです。そしてそのネックレスと同じものを相手に返すと婚約成立です。

そのことを疑ったことはありませんでしたし、子供扱いしていた柚里が実はちゃんとかアキくんを男性と認識してくれているんだと喜んでいたのに、実はそれはぬか喜びだったことがとってもショックでした。

う………うっ………

嗚咽がアキくんの口からこぼれおちました。

アキくんはここに住むようになって、本当に柚里のことが好きになつていたからです。

たとえば柚里がアキくんのことを子供とかうさぎとかしか思ってくれていなくても、なんでも自分でこなそうとする、そしてこなしてしまう柚里が、心温かい柚里が、本当に好きになっていたのです。

柚里と過ごす時間は、アキくんにとって至福のものでした。

それは城の中で味わったことのないものです。

朝、柚里の足元にじゃれつくのも、柚里がとても好きだから少しでも体温を感じていたいと思うからです。

ですから、柚里から求婚のネックレスをプレゼントをされたとき

に本当に本当に天にも上る思いでした。

それが、間違いだったなんて。

柚里のジーンズの湿り気がだんだんと広がっていきました。

柚里は自分がとても冷たい人間になったような気がしました。けれど間違いをそのままにしておくのは後から面倒なことになります。だから敢えてきちんと言ったのですが……裏目に出たようです。

ひよいとアキくんを抱き上げて、大きな目をぎゅっとつぶって耳を垂らしているアキくんの額に軽くキスをしました。

それは泣きやまない子供に対するような、やさしいキスでした。

ちりーん♪

魔法の鐘の音がアキくと柚里の耳に届きました。

今回もどうして鳴ったかわからない二人でしたが、これだけは言えます。

柚里はアキくんに親愛の情は持っているということ。

アキくんは悲しいながらも、それでもいいと思いました。

これから自分の頑張りを見てもらえたら、少しは俺を見てもらえるんじゃないかと考えたからです。

涙をひっこめて、アキくんは柚里の抱き上げてくれている手をぽんぽんと叩きました。

「ごめんな。早とちりしてもうて。……でもこれなんでもくれたん？」

首をちよつと傾げて笑うアキくんにはつとした柚里は「外にいるときはこれをつけないと飼い主がいないうさぎだと思われるから」と言いました。

こちらの世界では飼っている動物に印が必要で、そのほとんどがこついった首輪になるんだということを柚里はアキくんに説明をしました。

意味がぜんぜんちゃうねんなあ。そら柚里が驚くんも無理ないなもつともつとこつちの世界のこと、勉強せなあかなあ

首輪という印が必要なのは仕方がないとわかっていても、『飼われる』という言葉に抵抗がなきにしもあらずなアキくんでした。それでもこれをつけていると外に出れると教えられて、怖いような嬉しいような気持ちになりました。

「外、行く？」

柚里が優しく聞きました。

「う……うんっ！」

涙を瞳の端に溜めて、それでも笑って、アキくんは答えました。そして数週間ぶりにアキくんの世界は広がりました。

第十二話（後書き）

やっとお家、脱出です（笑）

第十四話

真新しいキャリアバックにちよこんと入ったアキくんを自転車の前かごに乗せて、柚里は外へと繰り出しました。

アキくんにとっては、あの雨の日に柚里に出会った翌日以来の、本当に久しぶりの外出になりました。

たった数週間外に出なかった間に、外の様子は随分と変わっていました。

初めてこの世界に来たときは、なんて薄暗い世界だとアキくんは感じました。

灰色の大きな箱のような建物が所狭しと並んで、あちこちに紐のようなものがぶら下がっていましたし、区画整理しているのでしょう、木々も規則正しく並んで雑草一つありませんでした。

そしてあの雨のせいか、人は皆足早に過ぎ去って誰一人足元にうずくまっていたアキくんを気にかけてはくれませんでした。

澱んだ空気、灰色の街、灰色の人。

この世界の印象は灰色でした。

ところがどうでしょう。

朝早いせいでしょうか。綺麗に空気は澄んでいました。

そして灰色の箱が集まった街だったはずが、太陽の光を浴びてきらきらと輝き、少しではありますが緑も見え隠れしていました。そして花も。

あのときにはなかった色彩が、今はまぶしいくらいに感じられました。

柚里が漕ぐ自転車は、びゅんびゅんと風を切って走ります。

アキくんはキャリーバックから顔を出して、その風を受けていました。

新緑の緑に萌える柔らかい空気が、風になってアキくんを通り過ぎていきます。

しあわせやなあ

こんなしあわせなことなんて、そうそうあらへん

風は気持ちええし、柚里もおるし

ほんま贅沢や

しやのに俺、何を急いでんねんろ

柚里は俺を大事にしてくれてる

今はそれで十分やん

こっから俺を見てもらって、俺のことを知ってもらったらええだけの話やん

あわてるな、あわてるな、俺

じつと部屋に閉じこもっていたら『閉じこもる』という言葉の通り考えも閉じこもってしまい暗くなりがちです。

同じ言葉をぐるぐると繰り返したり、だんだんと良くない方向に考えが向いてしまいます。

けれど、外に出たのが良かったのでしよう。

アキくんは前向きに考えるようになっていました。

明るい太陽の下で、暗く考えるのは難しいものなのです。

前のかごで楽しそうにあたりをきよろきよろしているアキくんを見ながら、柚里はだんだんと嬉しくなってきました。

柚里はうさぎを飼ったことはなかったのですが、草原の中を跳ねまわるイメージがありました。まあ、アキくんは正確に言えばうさぎではないのですが、見た目は100%うさぎです。しゃべれます

が、歩けません。部屋の中をぴょんぴょんと飛び跳ねて移動しますが、十分な運動はとれていないだろうと思いました。

一日中狭い部屋で跳ねまわるだけでは絶対的に運動不足になります。

そりゃあもう家の中でくさるわけです。

それがどうでしょう。

自転車に乗ってちょっと走っただけで、アキくんは嬉しそうに風と戯れています。

たったこれだけでアキくんがあんなに喜んでくれるなんて

さっきのハプニングから立ち直るのがちよつと早いとは思いますが、それでも嬉しそうなアキ君を見て満足な柚里でした。

第十五話

街並みを駆けるようにびゅんびゅんと、柚里は自転車を漕ぎました。

するとどうでしょう。

せせこましい街並みを抜けていきなり目の前に現れたのは、広い広い川でした。

「うわあ！」

その風景を見たときのアキくんの嬉しそうな声ったら！
歓声を上げるアキくんに、満足に頷く柚里でした。

「ほら。ここならおもいつきり楽しめるでしょう？」

広い川の土手にはちよつとした場所があつて、野球場やテニス場、ゴルフ場もありましたし、スケートボードやサイクリングを楽しむ人、ジョギングをしている人たちがいました。

そこに自転車を止めてアキくんをキャリーバックから出して抱き上げると、アキくんはいてもたってもいられず後ろ足をばたばたとばたつかせました。

「なあなあ。このあたりやったらどこまで遊びにいったいいん？」

とても魅力的な場所にやってきたのです。どこまでもどもまでも飛び跳ねていけそうな気がしました。

けれど柚里はきつとアキくんの足にはついてこれません。

ですので柚里がどこまでだったら来れるのか、先に確認をしてお

こうとアキくんは考えたのです。

「ここに自転車を止めておくから、自転車が見えなくなるようなところまではいかないでね」

そうして自転車の近くにシートを引いて、辺りからとってきた石をシートの四方に置いて風に持って行かれないようにしました。今日のお部屋の完成です。

「私はここにいるから、ゆつくり遊んできたなら？」

柚里の保護者目線の言葉が痛いアキくんでしたが、川辺のしつとりと水分の含んだ空気と緑に萌える匂いが故郷のフィーヨル国を思い出させ、力がなんだか漲ってくるように思いました。

「うんっ！ちょっと一回このあたりを見てくるわ！」

柚里の手を離れてぴょんぴょんと駆け回るアキくんでしたが、途中何度か柚里がちゃんとあの場所にいるか確認をしては安心をしてまたぴょんぴょんと駆け回りました。

草の匂いが、とても好き

風の匂いも、とても好き

川の匂いは、もっと好き

川の匂いにつられ、泳ぎたい衝動に駆られたアキくんでしたが、自分の今の姿を見てそれは無理だとあきらめました。

こんなに広い川やのに、泳がれへんっていややなあ

川岸に佇んでしばらくじつと水面を見ていたアキくんでしたが、急に首筋にぞわぞわとした感覚が襲いました。

わんっわんっ

犬の鳴き声が後ろ辺りから聞こえました。

けれどもフイーヨルの国の犬はみんなと言っていいほどほとんどの犬種が小型犬で、うさぎのアキくとほとんど同じくらいの大きさなので、アキくんは油断してしまいました。

がさがさがさっ

草をかき分けて現れた犬は、アキくんよりも何倍も何倍も大きな大型犬だったのです。

「うわあああっ！！！！」

アキくんは大声をあげて逃げまどいました。だって、自分よりも何倍も大きな犬ですよ？怖くないほうがおかしいでしょ？

ぴょんぴょんと跳ねまわり逃げるアキくんをおもしろそうにその犬は追いかけてました。

ちなみに犬の代弁をするならば、このときこの犬はべつにアキくんを取って食おうなどおもっているわけでもなんでもなかったのです。だいたい飼われている犬は十分すぎる餌を与えられているのが常なのですから。

それなのに、犬を見かけたとたん叫びまわられて、犬はちょっとショックでした。

ですのでちょっとだけ面白おかしく追いかけてまわしてやろうとい

う出来心だっ たんです。

「柚里っ、柚里っ、ゆーりーっ！！」

がさがさと草むらを逃げまどうアキくん。

柚里に言われていた目印の自転車を見失ってしまいました。

必死で草むらから出ようとしても、大きな怪物のような犬が後ろから襲いかかります。

たすけて……っ！

久しぶりの全力疾走は、運動不足の身体にはきついものがありました。

そうこうしている間に、他の犬も騒ぎを聞きつけてやってきたのです。

挟まれるように吠えたてられて、アキくんは身動きが取れなくなっていました。

こわいっ！

アキくんはこの時ほど身体の小ささと脆さを思い知らされたことはありませんでした。

本当の姿なら、犬なんて簡単に蹴散らすことができました。

それなのにうさぎのこの姿では逃げまどうことしかできません。

柚里の家で安全に暮らしていたときに、ガラス越しに見た猫を思い出しました。

あれだけでも怖かったのに、間近で自分よりも何回りも大きな犬二匹に挟まれているのです。恐ろしくて竦んでも仕方がないのです。けれどもアキくんはそんな弱虫な自分がとてもなく嫌でした。嫌で嫌で仕方がなかったのですが、どうしても動くことができません。

せん。

「お前たち！何に吠えてるんだ？」

その声に反応して、吠えていた犬たちがぴたりとなきやみました。そして声の主に媚を売るようにきゅーんと啼いているのです。

「どうした……？なんだ、うさぎじゃないか。どおりで吠えるはずだなあ」

そう言って固まっているアキくんをそつと抱きかかえました。ごつくて大きな手がアキくんを包み込みます。そして優しく撫でくれましたが、アキくんは何とも言えない屈辱感でいっぱいでした。

俺……、情けない

ギョツと目をつぶって泣きそうになるのを必死でこらえています。

そんなことを柚里以外の人の前でするのは嫌だったからです。

「あー。お前、飼い主がいるんだな。綺麗な赤いエナメル首輪、してるもんな」

その人は首輪に付いたタグをみて、にっこりとほほ笑んでアキくんをみました。

そしてポケットからなにやら棒のようなものを取り出して指で棒を圧しています。そしてその棒を耳にあてていきなり話し始めました。

「もしもし？うさぎのアキくんの飼い主さんですか？」

アキくんは驚きました。

その人の話を聞いていると、どうやら柚里と話しているみたいなんです。柚里はどこにもいないのです。

「……はい。ああ、堤防の下の方？赤い自転車？了解。じゃあそこまで行きますので」

棒をポケットに入れ直して、アキくんを抱きかかえたまま「ほら行くぞ」と犬たちに言いました。

けれど思いなおしたように犬たちの首輪に紐を結えて、その紐を手握りながら歩き始めました。

「すまんなあ。いつもならリードをつけているんだが、今日は誰もいないと思ってリードを外したんだよ。怖い思いさせたな」

言葉なんてわかるはずもないうさぎに、その人は優しく話しかけてくれました。

アキくんはそんな優しさがとても辛くて痛くて情けなくて、自分が本当に嫌になりました。

第十五話（後書き）

文中に、リードをつけずに犬の散歩をさせているシーンがありますが、これはこのお話が架空のものであるためにできることで、現実としてはいけないことです。

まぎらわしい書き方をしてご迷惑をおかけいたしますが、ご了承くださいますようお願いいたします。

第十六話

「わざわざここまで連れてきてくださって、ありがとうございます」

「いや。こちらこそ、アキくんには怖い思いをさせてしまいました」

アキくんには見失ってしまった目印の自転車をみつけたその人は、ぺこりとお辞儀をする柚里の前に、手から感じる体温が少し上がったように思いました。

「アキくんをうちの犬たちが挟み込むように吠えていたので、随分と怖かったと思います。本当に申し訳ないことをしました」

「いえ。私のほうこそ誰もまだきていないとばかり思っていたので、リードを外してしまっていて……」

大きく力強い手から優しく細い腕の中に移ったアキくんは、涙が見えないように俯いていました。

初めて会った二人の会話は、それはそれは大人の会話です。

アキくんが本当は人間だと知らないその人は、柚里に抱かれたアキくんを優しく何度か撫でた後、犬の散歩に戻っていきました。

なんだかとても自分が子供に思えました。

「アキくん？大丈夫？」

柚里も優しく背中をなでてくれました。

けれどもアキくんは今しがた味わった恐怖と、そして屈辱感で、口を開くこともできませんでした。

「……ごめんね。私のアイデア、よくはなかったね」

ぶんぶんとアキくんは首を横に振りました。

だって、さつき犬に追いかけて回される前までは、本当に来てよかったと思ったのです。

久しぶりの外は本当に清々しくて、どうでもいいようなことをぐるぐると考えていた頭の中を綺麗にしてくれましたし、なによりも風を身体に感じるというのは本当に気持ちよかったのです。

柚里の家は本当に安全で快適です。

雨風が凌げますし、怖い外敵も入ってくることはありません。

そのかわり締めきった扉のおかげで動かない空気が、どんどん澱んでいくのです。

使わない身体が、どんどんなまっていくように。

ですから柚里が考えてくれたこの外出は、アキくんにとってはとても大切なことでした。

「……ごめんな、柚里。俺……俺。また迷惑かけてもうた」

なんとか絞り出すように出せた声に恐怖がのっかっているように祈りながら、アキくんは自分の不甲斐なさを謝りました。

ちりーん♪

きらきらと光る金属の音色が聞こえてきました。

それはたぶん、アキくんの意識が少し変わったことによる音だったのかもしれない。

「アキくんが謝ることなんてないんだよ？私が遊んできたらって

言っただし。辺りにペットを連れている人がいないって思ったから……本当にごめんなさい」

ぺこりと柚里が頭を下げました。

柚里はいつも悪ないのに、なんで頭下げるんや
俺が弱虫やから、逃げてただけのに

ちよつとだけ潤んだ黒い瞳を上にとげると、そこには申し訳なさそうに俯いている柚里の顔がありました。

「大丈夫やさかい。そないに気いもまんて？
俺、ここ来て楽しいよ。久しぶりに草の匂いや川の匂いも嗅いだし。なんや胸のもやもやがすつとしててん。……そらあ犬は怖かった。あんな大きな犬、こつちの世界にはおんねんなあ。俺の世界にはあんな大きなおらんもん。せやから俺かて油断してたんや。せやから……せやから、柚里がそんなに責任もたんといて？」

本当は柚里の顔をまともに見ることができません。
けれどもここで柚里を見ないと、柚里は自分の責任だとよけいに感じてしまうでしょう。

ですのでアキくんはここで男を見せようと、柚里には心配かけま
いとおもって頑張ったのです。

につこりとほほ笑んだうさぎのアキくんは、柚里が少しでも安心
をするように柚里の腕に凭れかかりました。

ほら、もう大丈夫
気にしない気にしない

柚里だけじゃなくて自分にも言ってい聞かせるように、呪文のよ
うに呟いていました。

そうして気がついたら、アキくんは柚里の温かい腕の中でぐっす
りと寝てしまったのでした。

第十七話

——アキくんは夢を見ました。

それは懐かしい故郷、フイーヨルの国でした。

どこまでも続くのどかな田園風景と、城を挟んで反対側は緩やかなカーブを描く水平線が見える海。

周辺の国々からみたら壮麗さがちょっと欠けているけれど、強固な守りの城。

どんなにアキくんがやんちゃをしても、いつも温かく見守ってくれている礼儀正しく優しい人たち。

ああ、なんて……なんて

夢の中でアキくんはうさぎの姿のまま野山を、そして海岸線をめいっぱい駆け回っていました。

そんなアキくんを人々は「おかえりなさい。アキエテラヴォリ王子さま!」といって声をかけてくれました。

まるでお城を壊したことなど、全くの嘘だったように。

かえりたい

アキくんは、うさぎになってから初めて、心の底から国に帰りたいと願ったのでした。

そのフィーヨルの国の自分の部屋で、王子は目覚めました。

いつもなら目が覚めて一番に目に着くのは柚里のベッドの脚なのに、なぜかどうとも見覚えのある天井が目に飛び込んできました。不思議に思っただけで身体を起こそうとしたとき、五本の長くて白い指が見えました。

——え？

思わずがばつと上半身を起こして、両手のひらをじーっと見つめました。

見つめても見つめても、爪が尖ったうさぎの前足ではなくて、ちゃんとした人間の手です。

そうして人間の手慣れたと、今度はその視線を他にもやれるようになりました。

長い脚にまわりつくシート、筋肉が見えるお腹、自在に動く指先、そして何より顔に毛が生えていません。

べたべたべたべた

今度は両手を使ってあちこちを触り始めました。

うさぎの部分が一つでも残っているのをまるで恐れるように。

どのくらいそんなことをしていたのでしょうか。

王子はやつと手を下ろして、自分が人間に戻ったことを確信しました。

俺、もどってるとっ？！

もしかして、俺、人間に戻ってる？
そんでもって国に帰ってきてるやん！！！！

辺りを見回しても、城にある見慣れた自分の部屋です。
石の壁にかかったタペストリーも、彫りが見事な椅子も、薄い幕
がかかっている四点支柱のベッドもすべてなじみのあるものばかり
です。

ゆっくりと、ことさらゆっくりと王子は立ち上がりました。
そしてその両足で地面を踏みしめたたん

涙が一つ、落ちました。

どれだけ人間に戻りたかったのでしょうか。
いやそれよりも、あの城を壊してしまった時よりも前に、戻れる
ものなら戻りたかったのです。

それが今、叶ったのです。

あ、柚里

柚里がおらへん

いつもなら柚里が眠るベッドの下で眠っている王子でした。
そしてお弁当を作る早起きな柚里よりももっともっと早く起きる
王子でした。

ですから柚里の寝顔をこっそりと椅子の上から見ることもありま

した。

だけでもこの部屋に、柚里はどこにもいません。辺りを見回してみても、もちろん誰もいるわけありません。そしてそれはこの部屋どころか、この世界全てに人がいないような、そんな寒々とした雰囲気が漂っていました。

王子は窓辺に走り寄りました。

窓の下にはいつも衛兵が見張っていたからです。けれどもやはりそこには誰もいませんでした。

王子は森のほうを見ました。

そこにはいつも鳥たちが飛びまわっているからです。けれどもやはりそこには鳥はいませんでした。

王子は部屋の扉を大きく開けました。

廊下にはいつも王子の安全を守ってくれる近衛が立っているからです。

けれどもやはりそこには誰もいませんでした。

なんやこれ？！

なんで誰もおらんねん！！！！

柚里を探そうとしたはずが、誰も、何もいない世界にいるようで、誰かを探したい衝動に王子はかられました。

城の扉という扉を開け放ちました。

庭園を駆け巡りました。

塔のてっぺんまで昇って、国中を見渡しました。

けれど、誰一人見つけることができませんでした。

この美しいフィーヨルの国に、今はただ一人、王子だけが存在しました。

王子は、両手を地面につけてがっくりと項垂れました。
そして、静かに、静かに涙を流し始めたのです。

誰もいない国。

どうしてそうなったのでしょうか。

なぜか考えたときに、王子のいきついた答えは。

第十八話

なんや

もしかして何かの遊び？

俺を驚かせようとしてるだけか？

ああ、ああ、そうやるなあ

せやなかったらこないに誰おらへんって、ないわ

誰もいなくなった国を高台から眺めて、王子はそう結論付けました。

そうでなくては説明がつかないと思ったからです。

早くみんな、帰ってけーへんかな

丘の上にある大きな木の木陰に腰を下ろして、国中のみんなが帰ってくるのを待っていました。

ところが

高かった陽がだんだんと威力を弱めて陰り始め、風が涼しげな空気を運び始めても

水平線の向こう側にゆっくりと陽が隠れようと歩いているときも

月の明かりが闇色の中に美しく光輝きだしても

誰一人として王子を驚かせに戻ってくることはありませんでした。

ここにきてようやく楽天的な王子もおかしいと感じ始めました。

夜も深まり、何一つ生きた声が聞こえてこないフィーヨルの国には、ただ風のびゅうびゅうと吹く音だけがありました。

気がつくと、王子は少し眠っていたようでした。

人間、緊張しすぎたりすると、眠ってしまうこともあります。

王子はまさにその状態でした。

『王子。アキエテラヴォリ王子』

王子の目の前がいきなり明るく光ったかと思うと、その中に人影が浮かびあがりました。そしてその人影は王子に優しく話しかけました。

『アキエテラヴォリ王子。起きてください』

まぶしいほどの光と聞き慣れた声に飛び上がるように起きた王子は、目の前に手をかざしながらその声の主を光の中に捜しました。きらきらと光が飛び散った後、そこに現れたのは王子の教育係である魔法使いのマグニウスでした。

「マグニウス！これはいったいどういうことや？！なんで誰もおれへんねん」

『王子。これはフィーヨルの未来です。王子は今、フィーヨルの未来の夢をみていらっしやいます』

「はあ？なにゆうてんねん。夢ならさっきまで見てたわ。俺がうさぎになってみたことのない世界にいた夢や」

『そちらが本当の現実です。王子は城を破壊されたので、罰としてうさぎにされ、世界を飛ばされました』

「なんやて……？ほな、さっきまで見てた夢が……非力なうさぎになって誰かに保護されんと生きていかれへん、犬や猫に怯える情けないうさぎが俺やっていうんか？」

『そうです。王子はうさぎになって何を学ばれましたか。人の優

しさを学ばれましたか？人の弱さを学ばれましたか？粹がることばかりではなく、人とかかわりあうことの大切さを学ばれましたか？」

そうです。

王子がうさぎになったときから、王子の見る夢の中に魔法使いは現れて、王子がちゃんと成長しているかどうか確認をしていたのです。

そして今、フィーヨルの夢を見ている王子の意識の前に、魔法使いはわざと現れて本人の口から成果を聞こうとしているのです。

『柚里さんは本当にいい方ですね。王子が偶然にしても柚里さんのようなかたに拾われて本当によかったと思いますよ』

「柚里……！そうや。柚里は？」

『柚里さんなら、ほら、眠っている王子を抱きながらものおもいにふけていらっしやいますよ』

魔法使いの手のひらの上がなにやらもやもやとしたかと思ったら、もやもやがひいた後にまあるい透明の珠が浮かび上がりました。その珠をよく見ると何かが映っていました。

それは青空の下、レジャーシートの上に座り、うさぎを膝の上に抱えてゆっくりとその背中を撫でている柚里でした。

———
柚里！

王子はその珠に映る柚里をじっと見つめました。そうして撫でられているうさぎの自分も。

『王子の徳は随分と溜まっていますね。言葉もすぐに話せるようになったようです。鈴の音が鳴るたびに私のもとに音がやってきましたので、その音を十個集めてこの鈴を作りました』

そういつて懷から大きな銀色の鈴を取り出しました。

『この鈴を王子の左手で鳴らすと、人間になりますよ。ただしほんのひと時ですから気をつけてくださいね』

「……え？なにそれ。なんで……？」

『今までの王子だったら一年経っても学べなかったことをたった数週間のうちに習得したご褒美です。王さまも喜んでいましたよ。このままいくともうすぐ帰ってくることができるだろうって』

マグニユスから受け取った大きな銀色の鈴を、王子は両手で大事そうに受け取りました。そして試しに鈴を鳴らそうと右手で振ってみました。鈴はうんともすんとも鳴りませんでした。

『……王子。何にでも興味がおりなのはよいことですが、無防備すぎますよ。それが災いしてお城を壊されたということをゆめゆめわすれてはなりません』

「……ごめん。マグニユスの言うとおりやな。これは左手でしか鳴らんの？」

『そうです。うさぎの状態で左手をお使いいただいたときにしか鳴ることはありません。そして人間からうさぎには時間がたたないと戻れませんのでくれぐれも注意してください』

「わかった」

王子は魔法使いの目を見て、慎重に答えました。

その行動は今までの王子にはなかったことなので、魔法使いは至極満足をして何度も何度も嬉しそうに頷きました。

そうして唐突に光が魔法使いを包み込んだと思うと、ぱんつと光がはじけ飛んで、そこにはまた暗闇が戻ったのです。

いっつもうた

王子は魔法使いがいた空間を見つめていました。

するとその場所がなにやら暗闇がうねって渦巻き始めました。

その渦に引っ張られるように巻き込まれてしまって、王子は暗闇にのまれていきました。

第十九話

無意識に柚里の手が寝ているアキくんの背中を撫でているときのことです。

膝の上で丸くなるように眠っているアキくんが、急にもぞもぞと身動きをとりました。

それと同時に、今まで感じなかったごりつとした硬質のものがアキくんと膝の間に感じられました。

ん……？なんだろう

変なものが足にあたってるけど

その時ちょうどアキくんが目覚めました。

「あー……。やっぱりそうやねんなあ……」

起き抜けにつぶやいた言葉は、とてもとても寂しそうな色を帯びていました。

そうして伸びをしようとしたときに、自分のおなかの下に何かあることに気が付きました。

「あっ！そうそう。これこれ！」

ひょいと柚里の膝の上から飛び降りると、そこに現れたのは夢の中でマグニユスに貰った、ころんとした銀色の鈴でした。

それに驚いたのは、柚里です。

だって、さっきまでそんなものはどこにもなかったんですから。

「な・な・な・なあにこれ！」

「すごいやろ、それ！マグニユスから貰てん」

えっへんと胸をそらして自慢げに柚里に報告をしたアキくんでしたが、柚里には何がなんやらさっぱりわかりません。

そんなことはまったくわからないアキくんは、褒めてもらいたくてぐいぐいと胸を上げて、柚里がアキくんを撫でてくれたり抱き上げてほっぺにキスをしてくれたりしないか、いまかいまかと待ちわびました——が、不発のようでした。

胸を張っていたアキくんが急にしょんぼりと頭を垂れたので、褒めてもらいたかったんだとやっと気づいた柚里でしたが、気づくのがちよつとばかり遅かったようでした。

そのことよりも鈴がどうしてアキくんのお腹の中から出てきたのかのほうが、とっても知りたかったからです。

「えっ……？貰った？いつ？だれに??」

「何ゆつてんねん。そんなん夢の中で！マグニユスに！もらったに決まってるやん！」

指先で鈴を転がしていた柚里でしたが、相変わらずのアキくんの発言にちよつとうんざりとしてしまいました。

「あのねー？アキくんはなんでこの鈴がなになのかしっているんだろっけれど、私はまーったく意味がわからないんだよ？」

ちよつと呆れ気味でアキくんにそう言つと、アキくんはやつと気がついたようでちよつとだけ俯きました。それでもご褒美の鈴が嬉しくて、柚里になんとかして褒めてもらおうと思いなおしました。

「えーつとお……。俺、夢見ててん。俺の国のフイーヨルの夢や
ってん。その夢の中に俺をうさぎに変えた教育係のマグニウスにお
うてん。…ほんで、そのマグニウスは俺がこっちで頑張ってるから
ご褒美やゆうつてその鈴くれてん」

夢の中のことを思い出すように、ゆつくりと話すアキくんをじつ
と見ていた柚里は、やっぱりアキくんはちょっと普通じゃないんだ
と改めて思いました。

しゃべるうさぎっていうだけでも十分普通ではないのに、その普
通じゃないことに慣れてしまっていたようです。

「でな？でなっ？！すごいねんで！」

自分の感動している声を聞いて、さらにその話を聞いた時の驚き
を思い出したアキくんは、もう一度柚里の膝まで飛び乗って、少し
でも柚里に自分の味わった驚きをわかってほしいとからだ全体で訴
えていました。

「あんな、あんな？その鈴鳴らしたら、俺、ちょっとだけ人間に
戻れるねんて！！」

「えっ……」

「なあ？凄いやろ？人間にちよつとだけでも戻れるねんて！それ
聞いた時はばかんとしたから今みたいに興奮してへんかったけど、
よう考えたら凄いやな？」

「う……うん」

「もー。めっちゃうれしいやん？！俺やあ、もしかしたらもうず
つとうさぎのままかもしれへんって諦めてたこともあってん。せや
からほんま、めっちゃ嬉しいねん！！」

柚里の膝の上で、本当に嬉しいのでしょう両方の前足を口元にあって、くふふふと笑っていたので、アキくんは柚里がちょっと顔をしかめたのには気が付きませんでした。

「なあなあ。ここも人が増えてきたみたいやし、もうそろそろ家に戻らへん？」

「……あつ。そうだね。そう言えばあたりが騒がしくなってきたね」

「せやろ？それによう考えたらうさぎの俺が柚里と同じもん食べてんのん見られたらおかしいと思われるで？」

「……ああ。本当。……気がつかなかったわ」

生返事ばかりしている柚里をちよつといぶかしげに見てみると、柚里はとても複雑そうな顔で川をじつと見ていました。

「なんや。柚里、どっかわるいんか？」

いつもの柚里らしくない行動にもしかしたら具合が悪いのではないかと思ったアキくんでしたが、そんなことはないよとばかりに首を振った柚里を見てちよつとだけ安心をしました。

「そつか。まあどちらにしても『家』、帰ろ」

「そうだね。じゃあちよつと片づけるから、キャリーバックの中で待っててくれる？」

「うん。わかった」

自分からぴよこんとキャリーバックに移って、帰り支度をしている柚里をじつと眺めていたら

あれ？

もしかして柚里、泣いてる……？

柚里の目に、きらつと光る何かがありました。

第二十話

柚里の心境は複雑でした。

ころんとまあるい銀色の鈴が、アキくん幸せを与えてくれました。

アキくんが幸せそうに笑っているのを見るのは本当にうれしくてうれしくて。

それほど最近のアキくんは、出会った当初よりもなんだか沈んでいるように思えたのです。

ですから、柚里はアキくんが少しでも笑ってくれるのならと思って、外へ遊びに行く計画を立てたのです。

それは少しは成功をしたようですが、その反面、アキくんにかなり怖い思いもさせてしまいました。

非力なうさぎのアキくんにとって、外は安全なものではないということが分かっていたのに。

ところが夢の中に現れたという教育係の魔法使いが、アキくんに褒美として渡した、鈴。

ちよつとの間だけ人間になれる、鈴。

それだけでアキくんは飛び跳ねて喜んでいただけではありませんか。

その上、その鈴を使えば人間になれるらしいのです。

うさぎのアキくんが、人間になるのです。

アキくんが本当は人間だということをわかっていたはずの柚里ですが、途方もない話に実はあまりよくはわかっていなかったのです。

うさぎだから、非力なウサギだから、アキくんは柚里のそばにいてくれるのです。

結婚したいなんて冗談を言ってもらえるくらいは、仲良くなっているはずなのです。

でも。

鈴の力で少しの間でも人間になって。

人間にもどれるまで、あの綺麗な金属音を聞くことになって。

そして

そして人間に戻る日が来てしまったら。

アキくんとはお別れしないといけなくなる

ぐるぐる廻る思考がどんどん悪い方向に進んでいくことを、止めることができませんでした。

「さあ。支度ができたから、家に帰ろうね」

柚里のすこし枯れた声に、アキくんも悲しくなりました。

なんか俺、また失敗したのかなあ

鈴を貰ったことがあんまりにも嬉しすぎて、柚里のこと、ちゃんと見てへんかったもんなあ

でも、いったいいつからあんな悲しそうな顔になったんやろ

帰りの道でもアキくんは顔をキャリーからちよこっただけ出して、びゅんびゅん過ぎていく街並みをおもしろくは感じていましたが、朝とは違い、何度も何度も後ろを振り返って自転車を漕いでいる柚里を見ていました。

柚里は柚里で、朝のキラキラとした空気をかえり道では全く感じることはなく、どちらかというとだんだんと自分から過ぎ去っていく風景が柚里の心を物語っているようで悲しくなっていました。

「なあ、柚里。どないしたん？」

部屋に着くなりキャリーバッグから飛び出したアキくんは、柚里の後をついて回りました。

そうしないと、柚里が何処かに行ってしまういそうだったからです。

「なんでもないよ？気にしすぎだよ」

「そんなわけないと思うけど？」

アキくんは自分がうさぎであることがとてももどかしく思いました。

だって何処かに飛び乗らないと柚里と同じ高さになって、柚里を見ることができないからです。

あっ！そうやん。鈴、あつたわ！

無くさないようにと首輪に付けられた鈴を思い出して、アキくんはマグニユスに言われた通りに左手で鈴を鳴らしました。

リン♪

いつもの音とは違う、それでいていつもと同じ音のような鈴の音が部屋に響きました。

驚いて柚里がアキくんを見ました。

だっていつもの金属音じゃなかったからです。

するとどうでしょう。

鈴の音がまるで色を持ったみたいにきらきらと輝きだし、そこから羽が生えたように広がってアキくんを包み込み始めました。

そうして完全にアキくんを包み込んだかと思うと、その光はパアツと四散しました。

中から現れたのは、うずくまる一人の男……の子でした。

それも真っ裸。

「あ……あ……アキくんっ?!なんで裸なのーっ!!」

その言葉にはっと気がついたアキくんは、身体を起こして立ち上がり、自分の手や身体を何度も何度もきよきよと見回しました。そうしてなぜだか拳を握りしめ、ふるふると震え始めたのです。

「あ……あ……あんのおおっ!!!!!!。x。o。■。o。ツ。o。!!!!!!」

最後のほうは何を言っているのかさっぱり聞き取れませんでした

が、品のいい言葉でないのは確かでしょう。

柚里は慌ててバスタオルを持ってきてアキくんに手渡ししましたが、アキくんはそれどころではなく、怒り狂っていました。

「マグニユス！マグニユスっっ！……どういうことや、これはっ！
！」

真つ裸のうえ仁王立ちで、天井に向かって教育係に叫びまくっているアキくんでしたが、何度も視界をかすめるものにやっと気がついたようで、柚里が差し込んでいるバスタオルをひきつりながら受け取り身体に巻きつけました。

「……ありがとう、柚里」

この状況でよくお礼をいえるなあと、**柚里**が関心をしていたら

ちりーん ♪

いつもの透き通る金属音が響きました。

一つまた何かが認められたようです。

それでもアキくんは嬉しそうな顔をせず、天井に怒りを向け続けていました。

第二十一話

ひとしきりの悪態をどこにもいないマグニユスについたアキくんは、大きく一息吸いこんでゆっくりとその息を吐き出しました。

そしてくると柚里に向き直って、先ほどとは違う落ちついた声で言いました。

「ごめんな。急にわめいてもうて」

柚里はといえば。

アキくんが天井に向かって拳を握って叫んでいる姿を茫然と見ていました。

さっきは光がはじけたと思ったたらいきなり綺麗な裸の男の子が出てきたので、驚いてしまつて何をしてるのか自分でもわからなかったのですが、とりあえず羞恥心が勝っていたようでアキくんを身体を隠すバスタオルを渡しました。

それを腰に巻きつけたアキくんは、どこからどう見ても見知らぬ子供でした。

ただ唯一、大阪弁で怒涛のごとく話しているのでアキくんだったということが分かる程度でした。

アキくんは何度もももとは人間だと言われていたのですが、どうしても柚里にとってアキくんはうさぎのアキくんであつて目の前の白い子供とは違いました。

うさぎのアキくんの毛の色はきれいな焦げ茶色で瞳は真っ黒でしたが、人間の男の子姿では髪は銀色に限りなく近い月の光のような淡い金色の巻き毛が腰のあたりまで波打ち、瞳は透き通った薄い空

色に金色の斑点が光っていました。
それに肌の色もとても薄く、まるでおとぎ話に出てくるお姫様
のようにきめが細かく白いのです。

「……ぷっ」

白雪姫の話の下りを思い出して、柚里は目の前のアキくんの白雪
姫姿を想像してしまい、思わず吹いてしまいました。

似合うつっ！！似合すぎる！！

これで身長が高ければ、完璧かも
でも白雪姫は黒髪だから、どちらかというと灰かぶり姫のほうか
な？

目の前にいる、見慣れない、けれどもよく知っている男の子に変
な想像をしている柚里でした。

そんな柚里の邪な想像を知ることもなく、アキくんは謝ったきり
じっと柚里を見つめていました。

何がおかしんやる？

ってか、俺、いきなり喚いてもうて、また柚里に御小言喰らうか
とおもたんやけどなあ

けど、笑ってるくらいやから、大丈夫そうでよかったわ
さっきのわけのわからん暗い顔も、のうなってるし

河原からこっち、柚里が考えこんでいたのをずっと気にしていた
アキくんは、笑っている柚里を見てほっとしていました。

せやけどマグニユスのやつ

いったいこれはどういうこつちや

俺、ちいこいちゃん

こんなにちいこかったら、柚里の目線までいかへんやん

鈴を鳴らせば、うさぎの身体から人間に少しの間戻れるとマゲニユスはいいました。

実際その通りで、たしかに鈴を鳴らしたら人間になりました。

けれどもその姿は本来の年齢とはかなり異なり、どうみても十歳前後のまだ少年と言っていていいほどの体格だったのです。

自分の身体に戸惑いを隠せないアキくんをひとしきり（こつそりと？）笑っていた柚里は、思い出したようにごそごそと何かを探し始めました。

「たしか……このあたりにあったはずんだけど」

「？柚里、いったいなにしてんねん」

「うーん？ほら、アキくんってば裸だし。恥ずかしいでしょ？だから私の服で小さいサイズのがあったはずだから……あ！あったあった」

「どう、これ？」と手渡された服は、真っ白いＴシャツとジーンズのハーフパンツでした。

柚里がもともと小さくて細いので、Ｔシャツもがばがばどころかちょうどいいサイズでしたし、ハーフパンツもちよつと大きい程度で腰で履くのならば嫌みがない程度のものでした。

ただ、チャックの締め方がわからないようだったのでそこは他の服を持ってきてこうするんだよと教えてあげた柚里でした。

「アキくんの国にはこういう服はないの？」

「ないなあ。こんなに柔こうて収縮がある素材の服なんて初めて

着たわ」

「へえ。じゃあいつたいどういう服を着てるの？」

「うーん。どんなにいわれても……ふつつ？」

たしかにフィーヨルとここでは服装というものが全く違いました。犬の飼い主が着ていた服も、風景越しで見た人々の服装も、なにより柚里が着ている服というのかなり変わっているようにしか見えません。

だいたい男でもないのに足の形が見えるほどの細身のズボンをはいているところからして、フィーヨルではありえませんでした。

「フィーヨルでは女の人のものごつつう女の部分を強調する服を着るけど、柚里は女を隠すような服着てるよなあ……なんで？」

「ええっ！？なんでっていわれても。これがこちらの普通だよ」

「そうか？なんかちゃうと思うけど。足みせるようなスカート着てる人もおるやん……まああんな格好はフィーヨルでしたらあかんけどな」

お城にいる女の人たちは誰もがくるぶしまであるスカートを着ていましたし、貴族になると細い腰や大きな胸を強調するようなドレスを着ることで富を見せびらかしていました。

服というのはその人の所属する階級を表すものに等しいのです。

けれども柚里やこの世界ではそれが違うようでした。

みながみな変わった服を着ていますし、体の線の出し方もぜんぜんちがいます。髪の毛の長さも決まりごとがないように短かったり長かったりしていました。

「まあ、所変われば品変わる？やったつけ。そんな感じやからしやーないんやろうけど」

「郷に入^いっては郷に従え」

「？」

「その土地で暮らすのならその土地の習慣に従いなさい、ということだよ」

「あー、うん。そうやな。柚里のいうとおりやな」

自分の姿をぐるっと見回してにかつと笑ったアキくんは、話しに聞く『やんちゃ』さんそのものでした。

城を壊したやんちゃさんに、着心地のいい、それでいて動きやすい服を与えて本当によかったのかと柚里は自問自答してしまいました。

第二十二話

初めは本来の身体よりはかなり小さくなった自分の姿を持て余していたアキくんでしたが、自分の姿にちよつと慣れてきたようでソファに座り足をぶらぶらとしていました。

柚里は早めの夕御飯を作っていました。が、うさぎのアキくんのような少量では少ないだろうからもう少し多く作ろうと思っていました。ところが普段はほぼ一人分しか作らなくていいものですから二人分の食材は買いこんでいなかったのです。

「ねえ、アキくん。今から買い物にいつてきていい？」

柚里が声をかけると、ぶらぶらとしていた足をピタツと止めて不思議そうに柚里に向かって言いました。

「一緒に行ったらあかんの？」

「その言葉を言われなくなかったですけど……」と小声で柚里がいうと、地獄耳のアキくんにはまる聞こえのようで「なんでそんなこと言うん？」と速攻で突っ込みが返ってきました。

だって……ねえ？

城をも壊す、やんちゃさんなアキくんのことです。

うさぎの姿ならいざしらず、人間の男の子の姿の今となつては珍しいところに連れていくとどうなるのか考えるのも恐ろしい。

「だってアキくん、服は着たけれど靴がないでしょ？だから外に出歩くことはできないよ」

「えーっ?! そんなん、柚里の足もちいこいやん。今の俺やった

ら柚里の靴履けると思うで？それにかかとを押さえない靴もあつたやん。あれやつたら足の大きさは関係ないんとちゃうん？それにこの世界つてめっちゃ道が綺麗やん。裸足でもええんとちゃうのん？」

「それは駄目だよ！道路は舗装されているから綺麗に見えるけれど、ガラスとか金属とか落ちてるから靴がなくちゃ足の裏を怪我するよ！」

「がらす……？それに、金属つて。そんなにごろごろ転がってるもんなん？」

「え？アキくん、ガラス知らない？」

「しらん」

「だって、コップとか……そのサツシもガラスだよ。そこからよく外を見ていたじゃない」

「あー……これがそうかあ。俺、これは魔法やと思ってた……」

自分が知らないものをなんでも魔法で片づけなideよと思った柚里でしたが、とりあえず話しをもとに戻そうとしようとしたら

「へえー。こういうの、どうやってたら作れるんやろ。フィーヨルや他の国のどこでも、向こうの世界にはこないに凄いもんないで？こんな凄いもんうちで作れたら特産品に絶対なるとちゃうか」

意外にも王子らしい言葉を言っていたので、アキくんが少しはおとなしくできるとわかったら、人間でいられる間にガラス工房に連れて行つてあげようと保護者らしく思う柚里でした。

「なあなあ。ほんでさー。金属が落ちてるつて、そんな高価なものごろごろしてんの？」

「高価？えーっと。金属つて高価じゃないでしょ」

「何ゆつてんねん！高価に決まってるやん。金属つて鉄とか銅とかやろ？精製するのんかてほとんど門外不出に近いし。そんなごろごろゆつほどどこにでもあるもんとちゃうやん」

「ああ。なんだ。そういうことね」

ガラスがなかったり、鉄や銅が高価とかいつているあたり、アキくんの国は紀元前くらいの文化になるんだと柚里は考えました。

といっても、柚里だって紀元前がどのような文化を持って生活をしているのかなんて正確にはわからないのですが、歴史の授業ではそうだったはずだと思ったのです。

そうになるとアキくんの国の文化がどのようなものかある程度考え付くので、少しは話しが進みやすいかと思いました。

「アキくんって、絵、上手？」

急に話をふられて戸惑ったものの、やんちゃなアキくんは勉強以外のものは大抵上手だといわれていたので、こくこくと力いっぱいうなずきました。

少しは得意分野を披露できるかもしれない。そうすれば少しは柚里も自分を見直してくれるかもしれない。

そんな淡い期待を抱かずにいれませんでした。

「じゃあフイーヨルの風景や、みんながきている服を描いてもらえる？」

「ええよ。ほな木炭と絵具かして」

「木炭や絵具はないけど色鉛筆はあるから、それでお願い」

「色鉛筆？」

「あー。色鉛筆はないのかあ。でも使いやすいものだから一度使ってみて」

二十四色の色鉛筆のセットと画用紙を渡すと物珍しそうに眺めていましたが、色鉛筆の色の豊かささとさと手に持つてすぐに色がでるという不思議さ、そして描き心地の柔らかさが気に入ったようですね。なんともなんとも試し書きをしていました。

「これ、めっちゃ描きやすくてええやん。色鉛筆ゆうんなあ」
「鉛筆はこうやって削って使ってね」

柚里がカッターを取り出して鉛筆をゆっくりと回しながら削ると、芯の先が尖ってさきほどとはまた違ったシャープな線が描けるようになりました。

この世界にはフィーヨルにはないものが星の数ほどあるようです。カッターというものもアキくんにとってははじめてものでした。けれどもナイフを扱い慣れていたのでカッターはおちゃのこさいです。

ナイフを扱うようにカッターを扱えば鉛筆も簡単に削れるようになって、自分の思い通りの線を描けるようになりました。

アキくんは真っ白い画用紙をじっと見つめていました。

すると真っ白な雪が目の前に現れたかと思うと、その雪がどんどん解けていき春の芽吹きを感じることができました。すると延びていき成長する草、覆われていく大地、色とりどりに咲き乱れる花々、青々と茂り豊穣を約束する世界。そしてそこで安寧に暮らしている勤勉で働きもののフィーヨルの民たちが生き生きと動き始めました。

世界を一つも漏らさず描きとめようとアキくんの鉛筆は止まることなく画用紙の中を動き回り始めました。

「アキくん。ちょっと買い出しに行つて来るよ?」

絵に夢中になっているアキくんは声をかけても、描くことに夢中になっているアキくんの耳には届くことはありませんでした。

メモを書いて残していこうにも、アキくんはこちらの文字なんてわからないだろうから意味がないし、せっかく調子よく描いている

アキくんを無理やりこちら側に引き戻すのも駄目だろうし、仕方がないのでこっそりと部屋を後にしました。
ちよっとだけ色鉛筆に感謝しながら。

第二十三話

「できた」

ふうと大きく一息をついて、アキくんは白色の鉛筆を机の上に置きました。

そうして画用紙を両手に持ち、一番遠くに話した状態にしてじつくりと描きあげたフィーヨルの風景を眺めました。

そこには夢の中で教育係のマグニウスに会った時の、誰いない閑散として人の気配のない寂しげなフィーヨルではなくて、人が笑いあい活気のある素晴らしい世界が広がっていました。

「柚里。できたで」

大切な大切なフィーヨルを柚里に早く見せたいと、きよろきよるとあたりを見回してみても、柚里は見当たりません。気配を感じることができませんでした。

「……あれ？なんでおらんのや？」

せっかく出来上がったフィーヨルの風景を二人でゆっくりと楽しみたかったのに、柚里はどこにもいませんでした。

「あーっ！もしかして買い物いったんかなあ。せやけど一言くらい声かけてくれてもいいんとちゃうん」

自分が没頭していたことなど綺麗に忘れてしまっただけの満足感のほうがか勝っていたので、柚里が早く帰ってくることを気にかけてい

ました。

その時です。

目の前が急にきらきらと輝きだし、一面に真っ白い光が覆い始めました。

それはマグニユスの鈴を鳴らしたときのうさぎから人間に変わったときの光とよく似ていました。

あっという間に光の羽に包まれたアキくんは、ぱあと四散した光の後にうさぎに戻っていました。

「なんやこれっ!!」

ばさばさっ

目の前が真っ白になったかと思うと今度は何かでいきなり視界を塞がれ、手足をばたつかせてそれをどけようと思いました。

もがけばもがくたびにまわりつくそれは、さっきまで着ていた袖里の服の色をしていました。

うさぎの身体に戻ったことで、着ていた服が外れて大きな布となつてアキくんにまわりついていたのです。

ぷは。

なんとか顔を出したアキくんは、その邪魔になつていた大きな布があせつていなければさっきまで着ていた服だと思い当たったこと、そしてそれさえわかれば簡単に布がほどけてその布の海から抜け出せたことに思い当り、一人顔を真っ赤にしていました。

そして小さくなって毛が生えた自分の手足をじっくりと見て、大きくため息をついたのです。

「……前触れ、なしか。こんなに急に戻るやなんて、ひどいんとかやうか。マグニユス」

唐突に、夢の時間が終わりました。

『この鈴を王子の左手で鳴らすと、人間になりますよ。ただしほんのひと時ですから気をつけてくださいね』

夢の中のマグニユスが言った通り、ほんのひと時のその時が終わりを告げました。

アキくんは、思いました。

こんなんやったら……こんなんやったら、辛すぎる

前触れなしでうさぎにもどる魔法であるなら、結局どこにも行けないのではないか？

子供姿の人間に戻ったとして、一体どのくらいの時間をその姿でいれるのか。

もし外にでたときにいきなり光に包まれるのなら、そしていきなりうさぎに戻ってしまうなら、魔法の種類が違うこの世界ではおかしくうつるだろう。

そうしたら俺は……俺はいつたいどないなっつまうんやろう

そう思うと、いくらマグニユスがくれた鈴で人間の姿になれるからといっておいそれとはその魔法を使うことができません。

結局、その魔法の鈴は、心を苦しめるだけのものにしか成りえないのです。

一瞬だけの喜びなんて、虚しすぎます。

ぼたっ

画用紙に大きなしみができました。

それはうさぎのアキくんが流した、一粒の大きな涙でした。

「ただいま。アキくん、描けた？」

重そうに沢山の荷物をもった柚里が、ドアを開けるのももどかく部屋に入ってきました。

ところがそこに、綺麗な金髪のアキくんの姿が見えません。

買い物に出るときは床の上に画用紙を広げて一生懸命何かを描いていたはずなのに。

「あれ？アキくん。かくれんぼでもしてるの？」

いくらリビングを見回してみても、アキくんの姿は見えませんでした。

柚里はテーブルの上に荷物をどさっと置いて、あちこちを探し回りました。といっても一人暮らしの家ですから、さほど広いわけでもないでもなく。

簡単に終わった一周りでも、アキくんの姿はありません。

けれど、床の上にとても美しい風景が描かれた画用紙が一枚、落ちてありました。

その画用紙には一か所だけふやけたところがありました。

アキくんの涙の跡です。

そのことに気がついた柚里は、アキくんにフィーヨルの風景を描いてもらったことを後悔しました。

きつと風景を思い出しているうちに、フィーヨルが恋しくなったに違いないからです。

わたしって、ぜんぜんアキくんのこと、わかってないんだ……

アキくんの住んでいた国がどんなところか知りたくて、ついつい絵を描いてもらったけれど、それはアキくんにとっては残酷なことだったかもしれない。

いつ帰れるかわからない故郷の絵を描いてもらうなんて、本当になんて馬鹿なんだろう。

画用紙に描かれている絵は丸みを帯びた線と優しい色で重ねられていて、どれだけアキくんが自分の故郷を愛しているのかさまざまとわかるものでした。

ごめんね、アキくん

「柚里」

その声は、まるで儚くかすれるような声でした。アキくんです。

柚里はびっくりしてその声が聞こえた後ろ側に振り向いたのですが、肝心のアキくんがどこにもいません。

「アキ……くん？」

「柚里。下におるよ」

さらに驚いて足元を見てみると、なんとそこにはうさぎに戻っているアキくんがちょこんと座っていました。うるうるすると、大きな瞳を潤ませながら。

「あ……アキくん！うさぎに戻ったの？」

「うーん。時間切れ、やと思う。マグニユスは戻り方なんて教えてくれへんかったし。人間に戻るんはほんのひとときやてゆうてたし……ね」

「あー……。そつかあ。こんなに短い時間しか人に戻れなかったんだね。それなのにわたしたたらアキくんに頼みごとなんてしちゃて、大切な時間をちゃんと使えなかったよね。……ごめんね」

しゃがみ込んでうさぎのアキくんを抱き上げると、そつと背中を撫でました。

アキくんはふるふると首を振って、顔を柚里のほうに向けて言いました。

「絵を描くんは、楽しかったで！久しぶりに燃えたわ。色鉛筆つて便利でええなあ。フィーヨル戻る時は絶対欲しいアイテムやね！」

につこり笑いながらそう報告してくるアキくんは、柚里が思っているように故郷を思つて悲しんでいるようには見えませんでした。自分の間違いにほつとした柚里はそのままアキくんを顔の高さまで抱き上げ、ちゅつとアキくんのほつぺたに軽いキスをしました。

ぼんっ

頭からまるで湯気が一気にでてくるように顔を真っ赤にしたアキくんは、いきなりの展開に驚いて逃げようと足をばたつかせました。が、柚里の手に抱かれてそれがありません。

柚里は柚里で、そんなアキくんが可愛くて仕方がなかったのでもう一度ちゅつと羽が生えたような軽いキスをしました。

ぼふんっ

二度の不意打ちのキスに、アキくんは柚里に抱かれながら身体のが抜けてしまいました。

ただでさえ間近で柚里を見てるのです。恥ずかしいことこの上ありませんでした。

柚里って……柚里って、もしかしてわざとやってるんか？

柚里の……柚里の、いけずーっ！！

心の中で絶叫したアキくんなのでした。

第二十四話

柚里の手は、魔法の手。

ちよつと何かをするだけで、火が起こせるし水もだされる。

見たこともない、変わった味でもあるけれど、美味しいご飯をばばと作る。

それになにより、背中を撫でる優しい手が、心を癒してくれる。

柚里が膝の上のアキくんの背中をゆつくりと撫でていたのは、夕食も終わってお風呂も入り終わったときでした。

不意にアキくんが気持ちよさげに細めていた目を広げて、柚里に言いました。

「なあ、柚里。明日また河原に行かへん？」

今朝はあんなことがあったのに、どうしてまた河原に行きたいなんていうんだろう

そう思つて首をかしげて見ると、ちよつと恥ずかしそうに「今度は人間の姿で行きたいねん」と小さな声で言いました。

アキくんにはいつも驚かされる。だって犬に囲まれてすごく怖い思いをしたはずなのに、その場所にまた行きたいだなんて。私だったらしばらくその場所には行けないよ。

「でもなあ。柚里にお願いがあるねん」

「ん？なあに？」

「人間の姿で行こうおもたら、服は柚里のんがあるけど靴あらへんねん。柚里に迷惑ばかりかけてるけど、靴、買_いうてもらわれへんやるか」

ちりーん♪

いつもの鈴の音が聞こえました。

それはアキくんの小さな勇氣にだったのか、それとも人に物を頼むときの姿勢にだったのかはわかりませんが、それでもまたひとつ、アキくんは成長したようです。

それを嬉しく思っつて、いつも以上に優しくアキくんの毛並みに添って柚里の魔法の手が動きました。

「じゃあ今からちよつと買_い物にいつてくる。……こんな遅い時間にひとりになるけれど、留守番できるよね？」

「え？それはあかんやろ？こんな時間に女の子が一人で買_い物やなんて、危ないで！」

世界が変わっても『夜』という時間は危ないはず
そう思っつて柚里を止めたアキくんでしたが、柚里は指を前に突き出して、ちっちっちつと舌を鳴らしました。

なんや、これってなんのしぐさや？

アキくんの頭の中で『？』が渦巻きます。

まだまだこちらの世界に慣れていないアキくんです。言葉もしぐさも生活も、何もかもがわからないことだらけです。

「こんな時間ってアキくんはいうけれど、まだ八時前だよ？アキくんのいたところでは違うと思うけれどこっちの世界ではこの時間

だったらお店が開いてるの。女の人の独り歩きなんてこの時間じゃあ当たり前だし、子供でも大丈夫くらいなんだから。……心配してくれてありがと」

「心配なんてするに決まってるやん！ 柚里は女の子やねんで？ いくらこつちの世界じゃ夜でも子供が歩けるゆうたかて、それでも夜は危ないねんから。柚里に何かあったらと思うと、俺……うさぎのまやったら助けにいかれへんやん」

そんなに心配してくれなくても大丈夫なだけどなあ

けれど心配をしてもらえる存在というのは柚里にとっては親以外にはありませんでしたので、柚里はアキくんのその気持ちが本当は嬉しかったのです。

「よしっ！ おねえさんは、奮発しちゃうぞ！」

すくつとソファから立ち上がると、アキくんを抱き上げて軽くキスをしてから、真っ赤になったアキくんに「それでも留守番よろしくね！」といってさっさと身支度をして出かけていきました。

後には嬉しいやら悲しいやら驚きやらで目がぐるぐると回っているアキくんが残されました。

「アキくんの飼い主さん？」

近くのお店で子供用の靴を物色していると、後ろから柚里に声をかけた人がいました。

それは朝に会った犬の飼い主さんでした。

犬の飼い主さんはその大きな体格には似合わないエプロンをして
いるところからこの店の店員さんのようで、名札には『猪俣^{いのまた}』とか
かれています。

「あ！こんばんは。奇遇ですね」

「本当に。お子さんの靴を探しているんですか？」

「近所の男の子に靴をプレゼントするんですけど………どんなのが
いいかなって」

柚里はとつさに嘘をつきました。

だってうさぎのアキくんが人間に変身するなんていつて、一体誰
が信じるというのでしょうか。

「足のサイズはわかってる？ある程度わからないと靴は合わない
ですよ」

「大丈夫です。だいたい私と変わらないみたいだし」

「だいたいしかわからないんだったら、サイズに余裕があつて今
流行しているこういったゴムタイプのスリッポンが人気だけれど」

そういつて出されたのは有名メーカーの明るい緑色のスリッポ
ンシューズ。

男の子になったアキくんにとつても似合いそうで、柚里は一目で
気に入ってしまいました。それに、たしかにこれだつたら少しくら
い大きめでも大丈夫そうでしたので、猪俣さんにすすめられるまま
そのシューズを買い求めました。

「毎度ありがとうございます」

「いえ。こちらこそ手助けしていただいてありがとうございます」

これで明日は今日よりもっと楽しめるかもしれない

いくらうさぎのすがたで駆け回っても、本来の人間の姿に勝るものはないだろうし

意気揚々と家に戻ると、そこにはちよつとだけ拗ねて、ちよつと以上に心配をしたアキくんが玄関にちょこんと座って柚里の帰りを待っていました。

「柚里い……おかえり」

「……ただいま？アキくん、ずっとそこで待っていたの？」
「まってたで〜。心配してんねんで〜」

恨めしそうにそう言って、くると後ろを向いたかと思うとさつさとリビングに入っていきました。

その後ろ姿を見て、柚里は『アキくんには申し訳ないけれど、幸せだなあ』なんて思っていたのでした。

第二十五話

まだ陽が昇りきらない朝の早くから、柚里は動き始めました。

昨日のようなことがないように、一度失敗したことは二度とないようにいろんな工夫を考えながら。

アキくんといえば、そわそわと柚里の周りを動き回っています。だって、人の姿で走り回れるのって一体いつ以来かわからないほどだからです。

うさぎの姿で走り回ったのも、うさぎになってからは昨日が初めてでしたから、人間の姿に至ってはそれ以上です。

それが嬉しくて嬉しくて仕方ありませんでした。

それに柚里が買ってくれた目に直接飛び込んでくる綺麗な色の靴を履いて、あの緑の匂いと水の匂いのする場所で思いつき駆け廻りたかったのです。

お弁当を作り終わると、早速お出かけです。

「アキくん、お待たせ。さあ、行こうね！」

びよんぴよんと足元で飛び跳ねているアキくんを愛おしそうに見つめながら、柚里はテキパキと荷物を積み込みます。

そして最後にキャリーバックにアキくんがすっぽりと入ったのを確認すると、そのまま家の力ギをがちゃりと閉めました。

さあ、楽しいピクニックの始まりです。

昨日と同じ街並みをびよんぴよんと駆けっていく自転車に乗って、アキくんは昨日よりももっと気持ちが高揚していました。

同じ景色、同じ風。

けれども今日は昨日とは一味違います。

幼いけれど人間の姿になって、駆けまわることができるのです。久しぶりに二本の足で力いっぱい走れたら、どんなに気持ちのいいことでしょう。

そう考えるとくふくふと、笑いが口元にでてきます。

あつという間に土手について、柚里は昨日と同じ橋の下にシートを広げました。

ピクニックには早すぎる時間なのでときおり散歩をしている人を見かける程度で、辺りには誰もいませんでした。

この時間なら、うさぎの姿でも十分駆け廻ることができるでしょう。

「でてきていいよ」

キャリーバックをシートに置いてチャックをあけると、アキくんがひよっこり出てきました。

「なあなあ。もう人間になってもええ？」

早く二本の足で大地を踏みしめたくて仕方がなかったアキくんは、柚里の買ってくれた靴の入っているもう一つの鞆までぴょんぴょんと移動しました。

そして鼻先でよいしょよいしょと鞆を触って、早く開けるようにアピールをしていました。

そんな仕草をするなんて、アキくんはよっぽどあせっているのでしょう。

だってアキくんには自由に動く前足があるのです。

前足を使って鞆を指せばいいものを本物のうさぎのように鼻先で

動かそうとしているのか、柚里にはよくわかりませんでした。
かわいいんですね。

くすくす笑いながら鞆の中から簡易テントを出してあげるとぽんと開いてそのなかにアキくんの服と靴を置きました。

アキくんは柚里の足元でドキドキしながら待っていました。

そして「どうぞ」と柚里がいうやいなや、早速テントの中にはいつて、首輪につけてあるマグニユスの鈴を左手で勢いよく鳴らしました。

リン♪

その音とともにテントの中から光が四方に走り、中からアキくんが出てきました。

もちろん服は着つけています。

そして昨日買ってもらったスリッポンを履いていました。

「うーんっ！気持ちええなあっ！！」

両手を上げて伸びをして、うさぎの時には使っていない筋肉をほぐしました。

そして準備体操のように身体のおちこちの腱を伸ばして「暴れたるっ！」と意気揚々です。

しばらく使っていない身体を慣らすように慎重に身体をほぐすと、柚里に振り向いてにかつと笑いました。

——— やんちゃなアキくんの登場です。

「ほなちよつと、いつてくるわ！」

そういうやいなや、どぴゅつと音が鳴るように走り去っていきま

した。

そんなアキくんを柚里は満足げに見ていました。

アキくんには不本意かもしれませんが、もうここまでくるとほとんどお母さんの心境です。

くるくると動き回るアキくんが視界からいなくなると、柚里は持つてきた本を開けてゆつたりとした気持ちで読み始めました。

「おはようございます」

頭の上から急に声を掛けられて、読んでいた本をばさりと落としてしまいました。

見上げるとそこには猪俣さんがにっこり笑っていました。

「おはようございます。……今日はわんちゃんたちは？」

ちょうど目線の先にある猪俣さんの手には、リードが握られていませんでした。

「ああ。アキくんが怖がるといけないと思って、ほら、あそこに繫いであります」

そういつて猪俣さんが指さした方向を見ると、たしかに犬たちが繫がれていました。

「ところでアキくんは？」

「えーっと。……家？」

柚里の目が泳いでいるのがわかったのか、猪俣さんは辺りをぐるっと見回して自転車に積んでいるキャリアバックをじっと見ていま

した。

昨日の今日でまたリードをつけずに散歩させてるって思われただろっなあ。

猪俣さんにどう思われようが関係ないと思いますが、どうしてもか残念で恥ずかしい気持ちがあがってきます。

恥ずかしいというより悔しいというのが正解かもしれません。だって嘘をつかないといけないからです。

「ふーん。キャリーバックがあるから、連れてきていると思ったんだが」

「えええっとっ!」

何とかごまかそうと言葉を探していると

「柚里ーっ!喉乾いたーっ!お茶ってある?」

遊び疲れたアキくんが帰ってきてしまいました。

驚いたのは猪俣さんです。

だってアキくんの外見はまったくもって日本人的ではないからです。

それにその外見とはミスマッチな関西弁。

思わずその男の子をじっくりと見てしまいました。

そしてその足元に昨日柚里が買ったあのスリッポンがありました。

近所の子供と遊びに来ていたのか

だが、それにしても早すぎる時間のようだが……

ちよっと腑に落ちない猪俣さんでしたが、目の前に現れた美少年

を見て納得せざるを得ませんでした。

「あーっ！」

いきなりその男の子が自分を見て叫んだので訝しんで見てみれば、男の子は不躰にも指をさして後ずさりをしていました。

初めて見た男の子にそんな態度を取られて結構ショックなものがあつた猪俣さんでしたが、それよりも柚里がすかさず男の子の後ろに回つて男の子の口を手で押さえながら耳元で何か話しているのを見たときになんとなく嫌な気持ちになつたのです。

「ご……ごめんなさいっ！こらっ……くん、そんな風に人を指さしちゃ駄目でしょ！猪俣さんにお詫びして？」

「あー……。ほんま、ごめんなさい」

男の子はしゅんとして、ぺこりとお辞儀をしました。なぜか一緒に柚里も頭を下げています。

「いいですよ。俺がその子の知り合いにでも似ていたんでしょっから」

「いやー、そんなわけやないんやけど」

「？」

「こらっ！アキくんっ！！」

「ああっ。……またやつてもうた」

「駄目でしょ」と男の子に向いて叱っている柚里をほほえましく見てはいるものの、さきほど彼女が行った名前に何かがひっかかりました。

たしかに彼女は男の子を『アキくん』と、うさぎの名前で読んだのです。

このこの名前をつなぎにでもつけたんだろう

そう一人合点をして、それでもなにかおかしいと思ってしまつ自分
分がどうかしていると思つてしまつた猪俣さんでした。

第二十六話

「なあなあ、柚里。お茶頂戴？」

柚里の身体に腕を回しながらアキくんは幸せそうにほぼ笑みます。こんなことは人間でないとできないから、それも子供の格好の時じゃないとよほど親密じゃないとできないから、やりたい放題し放題です。

「あつ……。ちよつとまってね。猪俣さんも、よろしかったら珈琲を飲みませんか？」

柚里はアキくんには見せたことはない、ちよつとはにかんだような笑みを浮かべて猪俣さんに聞きました。

おもしろくないのはアキくんです。

せつかく柚里の身体に抱きついていているというのに、柚里は全然アキくんのことは眼中にないようなのです。

悔しくて悔しくて、猪俣さんを睨みつけてしまいました。

——もしかしてこれはこの子に嫌われたかな？

アキくんが柚里にしがみつくのを見て、この子にとっては自分は随分と邪魔なんだろうと思いつつもこの状況がほほえましくて、ついにつこりと微笑み返していました。

うわー、めっちゃむかつく！

なんやえらい余裕かましてるなあ

柚里は柚里で、別に珈琲勧めんでもいいやん

せつかく楽しんでるのに邪魔されてる気いするんですけど！

ぎゅっと余計に柚里にしがみついて、アキくんは猪俣さんに向かってふふんと笑ってみせました。

だってそうしないと柚里がこの男に取られてしまいそうで悔しかったのです。

せめて自分に余裕があるんだっていうところを見せつけようと思っていたのですが、それはそれでちょっとだけ悪をしているようにも見えました。

「じゃあ少しだけ教えてください？それと今さらだけど、名前、教えてもらえるかな？」

アキくんの必死の攻防に頬笑みながら、猪俣さんは柚里にお願いをしました。

柚里は猪俣さんの名前をお店のネームプレートで見て知っていましたが、猪俣さんは柚里の名など知るはずもなかったのです。

「こうけつ 額 柚里です。織物の額織の『こうけつ』なんですけど、名字は覚えづらいので柚里って呼んでください」

「じゃあ俺も『樹』と呼んでください。樹木の『樹』で『いつき』です」

「え？私の名前にも樹がありますよ？柚里は『ゆず』に『さと』なんです。樹木繫がりですね」

「へええ。おもしろいね」

話しながらもアキくんにはお茶を、樹と自分には珈琲を魔法びんから入れて、レジャーシートに腰を落として他愛ない話をしている

と、柚里と樹の間にちょこんと座っていたアキくんがおもしろくなさげに腐っていました。

「アキくん？どうしたの」

「なんもない。俺、もう一回その辺^へ、走ってくるわ」

すくつと立ちあがったアキくんは、樹をちょっと睨みつけながら「ほな、おっちゃん。さいならっ！」といってさっさと走り去っていきました。

「ちよつと、アキくん！？」

樹さんに失礼だよ！と声をかけましたが、アキくんはもうどこにも見当たりません。もしかしたらそう言われるのがわかっていて背の高い草むらに逃げ込んだのかもしれないでした。

「ごめんなさい。アキくんが失礼なこと言って」

「いや。たしかにあの子から見たら俺はおじさんと言われても間違いないくらいだから。気にしないでください」

「でも……」

「店でもあれくらいの子からよく『おじさん』って言われるしね。本当に気にしないでいいから」

それ以上は何も言えなくなって、アキくんが駆けて行った方向を見ながら二人で静かに珈琲を飲んでいました。

そよそよと気持ちの良い風が二人に向かって吹いています。

はじめて会った人に近しいのにこうして言葉を交わさずゆっくり

とした時間を共有できるのは、とても不思議な感じ

ちらつと樹のほうを向いては珈琲に目を落したりアキくんが駈けていったその先を見たりしていた柚里ですが、同じことを樹が思っているとは考えてもいませんでした。

その時です。

急に吹いた風が、柚里の髪を乱暴に触っていきました。

長い髪が柚里の顔を叩いていきます。

片手では賄いきれない暴れる髪を、樹はそつと柚里の耳にかけました。

親密なしぐさに驚いた柚里は顔を真っ赤にして、口をパクパクさせたかと思うと、うつむいてしまいました。

そんな様子を草むらからじつとみていたアキくんは、深いため息をつきました。

さわさわと目の前の草が揺らめきます。

それほどアキくんのついたため息は大きなものでした。

俺と一緒にの時に、柚里はあんなふうに赤くなんならへん
あんなふうに言葉を失って口をぱくぱくさせたことなんてあらへん
やっぱり、俺やったらあかんのかな

豊かな黄檗色の髪をふるふると震わせて、弱気な心をふるい落とそうとしました。

自分の今の姿がどんなに子供に見えるかなんて、アキくんにはわかりません。

本来の自分の姿しかわからないアキくんですから、今の姿はうさぎの時と一緒に仮の姿でしかないからです。

だから樹と自分と比べても見劣りなどしないはずなのに、柚里は自分には見せない姿を樹には簡単に見せる。

そのことがどうしても頭から離れません。

いくら頭を振っても、目の前の光景を追い出すことができません。

どないしよう

あんな柚里、みたない

俺に向けられたもんやない、あんな柚里なんて……っ

柚里と樹のいる場所に背を向けて、アキくんは息が上がるまで少しでも遠くへと駆けて行きました。

第二十七話

はあはあはあっ

アキくんは後ろを一度も振り返らずに、必死で走りました。わざわざ振りかえらなくてもあの二人が仲良く座って珈琲を飲んでいるのが目に焼き付いているのです。

それを振り払いたくてぶんぶん何度か頭を振りましたが、はらうこともできません。

それならいつそなんにも考えられなくなるくらいに走り込めばいいと思ったのです――が。

あかん……っ

ぜんぜん、あかんがな
いっことも忘れられへん

ほった赤らめた柚里なんて、俺、知らなかった
ずっとずっと一緒にあったん、俺やのに

あんな柚里みたん、初めてや
せやのにあいつはそれを簡単に引き出しやる

俺はっ……俺はいつたいどないしたらいいんやっっ！

ぶわっとな涙が溢れました。

大きな瞳が涙に溺れてしまっそうです。

フィーヨルの国にいたときはこんなに泣き虫ではなかったはずなのに、どういふことかこの国に、柚里のそばにいと涙がとめどなく出てくるように思いました。

涙を流しながらも、辺りに誰もいないことを確認すると、声を上げて泣きました。

「あー……。なんや、慰めてくれるんか。ありがとうな」

草むらに小さくなって座って泣いていると、どこからか鳥たちがやってきてアキくんの肩や腕に乗り、きらきらひかる金の巻き毛をつまんでいます。

アキくんは鳥たちの慰めが痛いくらいに感じましたが、それでももうちょっとだけ自分の情けなさを感じていたいとも思いました。

今どんだけ自分が情けないかなんて、どんだけみっともないかなんて、わかつてるねん

でも

せやからゆうても

堪えることなんてできひん

感情なんて最後までだしきらんと、後で心根に残ってしまっ

せやからもうちょっとだけ、もうちょっとだけ泣いててもええやろ……？

ちりーん♪

綺麗な綺麗な金属音が耳に届きました。

たぶんこの音を聞いたのはアキくんだけで、あの橋の下で並んで座っている二人には聞こえないでしょう。

そのことが、アキくんにはとてつもなく悲しく思えることでした。

こんな情けない状態で、何が成長やねん

どれを成長ゆうねん

それに……。それにこの音を一緒に聞いて喜んでもらいたい人は今、違う男の横におるやん

あー……。ほんま。はよ本当の姿に戻りたいわ

その時です。

きらきらと光が降ってきました。

これはアキくんが元の姿に戻る前兆の光に間違いありません。

「えっ！？あかんやん！ゆうつ……！！」

慌てて元の場所に帰ろうとしても、そこには柚里のほかに事情を全く知らない樹がいるので帰ることもできません。

それにもう、目の前に光の翼が広がって、あっという間にアキくんを包み込んでしまったのです。

そして次の瞬間には、服に埋もれたうさぎのアキくんが茫然とその場所にいました。

アキくんは服を振り払うと、急いで柚里のもとに戻ろうと走り始めました。

さっきは無我夢中で走っていたのでそんなに思ったように思わなかった距離も、うさぎの足では結構な長さがありました。それに泣き過ぎて体力も落ちているようで、柚里のもとに戻るまでに随分と時間がかかっているようなもどかしさがアキくんを襲いました。

ちょうどその頃

柚里は気が気ではありませんでした。

アキくんがなかなか戻って来ないからです。

昨日の魔法の時間を考えればそろそろ時間切れになってもおかしくないのに、アキくんは走り去ったままどこに行ったのかもさっぱりわかりませんでした。

「戻ってこないね」

そわそわしている柚里を、樹は責任感が強いんだなと思い見てい

ました。

「う……ん。探しに行きたけれど、下手に動いてここがわからなくなってしまうたら困るし……」

「じゃあ俺が探しに行こうか？あれだけ目立つ容姿をしているから、簡単に探すこともできるだろうし」

「……人間の姿をしてたらね……」

「え？」

「あつ！ううん。なんでもないの」

あはははは

力なく笑う柚里を樹はいぶかしげに見ましたが、心ここにあらずな柚里は遠くのほうを一生懸命見ているだけで、樹のほうには目もくれませんでした。

がさがさがさ

足元の草が揺らぎました。

そこからひょっこり、うさぎのアキくんが顔を出しています。

けれどもこちらのほうをじっと見ていて、いつここに寄ってこようとはしませんでした。

「柚里さん。ほら、あの草陰にアキくんのようなうさぎがいる」

樹が指さすほうを目で追うと、たしかにそこにはうさぎのアキくんが隠れるようにしてこちらを見ていました。

「アキくんっっ！……！」

柚里は靴をはくのも忘れて、アキくんのもとに駆け寄りました。

そしてその有様に一步下がったアキくんの微妙な気持ちなどお構いなしに、がしつと掴んでほつぺたを引っ張ります。

「いつ……いはいつっ！いはいつて、ゆふりっっ！！」

「痛いじゃないでしょっ！！なんでもっと早くに帰って来ないかな？？」

「へやっていふてもおっ！！……いはいつてっ！！！」

「んっっ？聞こえないなあっ！」

「ふふっっ！ごめんなはあいつっ！」

ぐりぐりぐりぐり

柚里の攻撃はやみませんでした。

それほどまでに柚里はアキくんを心配していたのです。

そのことを十分に痛みとともに頬に感じて、アキくんはとてもうれしく思うのでした。

「うさぎが……しゃべってる」

それは柚里を追いかけてきた樹の驚きの声でした。

第二十八話

まずい

ひじょーーーーに、まずい

柚里とアキくんは、その態勢のままびしっと固まってしまいました。
た。

樹に向けた背中には、だらだらと冷や汗が滝のように流れています。

「アキくん……今、しゃべった……よな？」

さっきまでの他人行儀だった言葉づかいは、驚きのあまりぶっ飛んでいったようです。

まあそのほうが親しみはあるんですけどね。

「えっ??ええ??うさぎがしゃべるわけないですよおおお
っ!」

緊張のあまり声が裏返ってビブラートががっていることにまったく気付かない柚里でした。

おまけに頬をひっぱられながらアキくんがこくこくと頷いてしまっています。駄目です。駄目駄目です。

―あつ！馬鹿アキくんっ！頷いちや駄目でしょっ！

―へやかへっ！（だつて）

―どうにかするから、動かないで

―……わはっは（わかった）わはっは

二人でこそこそと話し込んでいると、急に影が落ちて周りが暗くなりました。

ぎくりとしてその影の主を見上げると、

「ふーん？」

アキくと柚里を覗き込むようにして、腰に手をやって何やら考え込んでいた樹がいました。

「……えー……っど？」

恐る恐るというか、びくびくと柚里が声をかけると、「腹話術？」なんて本気なのか冗談なのかわからない言葉が営業スマイルとともに降ってきました。

「あっ……は、あははは。そうなんですー、腹話術ですっ！」

「なわけ、ないよね？」

につこりとはほ笑む樹の後ろから、黒い三角がついた尻尾が見え隠れしているようです。

わかつているなら、トドメを指すような話を振らないでほしいものです。

「アキくん？」

びくっ！！

樹に声をかけられて身体が勝手に反応してしまったアキくんを、誰が攻められるというのでしょうか。

いまやにつこりほほ笑む樹を誰もが腹黒（もしくは悪魔）だと思
っていることでしょう。そうに違いありません。

だって、わざとアキくんに声をかけて、自分の言葉を理解してい
るかどうかが試していたんですから。

「やっぱり。人の言葉がわかるみたいだから、しゃべってもおか
しくは……まあ、あるけどな」

「い……樹、さん？」

「なあ。アキくんって、しゃべるんだろっ？」

しゃがんでいる柚里に覆いかぶさるように話す樹は、柚里やアキ
くんに逃げないようにしているようです。

というか、柚里もアキくんも状況に自分たちが起こしてしまった
状況に追いつけずに固まったまま動けないというのが本当のところ
ですが。

「そ・そ・そ・そんなこと、あるわけないですよおおおっ！」

あはははは、と乾いた笑いで最後のあがきをした柚里ですが、樹
のきらりと光った目を見たら、もう駄目だと観念してしまいました。

「柚里さん？」

「……はい」

「アキくん？」

アキくんは大きな瞳を真っ直ぐじーっと樹を見据えています。
ちよつと挑戦的です。

「……そういえば、あの輝かしい色の近所の子供さんは？」
「え？」

「柚里さんはその子を探していたんだろ？見当たらないようだけど、大丈夫なのか？」

だらだらだら

音が聞こえるんじゃないかと思うくらいに、背中の汗が落ちていきます。

アキくんがしゃべるといことがばれたとしても（いや、十分にばれていますが）、まさかうさが人間になるだなんて、誰が信じられるでしょうか。

しゃべることをなんとなく理解してくれている樹でも、自分の手の中にいるこのしゃべるうさぎのアキくんが、ご近所さんと偽ったアキくんだとは思ってもみないでしょう。

どうしよう

まさか本当のことなんて言えるわけないし
だけどここの状況で、どうやって誤魔化すことができるのかな

柚里はアキくんをじつと見ましたが、アキくんは首を振るばかりで一言も話そうとはしませんでした。

わんわんわんっ

土手の上で繋がれていた樹のわんこたちが、さすがにしびれを切らしたのか鳴き始めました。

樹は自分の犬たちに声をかけてからちらりと柚里を覗き込むと、明らかにほっとした表情でアキくんを抱き寄せていました。

「犬たちが騒ぎ始めるから散歩に戻るけれど、途中であの子を見つけたら電話するから」

「あ……お願いします」

「珈琲、御馳走さま。じゃあ、また。……アキくんも、またな」
「また」

樹が土手の上まで駆け上がると、わんこたちが飛び上がって喜んでるのがわかりました。

随分とお預けを喰らっていたようで、すぐにでも散歩に行きたそうに尻尾を勢いよく振っています。

そんなわんこたちを樹が笑いながら撫でてやると繋げていたリードを自分の手に巻きつけて、最後にちらつと柚里のほっぺを見てから、アキくんが走り去った方向に散歩に向かいました。

十分に樹が見えなくなってから、柚里はアキくんに叱り始めました。

「どうして人間の間に戻って来なかったの？」

「えーっ！今さらその話蒸し返すん？」

「当たり前です！それに服や靴はどこにあるの？」

「……えーっと、あっち？」

指さす方向は樹が向かったその場所です。

はあ、とため息をついた柚里は、しゃがみ込んでしまいました。

「なあなあ、ごめんって」

「んー。まあ、いつ人間に戻るかって正確になんてわからないから仕方がないんだけどね」

「そっ！そうそう、そうやねん！だから、しゃーないねん！」

むに

能天気な誤魔化そうとしているアキくんのほっぺたを指でかく

つまみました。

「あーのーねえ？だからって開き直るのは違うでしょ！」

「ふあーい」

「もうちよつとしたら服と靴を探して、家に帰ろうね」

「えーっ！！もちよつと遊びたい！」

「どの口がそんなことを言うんでしょねえ???」

むにむにむにむに

「ゆふりっ！いはいつへ!!」

「なーにをいつてるの？そんなに強くなんてしてませんよー？」

どうしてのど元過ぎたら何とやら状態になれるのか、柚里にはちつともわかりません。

たしかにアキくんを力いっぱい遊ばしてあげたいと思ってここまで二日続けてやってきたはずですが、二日とも散々な目に会っているような気がしてきました。

ああ、家に帰りたい……

遊び足りなくてうずうずしているうさぎのアキくんを横目に、切実に思う柚里なのでした。

第二十九話

あれから。

アキくんはうさぎの格好で存分に草を踏みしめて駆け廻り、体中に草をくつつけて、くたくたになつては柚里のもとに帰ってきては休息をして、そしてまた草むらに突っこんでいきました。

それを何度か繰り返した後、柚里をひっぱって服と靴の回収をしてもらいました。

もともとアキくんの発散が目的のお散歩ですから、柚里はアキくんが満足してくれてほつとしていましたが、どうしようもなく神経が疲れてしまっていて、早く帰ってソファにダイブしたいとも思っていました。

「アキくん、そろそろ帰ろうよ」

「えーっ」

「だってほら、周りに人や動物が増えてきたよ？また犬に吠えられたらどうするの？」

「むー。……しゃあないなあ。柚里もなんや顔色悪いもんなあ。ほな、帰る？」

顔色悪いって言うてくれるわりには、今までこつちのことなんてお構いなしに走り回ってたじゃない！と、心の中でつつこむ柚里ですが、それを言うては元も子もないので大人な柚里は黙って頬笑みました。

帰りは緩やかに過ぎていきます。

十分に遊んだアキくんは、キャリーから顔を出してはいるものの、疲れ切っていたようでうつらうつらと首を振っていました。

そんなアキくんを微笑ましげに見て、アキくんを起こさないよう

に柚里はゆっくりとベダルを漕いでいました。

家についても起きることのなかったアキくんでしたので、アキくんが入ったキャリーバックをそおつと運んで中に入りました。

ふふっ。
かわいいなあ

体がリズムをもって上下しているその姿は、
見ているだけでもすごく幸せになる。

癒し、なんて言葉は使い古されて大嫌いだけれど、でもアキくんを見ているとそんな言葉さえ簡単にでてくる。

アキくんがここにいてくれて、本当に幸せだなあ

朝のハプニングが心の隅っこでちよつと引つかかつてはいるものの、アキくんの寝姿を見ていると嫌なことなんて忘れてしまいそうです。

知らずと口元に笑みを浮かべて、柚里はしばらくアキくんを眺めていました。

ENERGIZANTE

携帯電話のコールが、部屋一面に響き渡ります。

すやすや眠るアキくんをぼうつと見ていたら、いつのまにかオレンジ色の日差しが部屋に差し込んでいました。

あわてて携帯電話を取ってディスプレイを確認すると、見覚えのない番号が表示されていました。

「もしもし」

ちよつぱり警戒するような声になるのは仕方がありません。

『こんにちは。猪俣です』

少し笑いを含んだ声は、柚里の心の中なんてお見通しのよう思っているからでしょう。

そう思うと恥ずかしさが前に出てきそうになりましたが、それよりも樹が言った朝のあの思わせぶりの言葉が頭に浮かんで、言葉に詰まってしまうました。

『……今、ちょっといいかな？』

「なんですか？」

『そんなに警戒しないで』

電話の向こうから苦笑が聞こえてきます。

『ご近所のお子さんは、どうだった？』

「あつ……。大丈夫です。あの後すぐに帰ってきました。ご心配をおかけしました」

『そうなんだ？それはよかった。散歩がてら探してみただけで見つからなかったから、心配してたんだ。……かくれんぼが上手な子供さんなんだね』

「あはは。そんなわけじゃないと思いますけれど」

そこから他愛ない話をしばらくして電話をきくと、足元にアキくんがやってきていて、じつと柚里を見ていました。

「それ、何の魔法？」

「ん？なにが？」

「それ、前もみたけど。なんでそんな板に話すん？それにそこから誰かの声も聞こえるし。今のんは今朝おった人やろ」

「あー。これは携帯電話っていうんだよ。魔法じゃなくて、電波で電話の向こうの人と話することができるの」

「……でんぱ？」

「そう。……あー、でも私だって詳しく知っているわけじゃないから、これ以上は聞かないでね」

アキくんは柚里の言っていることがさっぱりわかりませんでした。この世界のことは柚里にしか聞けないし、アキくんにとっては柚里がこの世界と言っても過言ではないので、柚里がわからないことはアキくんにとっては理解できないことなのでした。

「ええっ……と。ほなどうやったらそれがわかるん？」

「こちらこちらこちら。」

柚里は顔をちよつとだけしかめました。

電波のことを知れたがるよりも、もっと大切なことを沢山知るほうがいいのではないかと思ったからです。

「そりゃあね。本で調べたらわかると思うけれど、でもアキくんはその前にもっと大切なことを知る必要があるんじゃない？」

「へ？なんのこと？」

「たとえば、今日だって私の顔色が悪いってわかっていたのに自分のことを優先して遊ぶほうを選んだでしょ？」

「ええっ？顔色悪いからって、ちゃんとして帰ってきたやん」

「違うでしょ。帰ることを決める前から、アキくんは私の具合が悪いつて思っていたんでしょ」

「ぐっ」

「そうなのです。」

アキくんは柚里の顔色が優れないとわかっていたのですが、自分

が草むらで走り回る楽しさのほうを取ってしまったのです。

けれど、アキくんは自分がもつともつと走りまわりたいのを堪えて、柚里のことも考えて途中で帰ってきたのですが、柚里は容赦がないようです。

「でつでもつ！俺、柚里がしんどいんやつたらそこにいたほうがええんとちゃうかって……思ってたし。でも調子が戻らんようやら家に帰るん承知したやん」

「あーのーねー？調子が悪そうな人がいたら、家に帰ってゆっくり休養を取ることを勧めるものですよ。アキくんは確かに家に帰ることは同意してくれたけれど、でも自主的じゃなかったよね？私の調子が悪そうだって思ってくれていたのに、口には出さずに自分がしたいようにしていたでしょ？」

「えー……。だつて……」

「だつてじゃないの！もし逆にアキくんの調子が悪くて、でも私がしたいことばかりしていてアキくんをそのままにしていたら、どうする？」

「え？……そりゃあ、なんで気づいていくれへんねんとか、はよ横になりたいとか、思うと思う」

「自分のことだったたらそう思うことでも、他人のことだったたら自分の都合のいいようにしか思えないっていうのはどうかと思うよ？」

「……」

「そういうことのほうを、電波とか難しいことよりも先に知っていてほしいなって思うんだあ」

ひょいとアキくんを抱き上げて膝の上に乗せてから、ゆっくりと背中を撫でて諭すように話していました。

くすっ

今日はアキくんを散歩に連れて行ったり、寝顔をみては幸せになったり、そして今みたいな話をするなんて、まるでアキくんのお母さんにでもなったような錯覚に柚里はとらわれて、少しだけ笑ってしまいました。

そんな柚里をアキくんはいぶかしげに見ていました。

第三十話

波瀾な休日があけて。

いつもと同じ、変哲もない平日がやってきました。

いい加減、一人でお留守番することにもすっかり慣れたアキくんですが、時たま家のみしつと軋む音やガタガタと風で揺らぐドアの音にびくつくときがあります。

やはりそれはうさぎの耳の感度のよさなのか、うさぎ特有の臆病な性格のせいなのか、それとも柚里がいない寂しさがそう思わせているのかはわかりませんでした。

やっぱ一人はさみしいなあ

慣れんわ、こればっかは

王子であるアキくんは、どんなにフィーヨルの国にいるときはどんなに一人になったとしても必ず誰かが姿を隠すように控えていたので、本当の意味で一人にいることなどありませんでした。

けれどもここでは柚里だけです。

柚里と二人で暮らすこの小さな家だけが、アキくんの世界なんです。

それはそれで、とーっても幸せなんです、柚里がこの小さな世界から仕事に出てしまうとアキくんにはなにもすることがありませんでした。

何かせんとあかんようになる

退屈な日常なんて、アキくんは望んでいませんでした。

いえ、波乱万丈の人生も望んではいないんですが。

けれども一人で何もすることなく家に居続けるということが、魔法をかけられてうさぎになってからの怒涛から落ちついてきたアキくんには、耐えられなくなってきました。

でもなあ。俺、こっちの文字とかわからんしなあ

柚里は仕事行っただけから、教えてくれる時間なんてないやろ
うし

この部屋で外に行くのも、今一勝手がわからんし
どないやっていらんこと知れっちゅーねんな……

ぐるぐると考える時間だけはたっぷりあるアキくんでしたが、考えることにも疲れてしまっただけでソファの上で眠ってしまいました。

ふと、意識が戻ってくると、ちょうどめのまえのところに掃除機が置いてありました。

フィーヨルにはない『電気』というもので動く魔法の道具です。

俺、柚里に拾われてほんま幸せやけど、何の見返りも求めてけー
へん柚里にこのまま甘えていいんやろか？

この鈴のおかげでちよつとの間でも人間に戻れるんやったら、その分使っただけで柚里の役に立てるんとちゃうん？

この便利な魔法つこうて掃除してたら、柚里の仕事が減るんとちゃうか

掃除やなんて侍女がするもんで王子の俺がするもんちゃうけど、でも柚里が侍女やないし

それに俺がこの世界でできるもんってめっちゃ限られてるしなあ
掃除、したら喜ぶかなあ

掃除機を見つめながらもんもんと考えていたアキくんですが、「よしっ」と掛け声をかけたかと思うと左手で鈴をリーンと鳴らしま

した。

すると光が音を立てているようにキラキラと輝きだし、羽のような形になってアキくんを包み込みました。

そしてその羽が四散するとともに、子供の姿のアキくんが現れました。

もちろん裸です。まっぴです。

あ、やべ

服出しとくのん、忘れてたわ

たとえ部屋には誰もいないなんてわかってはいるものの、一応の羞恥心はあるのでとりあえず急いで服を探しました。
ところがいつもの場所に服がないのです。

えっ？なんで？

仕方なしに柚里のベッドのシーツをぐるぐるに身体に巻きつけて、部屋のあちこちを見回してみましたが、やはりどこにも服はありませんでした。

えーっ！なんでやねんなあ

……あつ。そっか

昨日着たから洗ってくれたんやわ、きつと

変わった鍵のかかっているベランダに通じるサッシをなんとか開けて物干しをみると、やはりそこには昨日着ていた服が洗って干してありました。

柚里つてほんま、魔法使いみたいになんでもさっさとやってまうねんなあ

ほんま、お嫁さんになってくれへんやろか

ニヤニヤしながら物干しから自分の服を取りこんで着替えました。
そしてふと考えたのです。

柚里はなんでもすることが早いけれど、でも仕事で疲れて帰ってくるんやから俺がやっててもええやんな？

どうせすることないし

柚里、喜んでくれるやろうし

一緒に暮らし始めたときに見せてくれた、ものすごく喜んだ顔や頬ずりを思い出して、アキくんはさらににやつきました。

そしてベランダから洗濯物をひとつひとつとりこんで、ソファの上に置きました。

それが終わると今度は掃除です。

掃除機の使い方は柚里を見て知っていました。

ボタンを押したら動くのです。

片手で柄を掴んでそこについているボタンを押すと、ウィーンという音とともに掃除機が動き始めました。

これで床を撫でるように動かすと、ゴミがなくなっていくのです。本当に魔法みたいです。

アキくんはずずっと掃除機を動かして、床を掃除し出しました。もともと綺麗に使っている部屋なのでさして汚れてはいなかったのですが、それでもなんだかすっきりとした感じがします。

部屋中を掃除し終わると、もう一度ボタンを押して掃除機を止めました。

意外と簡単？

心なしか綺麗になったと思われる部屋を見回して、アキくんは満

足でした。

ちりーん
♪

綺麗な綺麗な金属の音が、部屋に響き渡ります。

今日はその音を聞いても凹むことなく、自分を誇らしげに思えるような音に聞こえました。

気持ちの問題かもやけど、なんか今日は嬉しいなあ

こつやって喜んでもらえるって思いながら何かするって、こつちまで嬉しくなることやねんな

アキくんはソファに座って柚里が帰ってくるのをいまかいまかと待ち受けていました。

第三十一話

ガラス越しに見える外の景色が綺麗なオレンジ色に染まるころ。
アキくんのいる部屋の中はだんだんと暗くなって、アキくんを背
に黒い影が伸びていきます。

おもしろいなあ

当たり前のことやけど、当たり前すぎてちゃんと見たことなかつ
たわ

フイーヨルの国ではなかった静けさが、アキくんに『思考』を与
えたようです。

前の俺やったら、こんなに静かなところ、耐えられなかったやろ
うなあ

絶対寝てるって！

真っ暗になっていく世界。

けれども真の闇はこの世界にはないもので。

外の建物からはぼつぼつと明りが漏れ始めました。

ろつそくの火ではない、電気の、簡単には消えることのない明り
です。

もちろん、この家にも電気の明りはつけることができますが、ア
キくんはあえて電気をつけずに、薄暗い部屋の中で柚里の帰りを待
っていました。

別に電気代がかかるとか、そういったお話ではありません。

たんに薄暗いこの時間を我慢すると、柚里が帰ってきたときにはば

つと付けてくれる明りがとっても幸せを運んでくるように思えるからです。

それに普段はうさぎの姿なので、電気をつけるスイッチまで手が届かないというのもあったのですが。

がちやがちやがちや

柚里が帰ってきた音が聞こえます。

ドアのカギを開けている音です。

アキくんはわくわくしてその瞬間を待っていました。

がちや

「ただいま。アキくん、いい子にしてた？」

ぱちぱち

電気のスイッチを押す音が、部屋に響きます。

「今日はね、アキくんの好きなオムライス作るからね」

会社の帰りがけに買ってきた食材を冷蔵庫に入れるために、ソファにいたアキくんに気付かずキッチンへと入った柚里が、アキくんにはちよつと残念でした。

柚里が忙しいってわかってんねんけどなあ

でも、ちよつとくらいはこつち見てくれてもいいのに

声をかけようかとも思ったのですが、うさぎのときと人間のときでは声色が違っていてすぐにばれてしまいます。ですので、アキく

んは柚里が気付くまで一言もしゃべらないように注意していました。

「あれ？アキくん？」

頑張つて黙っています。

「……寝てるのかな？」

違います。起きていますよ。

「ま、いつか。作り終わってから起こそう」

あらら。予想外なことになりました。

結局一度もリビングのほうを見ることなくご飯を作り終えた柚里は、アキくんの食事をアキくんがうさぎのときに使っているプレートに入れてリビングまで持ってこようとして、ソファの上で寝ているだろうアキくんを見つけました。

「きゃああああつ！アキくんっ！！？」

「あゝ、なんですか。やっと気付いてくれましたかあ？」

柚里の尋常じゃない叫び声に、眠りかけていた意識が戻ってきました。

ところが、その叫び声はアキくんが想像していた『嬉しい』叫び声ではなく『なーにやってくれちゃってるんですかねえ』と言いたげな叫び声だったのです。

んん？思っ^{ちや}たんと違う驚き方、してんなあ

それでも一応驚いてくれた柚里にちょっとだけ満足をしたアキく

んですが、柚里のがつくりと落とした肩を見たたん「あれ？もしかして俺って何か失敗やらかした？」と不安になって身体をソファから起こしました。

そうです。まさにその通り。

「あゝ。アキくん……。あ、り、が、と、おおっ！」

「何それっ！？せつかく洗濯物を柚里がやってるように家の中に入れたのに、褒めてくれへんのん？」

「褒めてるよゝ。ありがとうって言ったでしょ」

「うわー、ひどいわ。ありがとうって言われたけど、そんな文字にしたらそうなだけやん」

「おー、すごいねっ。アキくんは心まで読めるようになったの？それも魔法の力？？」

「んなわけ、あるかあっ！」

人間の姿になっても突っ込みは健在です。

「うん。ほんと。ありがとう」

につこりと笑いながらもひくひくと唇をひくつかせている柚里を見ると、やっぱり自分とはんでもない間違いをしてしまったのではないかと逃げ腰になったのですが、もともとソファに座っているだけあって背をぴったりとつけてしまつとどこにも逃げるところはありませんでした。

「あっ！アキくん、どいてっ！！」

がちやんとトレイをテーブルに置いて、アキくんの座っているソファにどかどかと足音高くやってきた柚里は、アキくんがソファから飛び降りるや否やアキくんの下敷きになっていてしわくちゃんにな

った洗濯物を持ち上げました。

アキくんが外からとりいれたものの置くことをせずソファに置いた洗濯物です。

朝のあわただしさの中でもちゃんと洗って干しておいた、洗濯物です。

それがアキくんの好意によって、見事にくしゃくしゃになっていました。

けれどそれはアキくんが初めて自分から何かしようとしてくれた、大切な証です。

よく見ると心なしか部屋も綺麗になっているように思いますし、いつも置いている場所から掃除機も心持場所が違っているようにも思います。

「アキくん。もしかして、掃除もしてくれたの？」

「う……うん。あかんかった？」

「ううん。……ありがとう。とっても、とっても嬉しいよ」

心のこもった一言に、アキくんは破顔しました。

まるでそれが合図のように、きらきらと輝く光が下りてきて、その光がアキくんを包み込みました。

そしてその光が霧散すると、いつものうさぎのアキくんが現れました。

そのアキくんを柚里は優しく抱きよせて、ソファに座り、そしていつもよりももっと慈しみのこもった優しい手つきで、アキくんの綺麗な毛並みをなでました。

「お手伝いしてくれて、ありがとう」

「ん〜。これくらいしか、俺、出来ひんし」

それに何か間違えていたんだということが、初めの柚里の態度でわかったのです。

「洗濯物」

「うん」

「中にいれたらあかんかった？」

「ううん。取り入れてくれて、嬉しいよ？でもできるなら、畳んでくれたらもっともつと嬉しかったかも」

「畳む？畳むって？」

アキくんは王子さまなので、服は脱ぎっぱなしにしても従者がハンガーにかけたり畳んだりしてくれていました。ですから、すっかり服は畳まないと皺くちやになるということを忘れていたのです。

「あー、そつか。畳まんと、皺くちやになるねん！。その上俺ってば、それに凭れかかってたからもつと皺くちやになってるし。」

「……ごめんな、柚里」

「ふふ。アキくんて、素直になつたね」

「え？俺って初めから素直やけど？」

「……前言撤回。自分を素直っていう子は、素直じゃない」

ぶいとむくれたうさぎさんが、柚里の膝の上でたんつと後ろ足を踏みました。

「いたたた……」

「あ、柚里！ごめんごめんっ」

うさぎの後ろ足の蹴りは、ものすごく力強いもの。

いくら無意識の行動だといっても、柚里の太ももには痛みを与えてしまったのです。

「ごめん、柚里！なんでもするから許して」

顔をしかめる柚里を心配そうに身体を捻りながらアキくんが覗きこみました。

大きな黒い瞳がうるうると潤んでいます。

「ふーん？なんでもするの、アキくん」

アキくんはこくこくと首を上下に振りました。

わざとではないにしても、人に痛みを与えてしまったのです。お詫びをするのは当たり前なのです。

「じゃあ……今週中のお掃除とお洗濯、頼んじゃうぞ」

「えっ？えええっ！？何それ。等価交換やないやん！」

そうなのです。お詫びもお礼も、相手との等価交換、つまり同じだけのものを与えなければならぬのです。

けれど柚里はそれを知っていても自分の痛みよりも大きいものをお詫びに選びました。

「アキくんはさつき『なんでもする』っていったよね？だからお掃除とお洗濯を頼んだんだよ？等価交換なんて難しい言葉を知っているのなら、どうして初めからそうしなかったのかな？」

「うっ！……だって、つい……」

「つい、じゃないよ？ちゃんと非礼に見合ったお詫びを選ばないとね。わかった？」

「はい……」

アキくんはしゅんと俯いてしまいました。

自分をよく見せるために大きな口を叩いてしまったのですから、仕方がありません。

冗談を言っているいい時と悪い時がありますし、ね。

そんなわけで、一週間のお掃除お洗濯当番を任命されたアキくんなのでした。

閑話 いち（前書き）

23年11月9日にアルファポリス「Webコンテンツpick up!」に掲載される記念に、ちよこつと童話パロなぞ書いてみました。

本編とはまーったく関係のないお話なので、読みすつ飛ばしてもかまいません（笑）

ちよつとしたブレイクにお付き合いいただければ嬉しいです。

閑話 いち

日曜日の朝のことです。

いつものようにピクニックに向かった柚里とアキくんは、いつものように河原の橋の下を陣取ってゆっくりとした一日の始まりを楽しんでいました。

柚里が小春日和にうつらうつらしていると、さっきまでどこかに遊びに出かけていたアキくんがうさぎの姿に戻ってぴょんと現れました。

けれどもアキくんは柚里のことなどお構いなしに、なにやらあわただしげにあたりを見回して、そして何かを見つけたようでそちらのほうに一目散に走り始めました。

「あ、アキくん。まって！」

日も高くなってきたことだし、もうそろそろ帰ろうかと思っていたので、柚里はアキくんを呼び止めたのですが、アキくんは柚里の言葉などまるで聞こえなかったように走り去っていきました。

こんなことは、初めてです。

いつもならどんな小さな独り言でもアキくんは柚里の言葉を拾ってくれます。

それなのに今は柚里の顔すら見ようともしませんでした。

柚里はおかしくおもって、アキくんの後を急いで追いかけてきました。するとどうでしょう。

あともうちよつとで追いつくという時に、アキくんがぐるりと振り向いて柚里を見てにまっと笑ったのです。

——え？

柚里が驚く間もなく、アキくんは目の前にあった大きな木の、ちょうどアキくんが入れるくらいの大きさの洞に飛び込みました。

「アキくん?！」

確かに洞の大きさはアキくんが入れる大きさの入り口ですが、木の大きさからみてアキくんが中に入りきるとは思えません。それなのにアキくんのしっぽも耳も洞からはみ出さずにすっぽりとおさまっているようなのです。

洞の中で身動きがとれないでいるのかな？

急いで洞を覗くと、真っ黒くて先がまったく見えません。

仕方なしに手を入れてアキくんを引っ張りだそうとしました。

ええっ！？

中に入れた腕が、内側から誰かに引っ張られて、柚里は洞の中にしゅるしゅると入って行つてしまいました。

「えええええええええええええええええつっ！？？」

洞の中に入ったかと思うと、いきなり暗闇の中に落ちていく感覚に襲われました。

どんどんどんどん闇の中に落ちていくと

ぼとん

綺麗に着地しました。衝撃も何もなく。

怪我もしていないし、痛みもない。

結構な高さから落ちたような感覚だけはあるのに、痛みがないってどういうこと？

痛みの全くない腕をさすろうと右腕を上げようとした柚里は、自分の腕の動き方がおかしいことに気がつきました。

どうも肘のあたりからまっすぐ腕を伸ばすことができないのです。暗闇の中では、腕の状態をみることもできません。

何かあたりに落ちていないかと、手を地面に這わせてみました。すると

ぱふっ

「きゃあああああああああつつつつつ！！！！？？？」

自分の手が毛むくじやらになっていたのです。そして尖った爪の痛みも感じました。

あまりにも驚いて、わたわた足踏みをしたら

たんっ

聞きなれた音が耳に届きました。

「…………え？アキくん…………？」

でもその音は自分の足が出した音です。

足の裏には地面の土の感触も感じました。

——土の感触？

なんとなく、柚里は判ってしまいました。
そしてそのことを確かめようと、肘の伸びない手を頭に伸ばして
触ってみました。

あたりです。

嫌なことが当たってしまいました。

柚里はうさぎになっていたのです。

「なんでっ?!

どうして私がうさぎになってるのーっ!」

閑話に

真っ暗で周りも自分も何もかも見えない、そんな場所で。

柚里は一人（一羽？）、うさぎになった自分を微妙に受けて入れていました。

まあそれは、アキくんという存在があったからですけどね。

あ、アキくん！……そういえば、どうしてここにいないんだろう？

自分がうさぎになったことで頭の中がいつぱいになってしまって、すっかりアキくんのことを忘れていた柚里でしたが、ここにきてようやく思い出したようです。

仕方がないっていえば仕方がないと思いますけど。

「アキくん。アキくん？どこに行ったのー？」

闇が柚里を襲ってきます。

どんなに声をだしても、闇が全部飲みこんでしまって、アキくんには届かないようでした。

うー。怖いよう。でもアキくんだって怖いはずだから、探してあげないといけないよう。

自分だっとうさぎになってしまったのに、それでもちらちらとお姉さんな柚里が頭をもたげます。

怖いながらも目を凝らして、少しでも何か見えないのかと探っていると

きらり

何かが前のほうで光りました。

柚里はさっそくそちらのほうに駆けだします。

初めは小さかった光が、だんだんと大きくなって、とうとう光のもとへと駆けつけることができました。

ひかりは小さな窓のようなところから漏れていることが分かりました。

柚里は躊躇なくその窓をぐぐりぬけると、一つの大きな部屋がありました。

いきなり光の中に入ったので、柚里は目がつぶれてしまふんじゃないかと思いましたが、何度か目をぱしばしと閉じたり開いたりしているうちに慣れてきました。

するとその部屋の真ん中に、たった一つだけぽつんと丸いテーブルがあつて、そのテーブルの上には何やらお皿が載っていました。それ以外の家具は部屋には一切なく、窓は柚里がくぐってきた小さな窓だけで、扉なくて天井がやたらと高いのです。

変な部屋。

とりあえずアキくんはいないようでしたので、そのまま元いた場所に引き返そうかと思いましたが、小さな窓の向こうには闇しかなかったことを思い出しました。怖くて戻ることができません。かといつてこの部屋にいても出口はありません。

柚里は途方にくれました。

どうすればいいのーっ！

頭を抱え込んだ柚里でしたが、ふと、部屋の真ん中にあるテーブルの上に何かあるかもしれないと思い立ちました。

テーブルの高さはうさぎでは高すぎるので、どうやってよじ登れ

ばと考えましたが、そういえばアキくんは草むらでよくメートルくらいの高さまでは平気でジャンプしていたことを思い出しました。

そっか。勢いよくジャンプ！だね。

部屋の端から助走をつけて、ジャンプ！……はい、予想通り、失敗。

それでもめげずに再度挑戦。

もう一度部屋の端にいつてから、助走をつけてジャンプ！成功です！

テーブルの上に乗ることに成功した柚里ですが、勢いがつきすぎてそのまま落ちそうになりました。

おーっとととと。

身体の体重を反対に向けて、テーブルの内側に倒れこむようにへたりました。

かちっ

お尻の下から、なにやら硬質なものを踏みつけて、なおかつ機械的な音が身体を伝って聞こえました。

おそろおそろその場所からどいてみると、まあくて赤い、プラスチックでできたおもちゃのようなスイッチがてかてかと光っていました。

———なんでこんなものがここに？

その時です。

ばふんっばふんっばほっつっ！！

使って立つてみることにしました。

背を伸ばして落ち着いて周りを見てみると、池だと思ったのは大きな大きなティーカップでした。

その上、巨大でおかしな格好をした人たちがティーカップを覗きこんでています。

柚里は生きた心地がしませんでした。

だって、極上とはいえ紅茶でずぶぬれですし、巨人さんのティーカップの中に入り込んでしまったようですし、巨人さんはごみのようなものが紅茶にはいったみたいな目で柚里を見下ろしていますし。

——えーっと……逃げたほうがいい、よね？

「……これはこれは、すばらしいお客様が空からお見えになられたようですな」

「まさに、素晴らしいとはこのことです。時計を持っていないうさぎなど、珍しくも素晴らしいものでしょう」

「ええ、ええ、まさに。なんてすばらしいうさぎなんでしょう。

このよき日に乾杯をいたしましょう！！」

一人の巨人さんは、自分の頭の五倍はありそうな大きすぎるハットをかぶり、自分の体よりも大きな赤いリボンをしていました。一人の巨人さんは、髪を五倍に膨らせて、その上に大きな池をつけて帆船を浮かべていました。

そしてもう一人の巨人さんは、肩幅が他の人の五倍ほどあって、その広い肩にたくさんの色とりどりの鳥をとまらせていました。

そうしてそれぞれ自分の手の五倍ほどの大きさのティーカップを重そうに腕をふるさながら持ち上げて「かんぱーい」とティーカップをたたき割りました。

目の前で滝のように落ちてくる紅茶を頭の上からざぶんと被って、柚里は自分の入っているティーカップで溺れそうになりました。

巨人さんたちはけたけたと笑い、ケーキを互いにぶつけ合っています。

柚里の目の前にもそのケーキが甘いにおいを放ちながら落ちてきました。

巨人さんたちのいかれたパーティを呆れながらも、面白くてじっと見ていましたが、だんだん自分も参加したくなってきて、とりあえず目の前のケーキのおいしそうなホイップをぺろんと舐めてみました。

美味しいっ！

こんな美味しいケーキを投げるなんて、なんてもったいないの！？

頭の上で飛び交うケーキをひょういとして、もぐもぐと食べ始めた柚里でしたが、なんだか食べていくうちの体がぽかぽかと暖かくなってきました。

そして巨人さんたちがどんどんどんどん小さくなっていったのです。

気がつくと、巨人さんたちは小さな小人のようになって、小さなうさぎだった柚里は、怪獣のようなうさぎになっているではありませんか。

いやあああああああ！

何これ！ありえなーいっ！！！

閑話 に（後書き）

「閑話 いち」にて、うさぎについて誤った表記をしてしまいました。

読者の方からご指摘を頂き、さっそく改めさせていただきました。読者の皆様には御不快な思いをさせてしまい、申し訳ございませんでした。

また、お教えいただけしたこと、本当にありがとうございます。文中で不適切な表現及び誤字脱字等ございましたら、もちろんそのようなことがないよう努力はいたしますが、もしございましたらお教えいただけたら嬉しいです。

閑話 さん

それはとっても不思議な光景でした。

恐竜なうさぎとなった柚里の足元には、子供のおもちゃみたいなテールが真ん中からへし折れて、茶器はひっくり返し、まるで竜巻が襲ったようにひっちゃかめっちゃかになっていました。

さっきまではたしかに巨人さんだった人達は、今はまるでノミのように小さくなって、振り落とされまいと柚里の足を必死になって掴んでいます。

そしてなにより、目に映る風景があまりにも違うのです。

すべてのものが小さくて、ちよつとでも触れれば壊れそう。聞こえてくる元巨人さんたちの声も声高で早口で話していて、何を言っているのかさっぱりわかりませんし、さっきから身動きするたびにあたりに風が吹いて樹がしなり、花が飛び散っていきます。

柚里はそんなことをしたくなくても体が大きいだけでそんな風になってしまうことにとっても悲しくなりました。

ぼとつ

大粒の涙が落ちました。

けれどもそれは、柚里にとってはただの涙ですが、元巨人さんたちにとってはまるで洪水に襲われたようになって柚里の足から流されてしまいました。

……そんなつもり、ないのに

うつくうつくと涙を堪えて上を向いていると、目の前に大きな赤いポンタイを膨らませて気球のようにした元巨人さんが現れました。

「×××××!」

「なに？何を言ってるの？」

柚里の吐く息が赤い気球にあたり、きゅるきゅるとスクリューの
ように渦を巻きながら飛ばされていってしまいました。

……そんなつもり、ないのに

今度は色とりどりの鳥さんに捕まってやってきた元巨人さんが、
目の前にやってきました。

「×××××!」

「なに？何を言ってるの？」

先程のことがあったので、柚里は息を下に吐きながら言葉を紡ぎ
ました。

するとその声の大きさに驚いた鳥たちが驚いて散り散りに飛んで
行ってしまい、元巨人さんはひゅーんと下に落ちて行きました。

……そんなつもり、ないのに

最後に頭の帆船の帆を大きくした元巨人さんが風に吹かれて柚里
の目の前にやってきました。

「×××××!」

「なに？何を言ってるの？」

「×××時間!」

「時間？」

柚里の言葉はことさらゆつくりと元巨人さんには聞こえるようで、元巨人さんはけたけたと笑いながら遠くの山を指さしました。

「あつちに行けばいいの？」

ぱちぱちと手を叩いてにやつと笑うと、そのままさようと頭を下げた。とたんに頭の池の水がざぶりと落ちて帆船は池に座礁してしまい、ひゆるひゆると下へと落ちて行きました。

さすがに三度目はどういうことになるか理解していた柚里です。で、前足をあげて元巨人さんを受け止めて地上に降ろしました。すると

「×××××！！！」

元巨人さんはものすごく怒ったように柚里の足をばかばかと叩いてきます。

でももともと小さな元巨人さんですので、柚里にしてみたら痛くもかゆくありません。

何かいけない事でもしたのかと、頭を元巨人さんに近づけたところ、柚里が頭を下げたときの風力で元巨人さんはひゅうとどこかに飛ばされてしまいました。

そうして誰もいなくなつたお茶会に、柚里はひとつため息をついて、元巨人さんが教えてくれた山まで行くことにしました。

といっても恐竜並みのうさぎな柚里ですから、遠くの山だと思ったのに意外と近くてさっさと山のふもとまでついてしまいました。

あれ？何もないよ。

元巨人さんが指さしてくれた場所に着いたものの、あたりには草

も何も生えていなくて、というよりもなにやら生臭いにおいがあたりを立ち込めていました。

「ハイホー！！！！」

「「ハイホー！！！！」」

「ハイホー！」

「「ハイホー！！！！」」

どどどどどどつつつつ

何もないと思っていたその場所に、いきなり歓声がわき上がったかと思うと地響きとともに片や黒のトランプ柄を纏った騎士、もう片方が赤のトランプ柄を纏った騎士たちが一斉に柚里めがけてやってきました。

こ、こわいつ！！

思わず身体を伏せて、少しでも隠れるように前足を頭の上に載せました。

すると騎士たちは柚里など見向きもせずにお互いを槍で突つつきあい始めたではありませんか。

突つつかれた騎士たちはぺたんぺたん倒れていきます。軽い音に驚いて顔をあげてみると、そこに倒れていたのは身体自体がカードでできた騎士だったのです。

あまりにことに驚いて声もでませんでした。

ところがその倒れた騎士は、しばらくするとぽふんと空気が抜けて単なるカードに戻って行きました。

おもちゃのような騎士におもちゃのような戦場では、ぱたぱたとトランプ柄の騎士たちが倒されて、あたりには赤いトランプも黒いトランプも、同じ数ほど地面に落ちていきました。

「ハイホー！！」

「ハイホー！！」

とうとう大将戦になったようです。

赤と黒の大将はいつたい何のカードだろうと、柚里が目を凝らして双方の大将を見てみると、そこには赤い甲冑を纏った樹と黒い甲冑をまとった樹が二人、互いにけん制し合っていました。

「えっ？ 樹、さん？」

閑話 さん（後書き）

なぜかアキくんよりも先にサブキャラの樹が登場デス。

閑話 よん

地面に散らばるさまざまなカードの上を、無造作に踏みしめて前進をしていく二人の色違いの大将たち。

それは柚里の見知っている樹でした、そして全く知らない樹でした。

一方の樹は、全身が真っ赤でした。

赤い髪に赤い瞳、甲冑も赤く、持っている槍の柄さえも赤い、そして全身から立ち上るオーラのようなものも赤く染まっていました。もう一方の樹は、全身が真っ黒でした。

柚里のよく知る樹の黒い髪、黒い瞳、甲冑も黒く光っていて、持っている槍の柄も鋼も黒、そして全身から立ち上るオーラの色も真っ黒く染まっていました。

「樹さんっ！」

恐竜うさぎの咆哮が地響きとなって二人の大将を襲います。

どどどーんっ

ぱたり

二人の大将は前のめりに倒れてしまいました。

纏っているオーラはとても強そうなのに、存外、よわっちかったです。

けれども他のカードとは違い、倒れてもカードになることなく普通に起き上がったのはほっとしました。

もし自分のしゃべった声のせいでカードになってしまったら、とっても寝覚めが悪そうだったのです。

「「そこな怪獣！」」

二人ハモって話しかけてきました。

怪獣って……。私に気がつかないにしてもせめて『うさぎ』って
いってよお

いやいや、十分怪獣ですから。

現実逃避にはいつている柚里でした。

「「いきなりこの戦場に表れて、吾の邪魔をするでない！」」

また二人同じ言葉を同じように話しました。みごとなユニゾンで
す。

けれどそれが二人には気に入らなかったようで、同じように地面
に唾を吐いて悪態をつき、同じように相手に槍を向けて睨みつけま
した。

「貴様、何を吾と同じことをいつておる？」

「貴様こそ、吾のまねごとしかできぬのか？ 愚かすぎて片腹痛い
わ！」

やっと同じ言葉を言わなくなったと思ったら、今度はお互い貶し
合いが始まりました。

いかにも筋肉が詰まっています！ といったげな大きな体をしてい
るのに、やっていることと言えば言葉の応戦とは、見ているほうと
してはもったいなくて情けなくて笑いの涙がそうです。

げらげらげらげら

柚里はおなかを抱えて大笑い。

カードが落ちている戦場を、何度も笑い転げて往復してしまいましたが。

そうすると、どうでしょう。

笑ったびに柚里の体が温くなるではありませんか。

そうしてきゆううつと体がしぼんでいくのです。

とうとう普通サイズの大きさになったとき、赤と黒の樹が言い争いをやめて、柚里の近くまでやってきていることに気がつきました。そして赤と黒の槍でつんつんと柚里をつつくではありませんか！

「い、痛いっ！痛いよ！もうつっ！！やめてよ、樹さんたちっ！！」

「そのほうに名を許した覚えなどない！」

赤と黒の大將は、名前を呼ばれたことに腹を立てて槍のさきつちよで柚里をさらにいじめます。

つんつんつん

そのたびに柚里は一步二歩と下がっていきます。

まるで弱い者いじめのようです。

「樹さんってば、ひどい！私、柚里なんですっ！！」

「柚里？柚里と言う名のうさぎなど、吾は知らぬ」

「吾も知らぬ。それに樹という名は吾のもので、貴様のものではないっ！」

「何を言う？貴様こそ吾の名を勝手に語っているのではあろう？不愉快千万！」

つんつんと柚里を突いていた槍を、たがいに向けて突き始めた赤と黒の大將は、やっと柚里のことなど忘れて本来の戦闘にもどったようです。

そうして『樹』は誰かということ争い始めました。

どっちも見た目は樹さん、なんだけど。でも性格が違っているよ
うな……

言い争いと突っつきあいに見切りをつけた二人の樹が、こんどは
柚里の前にやってきて、声をそろえて尋ねました。

「どちらが『樹』だっ!?!」

はあはあと肩で息をしながら我先に柚里に迫ってきます。

ひゃああああっ

樹さんのどあっぶうううっ

柚里は顔を真っ赤にして、ぶんぶんと首を振りしました。そうしな
いと慣れないどアップに耐えれそうにないからです。

「どちらが『樹』だっ?!」

ずいずいっと迫ってくる樹たちに、ついに柚里は文字通り『脱兎
のごとく』逃げて行きました。

いやああああっ

どてててと走り去ろうとしているのに、赤と黒の樹は槍で突
っつきながら追いかけてきます。

「どちらが『樹』だっ?!」

あまりの樹の執拗さに、柚里は逃げまどうしかありませんでした。

ひいひい

たーすーけーてーっ

「アキくんっっ!!」

「呼んだ？」

閑話 二

呼びました、呼びました、呼びましたとも！

けれど目の前に現れたのは、ふわふわの綿菓子でできた雲の上に寝そべっているお姫様でした。

そのお姫様は新月を思わせる淡い金色の波打つ髪と、透き通った薄い空色にところどころ金色の斑点がちりばめられている瞳、真っ白いゴスロリのドレスに小さな王冠を斜めにつけていました。

ちよつと見はとーつても美しいお姫様ですが、のっかっている雲をちぎつては食べちぎつては食べ、足をばたつかせては下着のズロースが丸見えです。はしたないです。

柚里は茫然とそのお姫様を見ていましたが、柚里が呼んだのはアキくんであつて目の前のお姫様ではありません。

「で？何の用？」

お姫様は雲の上でごろごろと転がって柚里まで近づき、綿菓子でべたべたになつた指を柚里の鼻にちゃんと当てました。

「えっ？！えーつと、私はアキくんを呼んだんですけど……？」

「せやから、来たんやけど？」

えーつとえーつと

確かに話口調はアキくんだけど、どうひっくりかえしてみても目の前のお姫様は女の子、アキくんは男の子なんですけどーっ

柚里が目をはちぱちとしていると、後ろから赤と黒の樹がとうとう追いついてきて、柚里を槍で突つっこうとしました。

「うさぎっ！逃げるでないっ！！」

「黙れ、馬鹿ども。妾の前で何をしておる？頭を下げぬか！」

行儀悪くもごろんと転がったままで、自分よりもはるかに体格のいい赤と黒の樹たちに向かつて、お姫様は侮蔑をこめて言いました。

ぴきっ

その瞬間、樹たちはまるで時間が止まったように固まってしまい、柚里への突っつきをピタリとやめました。

驚いた柚里が二人をみると、だらだらだと、滝のような汗が流れています。すごいです。

そしてがばつと平伏すると、「申し訳ございませんっ」「と頭を地面にこすりつけ始めました。

え？なにこれ？

樹たちのあまりの変わりようになんかなり引き気味の柚里ですが、お姫様の次の一言に自分の理解の範疇を越えたと確信しました。

「何をしておる。さっさと妾を起こせ！」

「はっ！ありがたきお言葉！！」

意味わかんない

先ほどまでの大汗を微塵も感じさせないほど流れるように動き、赤の樹がお姫様をまさしくお姫様だっこで抱きかかえると、黒の樹はすかさず綿菓子わたあめの雲を椅子の形に整えます。赤の樹は出来上がった綿菓子わたあめの椅子にお姫様をそこに丁寧に座らせ、乱れた髪をどこか

らか取り出したブラシでほぐし、指先でくるくると巻き毛を整えていきました。黒の樹はその間にドレスに付いた綿菓子を取り除いていき、ほどけた無数のリボンを結びなおし形を整えていました。

ぱちぱちぱち

あまりにも見事な出来栄に、思わず拍手を送ってしまった柚里ですが、そんな柚里を赤と黒の樹はきれーに無視をしています。さっきまでのしつこい樹たちはどこに行ったのかと思うくらいの変わりようです。

ちよつとだけイラつときたのは心の中にしまいこみました。

「もうよい。控えよ」

「はっ」「はっ」

すすすとお姫様の後ろに控えた二人の樹は、お姫様に尽くしていた時とはまるで別人のように顔をしかめてお互いを睨みつけています。まるで鬼がわからかシーサーか。あ、狒犬っていうものもありますね。

「で、妾に何用じゃ？」

にやりと笑ったその顔は、まさしく柚里の知っているアキくんでした。……でも女の子。ってか、女装趣味？

「あ、あ、アキくん？」

「だからそう申しておるに。それともうさぎというものは馬鹿なのか？」

「「そのようすな」「」

お姫様が後ろの二人に首をかしげて確認すると、樹たちはそれはそれはとろけそうなほどの頬笑みをお姫様にむけてとっては辛らつな言葉を吐きました。

うー。樹さんたちも、アキくんも、ひどいよ。

でも、なんで樹さんが二人いて、アキくんがお姫様なの？

いやいや。その前に自分がうさぎになっていることは保留ですか？……保留のようですね。

「それで、妾に何用じゃ？」

「お姫様には用がないです。私はうさぎのアキくんを探しているんです」

「「用がないだと？！なんとこのうさぎは姫様を愚弄したぞ！不敬罪！不敬罪！！」」

「えええっ？質問に答えただけでしょ！」

「「不敬罪には死を！」」

「えええええっつ！！」

どうして用がないっていっただけで、死ななきゃならないの？じりじりと柚里に詰め寄ろうとする赤と黒の樹の後ろで、面白そうにくすくすと笑っているお姫様が見えました。

こわいっ！

樹たちの両手がうさぎの柚里に迫ろうとしていました。

こわいよおおおっつ！！

かぶっ

柚里は無我夢中で齒を立てました。
ヒットです。

柚里が齒を立てたものは、赤い樹の指だったのです。

ぶしゅーつつ

赤い樹は指の先から空気が抜けていって、ひゅるひゅると小さくなっていきました。

黒い樹は小さくなった赤い樹を持ち上げて、ぽーんと適当に放り投げると、柚里を抱きあげようと手を出しました。

かぶう

しゅるしゅるしゅるしゅる

黒い樹の指をかじると、やっぱり赤い樹のように指先から空気が抜けてしゅるしゅると小さくなっていきました。

小さくなった黒い樹を、うさぎの柚里は鼻先でつつんと突きましました。

『やめてくれーつつ！！』

甲高く早口でしゃべる樹を、柚里は面白くて何度も何度もつつんと突きます。

『やめてくれーつつ！！』

「ほう。面白いおもちゃじゃな。妾に寄こせ」

綿菓子椅子から立ち上がったお姫様は、柚里の前にやってきて黒い樹をひよいとつまみました。

かぶつ

しゅるしゅるしゅるしゅる

柚里はお姫様の指も噛んでみました。

するとお姫様は指先から煙を出してお姫様を隠してしまったのです。

「何をする！不敬罪じゃ！」

煙に隠れたお姫様は地団駄を踏みながら、柚里を探していました
が、煙があだとなつて柚里を見つけたことができません。

これ幸いにお姫様から逃げることにした柚里は、元来た場所の真
反対の方向に駆けだして行きました。

閑話 ろく

どこまでもどこまでも続く森の中を駆けていくと、眼下に大きな大きなお城が見えました。

どのくらい大きいかというと、窓が百個以上ありそうですし、二階部分に突き出しているバルコニーには噴水がありますし、前後左右に塔が高くそびえ立っていますし、なによりも遠くにあるはずなのにとても近くに感じるほどの高さがあります。

うわー、すごい！テーマパークのお城なんて目じゃないよ！！

すべてがシメントリーで作られた巨大なお城と同じく、広大な前庭もなにもかもシメントリーに設えていました。

その前庭の真ん中の、バルコニーにある噴水の何倍も大きくて真ん中にへんてこな形のオブジェがある噴水のその奥に、人が百人は座れそうなほど大きな大きなビロード張りの椅子が置かれていました。

緑の庭に映えるように作られた深紅のビロードの椅子の上は、真っ白い何かと真っ黒い何か、そして真っ黄色な何かがちよこんと置かれてありました。それぞれその何かの足元にはビロードの椅子に登れるように長い階段が伸びていました。

おもしろーい。こんなの見たことない！

柚里は自分が逃げている最中だということをすっかり忘れて、目の前の風景に魅了されていました。

その時です。

目のはじっこに、さっと何かが掠めて行きました。

うさぎのアキくんです。

「あつ！！アキくんっ！！」

アキくんは「大変だ、大変だ」と独り言を言いながら立ち止り、辺りをきよるきよるとしてからやつと柚里を見つけました。

「あ！お前、なんでこんなところにいる？それに正装もしていないじゃないか。その姿で御前にでるなんて恥知らずなんだ！！」

アキくんは柚里の頭をばかばかと殴りました。

あまりの勢いに柚里は泣きそうになりましたが、それよりも何よりも、アキくんの話口調がおかしいのです。

「いったーいつ！アキくんってば、ひどいよ！！」

「何をいつているんだ？このくらいで済んでよかっただろう？それに、時間がないぞ！早く正装しなさい！！」

「……時間？……正装？？」

何のことを言っているのかさっぱりわからないので尋ねたのですが、それがアキくんにはお気に召さなかったようです。

きっと睨んだかと思うとそのまま「ついてこい」と叫んで走って行ってしまいました。

意味わかんない

頭の中がぐるぐるぐる「？」「でいっぱいになったのですが、やっと見つけたアキくんをここで逃がすわけにもいきません。柚里は意を決してアキくんの後を追いかけて行きました。

一生懸命走ったので肩でげはげはと息をしていたら、アキくんが「うさぎの風上にも置けない」と後ろ脚をだんだんと強く何度も踏みました。

そんなことを言っても、本来は人間の柚里ですから普段の生活に『全力疾走』という言葉はありません。けれどせつかく見つけたアキくんを逃がすのも嫌ですから必死で走っていたのです。

アキくんはずっと不機嫌にだんだんと足を踏んでいます。そして足を踏むたびにアキくんはどんどんと大きくなっていつているように思いました。

によき

によきにょき

ずどどどどどどっ

なんとアキくんの踏んだ足元から大きく太い茎をもつ植物が勢いよく生えてきて、アキくんをそのまま空高く連れ去って行きました。

うわっ。それは駄目っ

柚里はアキくんに追いつこうと、目の前でによきにょきと生え続けている植物にえいっと呼びました。

ずどどどどどどっ

ものすごい音を出しながら、植物は成長していきます。

ひーっ

こわいよーっ

柚里は振り落とされないようにがしつと茎に捕まっていたが、目の前にアキくんがひよいひよいと茎と枝葉を飛び移りながら柚里のほうにやってきて、うさぎの正装である懷中時計と蝶ネクタイ、チヨツキを差し出して言いました。

「何やってんだ？まだ正装もしていないのか。ほら、これをさっさと着なさい。もうすぐ御前だぞ？」

「むりーっ！むりーっ！！今この手を離したら、ぜーったい落ちるうううっ！」

「はあ？落ちるわけないだろう？うさぎのくせにそんなことも判らないのか？」

アキくんはとっても情けなさそうに大きくため息をつきました。

そんなこと言ったって、無理なものは無理だよ

本当はうさぎじゃないのに、できるわけじゃない

だいたいアキくんってば、冷たすぎ！……こんな子じゃなかったのに、どうして??

半泣き状態でアキくんを見てみると……

アキくんの特徴である、ツキノワグマそっくりの下弦の月のような白い模様が目の前のうさぎにはありません。

いままで、蝶ネクタイとそれに就いている懷中時計に隠れていて判らなかつたのです。

ええええっつ　うさぎ違いだあああっつ

どーしよ、どーしよ、どーしよーっ！

閑話 なな

「さっきから何を一人で悶えてる？……ほんと、お前って変わらないな」

「え？」

「小さい時から何かあるとすぐに慌てふためいて、周りに多大な迷惑をかけていただろうが！自分でできるくせにまるでなんでもできないようなそぶりまでしてたのを知らないとでも思ってるのか？」

「ええ？えーつとえーつと？」

「ほんつとに『妹』というのは得な立場だな」

……お兄ちゃん？

あは。あははー

これは夢。そうよ、夢だよ！

そうじゃないと、説明がつかないよ

じゃなかったら、うるさいお兄ちゃんがうさぎになってここにいるわけないものーっ！！

「ありえなーいっ！！」

「馬鹿っ！ありえないのはお前のほうだ！さっさと着替えろ！！」

ばしつと投げ渡されたうさぎさん正装一式をなんとか飛ばされずに片手で受け取りましたが、やっぱり片手だけでは着れないのでどうしようかとわたたしていました。そうするとお兄ちゃんうさぎが大きいため息について暴風の中とことと袖里の手もとまでやってきて必死で茎にしがみついている袖里を丁寧に着替えさせてくれました。そしてリボンを締めると、その先に大きな銀色の鈴をつけました。

「よしっ！これで御前にでも恥ずかしくないだろう。ほんとに手のかかる妹だ」

「……お兄ちゃん」

「空高くそびえるように育っているこの豆も、そろそろ重みで下を向く。そうしたらちゃんんと一回転して女王様の前まで着地しろよ！」

いつかいてん？一回転ってなんですか！？

お兄ちゃんなら私が運動音痴なのをしってるでしょー？

そうこうしている間にも、お兄ちゃんうさが言ったように、豆自体の重みで穂だれるように垂れていき、とうとう地面にどーんと落ちました。落ちた時の反動で、お兄ちゃんウサギと柚里は天高くぽーんと舞って、お兄ちゃんうさはくると三回転半捻りをしながら、柚里はわたたと両手足をばたつかせながらびったんと、あの大きな椅子の真ん中の階段の真下に着地しました。

「フトドキモノ！なぜ頭ヲサゲヌ？！」

着地した両側には赤と黒のトランプの兵士がずらっと並んでいます。

その先頭にいたトランプに金色の枠のついたナイトらしき兵士がぺらぺらの声で柚里を諫め、ぺらぺらの槍で柚里のしっぽを突っつきました。

ひゃっ

柚里はとつても恥ずかしくて真っ赤になって俯きましたが、隣で控えていたお兄ちゃんうさは冷やかに柚里を見ていました。

「女王陛下にはご機嫌麗しく……」

「麗しくなどない。空は青く空気も清々しい。気持ちよいほどの天候に恵まれて、麗しくなどなるうものでもないわ」

「ははっ。もったいないお言葉」

「時に宰相。そなたの横に控えておるうさぎじゃがの。妾の姫の嫁にと思つておるのじゃが」

「ははっ。もったいなきお言葉」

は？

お兄ちゃんつてば、意味わかんないんですけど……？

何を勝手に私を『お姫様』に売っちゃってくれちゃってるんですかーっっ！！

お兄ちゃんうさぎに文句を言おうとがばつと表をあげたものの、またナイトがつんつんとしっぱを突つついたのであわてて頭を下げてしまいました。

どうしてお兄ちゃんが『宰相』で、お姫様にお嫁にもらわれないといけないの？

だいたい今わたしつてばうさぎだし

へんてこな世界にへんてこな人達

お嫁に行くなら、せめて男の人にしてーっっ！

「お姫様に嫁入りはないよー」

しくしくと袖里が泣き始めました。

そうしてぼとりと涙が芝生に落ちたときのことです。

いつの間にか目の前にはさっきの真っ白いゴスロリのお姫様がにかつと笑って手を差し出していました。

「妾の手を獲れ」

「ちよーつとまったあつ！」

そこにいきなり現れたのは、真っ白お姫様と顔かたちは瓜二つで同じデザインだけれども色が真っ黒のゴスロリを着こないしているお姫様でした。

「妾の嫁だと母上もいつてたではないか」

「何を言ってる？妾は以前に柚里に名を呼ばれたのだから、妾の嫁だろう」

白黒の美少女二名が柚里の前で俺様発言、あーんど猛烈な求婚を始めました。

「柚里。妾を選べ。そうすればこの世界はすべてお前のものになるであろう」

「いや、柚里。妾こそ選べ。そうすれば世界どこかすべてがそなたに膝まづくであろう」

「妾を選ぶとそなたをそれこそ真綿にくるんで大切にしようぞ？」

「阿呆か。そのようなことなど柚里は望んではおらぬ。柚里には常に我が嫁としての責務をこなしてもらおうぞ。退屈などという言葉はない。人生において退屈ほどつまらぬものはないからの」

どちらも嫌です。

どちらも腹黒っぱいです。

なんていつてもそのきらきらしい笑い方が黒さを強調しています。そして二人して柚里を抱きしめようと、片方の前足は黒の、もう片方の前足は白の、ゴスロリなお姫様が掴んで引っ張り合いを始めた。

「痛いっ！痛いよお！」

どんなに泣き叫んでも、二人のお姫様は手を緩めることはしません。

横に控えているお兄ちゃんうさぎの宰相は、にこにここと笑っています。

そして両側に控えているトランプの兵士たちもやんやんやんと声援を送り、高みの見物とばかりはるか上にいる椅子に座った女王様が持っていた錫杖でどんどんとビロードの張りを突いています。

柚里は絶望的な気分になりました。

だってどんなに「痛い」といっても、その言葉が周りのみんなには素晴らしい言葉にでも聞こえているかのように反応するからです。

「痛いってば！やめてよお！」

「柚里が妾に嫁に来るならやめてやろうぞ」

「いやいや、妾の嫁になるのならはこの黒い妾を殺してやろうに」

殺すとかそういう言葉を簡単に使っな！！

ぶちんと柚里の血管がきれそうになりました。………というか、キレました。

「………ちよつと、二人ともいい加減にしなさいっ！そこに正座っ
っ……！」

泣き叫んでいたはずの柚里がぎろりと二人のお姫様を睨みつけたので、二人は驚きのあまり言われるがまま地べたにきっちり正座をして両手を揃えてしまいました。

「どんな暴言をはいたか、わかってるの?!」

「「暴言など吐いてなどいない」」

「つんと! だから駄目なんですよ! 簡単に『殺す』なんて言葉を使うなんて、どれだけ相手を傷つけるか、わかってるの?」

「「そのどこが暴言というのか?」」

「暴言ですつ!! そんなこともわからないのに、私を嫁にもraitainなんてありえないから!」

ふーふー、息を荒く吐きだしながら、柚里は二人に言いました。
でもちよつと待つてください。

話を反対からみてみたら、そんなことが分かったら嫁に行くってことに聞こえますよ?

そのことに先に気がついたのは、真っ白のゴスロリ姫でした。

「では、妾はそなたの言うとおりに今後その言葉を使うのをやめようぞ。だから妾の手をとれ」

「……え?」

「その言葉を使わねば、嫁に来れるのであろう?」

「……えーつとえーつと?」

「そなたがそのように申したではないか。それともたがえるつもりか?」

ずいとう柚里の目の前に顔を近づけると、掴んでいた柚里の左手でリボンタイにつけている銀色の丸い鈴を鳴らしました。

リン

するとどうでしょう。

その鈴の音がきらきらと目に見えて光り始め、小さな柚里の体を包み始めたのです。

そうして袖里を綺麗に包み込むと、ぱつと四散しました。

中から現れたのは、それはそれはかわいらしい真っ白いつむぎずでした。

……って。

ここは人間に戻る所じゃ？

閑話 はち（前書き）

今回かなり短めですw

閑話 はち

「思つた通りにかわゆらしい姿じゃ」

天上のビロード張りの椅子から階段をつたつてコロコロと転がって落ちてきた言葉に柚里は驚きました。

「宰相。でかした！このうさぎこそ、もっとも妾の姫にふさわしいうさぎよ！見よ。なんとも似合（にお）うておるのう」

「ははっ。ありがたきお言葉」

お兄ちゃんうさぎは女王様からのおほめの言葉に文字通り飛び上がって喜びましたが、両脇に控えていたトランプ騎士のナイトたちのぺらぺらの紙でできた槍でしっぽを突かれてしまい、あわてて平伏しました。

真っ白うさぎに変身した柚里は、真っ白ゴスロリお姫様に片手を取られぷらんぷらんとぶら下がり、その横では真っ黒ゴスロリお姫様が悔しげに地団駄を踏みまくっています。

だんだんだんっ

どんどんどんっ

によきによきによきっ

真っ黒お姫様が地団駄を踏むたびに、その足元から植物がによきによきと育っていきます。

そしてお姫様があまりにも勢いよく地団駄を踏むので、植物はくるくると巻きに巻いて育ってしまい、まるでスプリングのようになつて、一番上に乗っかっている真っ黒お姫様をぴょーんと飛ばして

しまいました。

もしかしてこの茎に乗ったたら、この場から逃げれる？
それでもってお姫様の嫁なんてならなくてすむ？

柚里はじたばたと暴れて真っ白お姫様の手をほどいてスプリング
茎に乗っかろうとしましたが、お姫様のくせに意外と力が強い白ゴ
スロリ姫さまに力いっぱい引っ張られてしまいました。

そのまま姫さまの真っ白いフリルがばんばんについた胸にぼふっ
と顔を押し込められました。

——え？

とすとすとすつ

柚里は前足で何度か胸を叩きました。

普通は失礼だからしてはいけませんよ？

「……いったい何をしておる？」

柚里の行動を掴めなかったお姫様は不思議そうに顔を斜めにかし
げながらも優しく柚里をなでています。

「えーつと」と言いながらも、相変わらずぱすぱすとお姫様の胸
を叩いています。

「なんじゃ。妾の胸がそんなに気に入ったか？」

頬を真っ赤に染め上げて、白ゴスロリ姫様は言いました。
意外と純情さんかもしれませぬね。

「な……い、ですよね？」

いやいや、柚里さん。それは失礼ですよ？

いくら本当のことでも言っていないことと悪いことがありますからね。

「何がじゃ？」

「胸がないですよ？」

「当たり前であろう？ 妾は男じゃからな」

お姫様はゴスロリの、たくさん付いたリボンを解いていき、そのまっ平らな胸を柚里に見せました。

たしかにそこには女性にあるものがありませんでした。

「ほら。納得したであろう？」

にやりと笑って柚里を抱き上げると、そのままぎゅっと抱きしめました。

もちろん肌ははだけたままです。

いやあああああつっ

お嫁にいけないーいっ！！！

柚里は束縛から逃げようと必死になりましたが、そこは男の子なお姫様。力のはんぱありません。

「ほんまめっちゃあきらめが悪いなあ。柚里は俺の嫁やって決まっただやん？」

「うぎゃあああつっ！？」

「俺やって、なんでわからへんのかなあ？お仕置きせなあかな
っ」

白ゴスロリお姫様はそれはそれはにこやかに腹黒くほほ笑みまし
た。

ええ、それはそれは腹黒く。

閑話 はち（後書き）

たぶんつぎのターンでお願いします@閑話

閑話 きゆう

淡い金髪に綺麗な空色の瞳、透明すぎる肌に真っ白いゴスロリ衣装。

どこをどうとっても綺麗で綺麗で綺麗すぎるお姫様は、実は男の子だったのです。

「まだ俺がわからんの？」

そう言われても柚里にはさっぱりわかりません。

業を煮やしたお姫様は柚里のほったをむにむにとひっぱりました。

「いはいつ、いはいつて！」

「ほほー。そりゃあ痛いやろうなあ。せやけどいつも俺にしていたん？」

いつも俺に……？

でもそれはうさぎのアキくんにしてたんですけど？

けれども目の前のまばゆいばかりのお姫様な男の子にはまーったく心辺りがありません。

それなのにお姫様は『いつも俺に』というではありませんか。

「ほへはっ！ほへはアヒふんひっつー！」

「そうそう。ようやく思い出した？」

お姫様の端正な顔が、ずいっと柚里に迫ります。

頬笑みながらも目が座っている、引きまくりのおそろしい顔でした。

「……へ？もひはひへ、アヒふん……？」

「もしかせんでもそうやけど？」

[illegible]

ぐりぐりぐりぐりぐり

「いはいつ！いはいつ！！」

「なんでそないに驚くねんな！」

「だって女装だよ！」突っ込みどころ満載のセリフが口からこぼれおちそうになりました。

アキくんだってわかってみれば確かにお姫様はアキくん以外には見えませんが、けれども初めは女の子としてしか見ていないもので、すから、お姫様がイコール、アキくんなんてわかるはずがありません。

それに女装がやたらめったら似会っているところが、女心にとどめを刺します。

詐欺だ……。思いつき詐欺だ……

「せやから柚里のことを俺の嫁やつて何度もゆうてるやん」

嬉しそうに頬を染めるアキくんは、柚里をぎゅっと抱きしめたかと思うと愛おしそうにちゅっとおでこにキスを落としました。

かああつと頬が熱くなって、真つ白つさぎの柚里はほのかにピンクに染まります。

柚里がうさぎのアキくんキスすることはあってもその逆なんであるわけがなかったの、いきなりアキくんからキスをされるということが柚里にはとても恥ずかしかったです。

なんでなんでなんでーっ

はじめのうちは真っ赤になって固まっていた柚里ですが、だんだんと羞恥にふるえ、アキくんの腕の中でじたばたともがき始めました。

アキくんはそんな柚里を腕から落とさないようにがんばりましたが、それでもか弱い（？）うさぎですから必要以上に力を入れることができません。

とうとうアキくんの腕の中から脱出すると、少しでもアキくんから離れようと駆け足疾駆。

どぴゅんと音が聞こえるほどに、必死で走り去りました。

「なんで逃げるんやあー！」

「皆のものっ！何をしておる？早う、追いかけよ！大切な嫁御を逃がすでないぞー！」

「ははっ！ー！」

せつかく手に入った柚里に逃げられて呆然としているアキくんにしびれを切らせて、ビロード椅子から転がり落ちてきた女王様は両脇に控えているトランプの兵士たちに命令を下しました。そしてアキくんのお尻を持っている錫杖でぺちぺちとひっぱたき「さっそく嫁御に逃げられるとは。甲斐性なしの根性無しよのう。さっさと追いかけぬか」とはっぱをかけました。

そのはっぱが効いたのか、単に茫然自失から立ち直ったのかはわかりません。

アキくんは女王様に向かってにつこりと笑ったと思うと柚里が逃げた方向に猛ダッシュをかけました。

そんなこととはつゆ知らず。

柚里は必死でアキくんから逃げました。

途中、地面がぼよんぼよんと波打って、柚里はそのたびにぼんぼんと上に飛びながら走り続けていましたが、何やら恐ろしい地響きがきこえてくるではありませんか。

走りながらも気になって、地響きの聞こえる後ろ側をおそろそる確かめてみると……

世界が揺るぐほど大きく地響きを立てながら、トランプの兵士がそのトランプの兵士の後に真っ白ゴスロリお姫様のアキくんが。その真っ白ゴスロリお姫様のアキくんの後ろにはトランプの女王様が、必死の形相で、けたたましくお叫びをあげながら、笑い転げながら、柚里の名前を叫びながら、柚里を追いかけてきました。

ひいひいひい

何よ、これっ！！

あわてて柚里は顔を前に向けて、今まで以上に必死になって逃げました。

ちよつとでも立ち止まったら、柚里のことなどお構いなしにそのまま突進してきて引き殺されそうな勢いです。

「柚里！なんで逃げるねんなあつ！！」

「嫁御！逃げてても無駄じゃぞ？！」

そんなこと、言っただけ

もとはといえばアキくんとキスが恥ずかしくて、そんでもってお嫁になんて考えたこともなくて、ぐるぐる頭が回り回ったので逃げだしたはずなのにーっ

逃げるにきまつてるよお

ひーひー言いながら、それでも必死で走り続けた柚里ですが、そ

こはもともと運動不足のOLさん。
とうとう体力も気力も使い切りそうになりそうです。

「なーにやってんだ」

いきなり目の前の空中にお兄ちゃんうさぎが現れました。
なんにもない空中ですよ？
ふわふわと浮かんでいますよ？

「お兄ちゃんっ！？？」

「はーあ。せっかくお膳立てしてやったというのに……。何を尻込みしてんだか」

「そんなことより、助けてよぉ！」

後ろを振り返ればやはり、先ほどの恐ろしいほどの人数で柚里に迫ってきています。兵士さんたちは判りますが、お姫様と女王様、恐ろしいほどの体力ですね？

お兄ちゃんうさぎは、柚里と後ろの一団を見比べて首をかしげました。

「お前、お姫様の嫁になるのが嫌なのか？」

「そんなことじゃなくて……！」

「ふーん？良縁だと思うけどね」

「お兄ちゃんっ……！」

そうこうしている間にも、追手（？）は柚里に迫ってきます。
手を伸ばせば触れるような至近距離に近づいてこようかとした時のことです。

とんっ

お兄ちゃんうさぎは柚里の頭をこつんと小突きました。

——え？

小突かれた反動で柚里は後ろにゆっくりと倒れていきます。

頭の上ではアキくんが、両手を出して倒れる柚里を助けようとしています。

女王様も、トランプの兵士たちも、みーんな両手を柚里に差し出しています。

「柚里っ！！」

「ま、がんばれば？」

アキくんの叫びとお兄ちゃんうさぎの冷めた応援の声を水の中のようにぶわぶわの音で聴きながら、柚里は後ろの倒れこみました。

……こみました。

……こんだはずです。

それなのに、アキくんの優しい手を感じることもなく、柚里は闇の中に落ちていく感覚にとらわれました。

それはまるで大きな水がめの中の底に水流で吸い込まれるような不思議な感覚でした。

ぐるぐると水流のような闇の中に巻き込まれて、柚里は意識を手放しました。

閑話 きゆう(後書き)

つ……つぎこそ、閑話最終話ですっ！！！

閑話　じゅう　【閑話完結】

……ゆ……りっ
……ゆ……だ……っ

真っ黒い闇の中の渦に巻き込まれて、それでもお姫様たちから逃げ出そうともがいていた柚里の頬に、ぺしぺしと柔らかいものがあったっていました。

「……柚里っ……！……柚里ってば！」

いきなり耳を覆いたくなるような大声が、柚里の耳に響きました。その声はアキくんの、真っ白ゴスロリお姫様の声でした。

「いやあああっ！」

手をバタバタとばたつかせてお姫様を遠ざけようとしたら、何かにヒットしたようでむぐっという音が声が聞こえました。

「痛いになっ！柚里、なにすんねんな……！」

現実から逃避しようときゅっとう目をつぶっていた柚里でしたが、自分の名を呼ばれたので驚いて目を見開きました。するとそこには鼻を両手で押さえて痛みを逃がしていたうさぎのアキくんが涙目になってぐずぐずとしていました。

アキくん……？うさぎだあ……

本当にアキくんなのか確かめようとそつとアキくんをなでると、アキくんはいつものように軽く柚里に寄り添います。

「あー……本当に、アキくんだ」

呆けたように呟く柚里に、アキくんは鼻を押さえながらも心配になりました。

だって柚里がうたた寝をしていたときに、小声でしたがうんうんと唸っていたのです。

「柚里、大丈夫か？なんやえろうつなされてたし」

「え？」

うなされてた？

違う違う。あのお姫様たちから逃げてたんだよ。

そう言いたくて身体を起こそうと地面に手をついて起き上がろうとしたら、目のほじに人間の手が見えました。それはとーっても見慣れた自分の手です。

そしてさっきアキくんを撫でたときも自分の手は人間の手だったことを思い当りました。

え？もとに戻ってる？

空に手をかざしてまじまじと手を見てみると、横で不思議そうにアキくんが首をかしげていました。

アキくんも、戻ってる、よね？うさぎだし

「あつ。アキくんっ！？女王様はっ？お兄ちゃんはっ？？」

「はあ？何ゆうてんのん？……もしかして寝ぼけてる？それにお兄ちゃんって、誰のこと？」

初めのほうは訳が分からず、最後には不機嫌に答えて、アキくんは柚里に詰め寄りました。

だって『おにいちゃん』という柚里の声には優しさがにじみ出ていたからです。

「寝ぼけてる……？あれが？」

「お兄ちゃんって、誰？」

「だって……だって。お姫様のアキくんが私を嫁につて……」

「え」？

何その俺の願望が詰まった夢って！？

柚里の不用意な言葉に、アキくんは真っ赤になって俯きました。

「だから逃げてたのに……女王様とか……」

「はあっ？もしかして日陰で寝てへんかったから、ちょっとおかしくなってもうたん？」

なんでそこで逃げんねんな

一瞬でも喜んでしまった自分がアホみたやと落ち込んだアキくんでしたが、それとは別に柚里の言動があまりにも奇抜すぎてとーっても不安になつてしまい、柚里の膝にのって背伸びして、柚里のほつぺたを両手でぺたりと触りました。

そのとたん、柚里はびくつと顔を震わせて、アキくんの小さな手

から逃れようと思いました。

な……なんで？俺、そんなに嫌がるほどなんかした？

アキくんの大きな黒い瞳にはシヨックの色が見えました。

柚里に避けられるほど何かした覚えがまったくなかったので、この柚里の行動にアキくんは凹みました。

あれ？やっぱりいつものアキくんだとあ
とすると、今のあれは夢だったんだ……

柚里は心からほっとしました。

うさぎのままでお嫁さんになんてなりたくはなかったからです。
膝の上で凹んで俯いているアキくんの背中を優しくなでながら、
それでもさっきの真っ白ゴスロリお姫様を思い出しました。

似あってたよ、アキくん

そうだ！今度アキくんに着せてみよう！！

柚里はアキくんが人間になったときにゴスロリ衣装を着せようと
心に誓いました。

だってそのほうがだんぜん面白いと気付いたのです。

うふふと不敵な笑い声に膝の上でアキくんは身震いをしました。
何気に自分に危機が訪れたような気がして、思わず柚里を見てみ
ました。すると何やら思案顔でアキくんを見下ろす柚里の瞳がきら
りと光ったように思いました。そうしてゆつくりと諭すようにアキ
くんに語りかけます。

「アキくん。お願いがあるんだけど……」

閑話 じゅう 【閑話完結】（後書き）

長らくお待たせしました。

やっとこさ、閑話が完結しました。

いかがでしたでしょうか？パロらしいパロですかね？

次回からは本編に戻りますので引き続きよろしくお願いいたします♪

第三十二話

柚里に教えてもらったこと。

洗濯物は朝10時まで干して、夕方太陽が傾くころには取り入れる。

一日干していても乾かないことがあるので、乾かなかった洗濯物は家の中で干し直すこと。

まだ洗濯機から洗濯物を取り出して干しているわけではないけれど、もしかしたらお手伝いするかもしれないからって見せてもらったのは、洗濯物を取り出すときに畳んでかごに入れるってこと。これを見ると、洗濯物の重みでしわがなくなるので乾いたときに綺麗なんやつて。

そして夕方取り入れるときは畳みながら取り入れる。せっかくしわの無くなった洗濯物を適当に取り入れてしまうとしわになって、朝の手間の意味がなくなるよと言われた。

洗濯物は奥が深い。

柚里に『お掃除洗濯当番』を任命されて、アキくんは実はちょっとだけ嬉しかったのです。

毎日毎日家の中で何もすることなくじっとしているということは、今までフィーヨルの国で王子としての責任と義務と教育でがんじがらめになっていたアキくんにとっては夢のような日々だったのですが、それもはじめのうちの少しの間だけでした。

だんだんと日を追うことに『何もしない自分』というのが非生産的で許せなくなっていくていたのです。だからといって世界が違いうアキくん、それも人間ではなくうさぎとしてこの世界にいるアキくんにとって出来ることなどないに等しくて。

柚里はアキくんをとつても可愛がつてくれます。

それは愛玩動物に対する愛情であつて、人間としてのアキくんでは決してないと思つていました。

わがままで世間知らずで尊大な王子であつた自分は、この世界に来て、柚里と知り合つて、少しずつでもよくなつていくことは、首輪にかけられた銀の鈴をみれば一目瞭然です。けれどもそうではなくて、人間として、何か生産的なことをして、ひとつずつ以前の自分を改めて行きたい、王子としての自分を高めて行きたいと思うようになっていました。

そんなときに柚里に与えられた『お掃除お洗濯当番』というお仕事は、世話になりまくつていく柚里に少しでも恩を返せる、いつも働いて疲れているだろう柚里を少しでも休ませてあげることが出来る、一石二鳥なお仕事だと思いました。

だから俺、がんばるし

カーテンを閉めてりーん♪と鈴を鳴らせば、人間の男の子のアキくんの登場です。

あと何回人間になれるかわかりませんが（マグニユスが教えてはくれなかったので）、人間に戻る限り、ちゃんと当番をこなそうと誓いました。

用意していた洋服に着替えて、さあ、お仕事の始まりです。

まずはお掃除から始めます。

掃除機はもうお手のものです。すいすいと床を掃除したら、今度は拭き掃除です。『雑巾』を覚えてくれたのも柚里です。そしてその使い方も教えてもらいました。

丁寧に雑巾であちこちを拭いていくと、汗が出てきました。勤労の汗です。

ふつと息をついてその汗を腕でぬぐうと、今度は洗濯物の取り入れます。

教えられた通りに、一つ一つ丁寧に取り入れて畳んでいきます。タオルは色とりどりの層をなし、服はきちんと角を揃えて畳みます。完璧です。

ただ、タオルのしまう場所は判っても、服はわからないので、リビングのテーブルの上に並べておきました。

後は柚里が仕事から帰ってくるのを待つばかりです。

アキくんはうーんと両手を伸ばして背伸びをし、そのままですんとソファに落ちるように座りました。

すると

ちりーん　ちりーん　ちりーん♪

いつもの綺麗な金属の音が数回連続して鳴り響きました。

こんなことは初めてです。

背もたれに身体を預けていたアキくんは、驚きのあまり体を起してぐるりと辺りを見回しました。

もちろんそれで何がみるかとか、そういったことはないのです。けれどもアキくんはいつもと違うことで何かが起こるのではないかとつい思っていました。

するとどうでしょう。

まだ時間ではないはずなのに、きらきらと煌めく光がアキくんを

包み始めたではありませんか。

「ええっ？なんでなんっ？！」

光を霧散させようと、アキくんは両手をばたばたと向かってくる光をかき混ぜましたが、そんなことでは魔法はびくともしません。

あつというまに光の羽に包まれて、光の翼がアキくんをくるんでしまいました。

そして光がぱちぱちとはじけたかと思うと四方に向かってはじけ飛びました。

そこに現れたのは、いつものうさぎのアキくんではなく、いつもの人間のアキくんでもありませんでした。

第三十三話

アキくんを包んでいた光が四散するとともに、また別の光がアキくんの鈴から生まれ出て、部屋中に広がっていきました。

そしてその光は壁や天井にあたるとぱらぱらとまるで雨の粒のように落ちてきて、アキくんに袖里に初めて会ったあの雨の日を思い出させました。

あー、懐かしいなあ

アキくんは雨を受けようと掌を前に差し出しました。

その手は先ほどまでのぷにぷにとした少年のそれではなく、アキくん本来の男の人の骨ばったそれでした。

えっ？

ええええええええええっ???

俺。まさか。……戻ってる？

信じられない思いで立ち上がると、確かに目線の高さが違っていますし、体が浮くような、不思議な感覚に襲われました。

手足が長く伸び、筋肉の筋もきちんと見えています。

なんで？

なんでなんでなんで???

アキくんは大人に戻った手で自分の体のあちこちを触りまくります。

丸みが無くなってすっきりした顔、首には喉仏、広くなった胸に割れた腹。

自分の顔を確認しに行こうと洗面所に向かった時には、ドアの開
口部で頭をぐんとぶつけてしまいました。

そうして鏡の前に立つと、そこに映ったのは先ほどまでの柔らか
い輪郭の子供の顔ではなく、自分本来の青年の顔でした。

アキくんはとうとう、元の姿に戻ったのです。

「うわー。うそみたいや……」

確かに自分のはずなのに、久しぶりに見たその顔を、アキくんは
不思議なものを見るようにじっと見つめていました。

どのくらいそうしていたでしょう。

辺りはとうに暗くなって、部屋の中も明りが必要になっているほ
どです。

それでもアキくんは鏡の前から動くことができません。

どうして元の自分に戻ったのか、どんなに考えても、どんなに自
分の顔を凝視しても、まったくもって判らなかつたからです。

……マグニユス

今回は夢にも何にもでてけーへんかつたけど、マグニユスが知ら
んわけないわ！

「マグニユス、マグニユスっ！！」

空くうに向かつて叫んでみても、フィーヨルにいるマグニユスには声
は届きません。

ただアキくんの低く通る声が、部屋の中に響き渡っただけでした。

あかんっ。もうすぐ柚里が帰ってくる

こんな格好、いきなり見せたら驚くやん

その時になってやっとアキくんは自分が何も来ていないことを思い出しました。

いつもの小さなアキくんならば柚里の服も着ることができましたが、大人のアキくんにはそれは無理です。そうすると着れる服などないわけで。

うわー……どないしょ

辺りを見回すと、先ほどタオルをしまったチェストが見えたので、そこから大判のタオルをひっぱりだして腰に巻きました。とりあえずそれしか思いつくことができません。

ってか、俺ってもううさぎに戻らへんのかな？

それともちっこい俺に戻れるとか？

せめて柚里が帰ってくるまでに柚里の見知った俺に戻らへんのかなあ

自分の本当の姿に戻れたことはとっても嬉しいのです。けれどもそれ以上に、この姿を前触れもなく柚里に見せたときに柚里がどういう反応をするのかと思うと、怖くて仕方ありません。そうこうしているうちに、柚里が帰ってくる時間になってしまいました。

「ただいま。アキくん、いい子にしてた？」

「電気つけようよ？」と返事も待たずにはちぱちと明りをつけて行きます。

アキくんは洗面所でいつ柚里に見つかるかと思うと気が気ではあ

りません。

「アキくん？ かくれんぼはやめようよ。『おかえり』は？」

そんなことをいつても、普段とは明らかに声色が違うので、声を出すこともできません。

どうすることもできなくて、アキくんは洗面所に座り込んでしまいました。

「アキくん？」

きらりと光る金髪が洗面所の影に見えたような気がした柚里は、「詰めが甘いなあ」とほくそ笑みながら足音を立てずにゆっくりと洗面所に向かいました。

そしてかくれんぼをしているだろうアキくんを驚かせようと、息を吸い込んで洗面所に向かって大声を出しました。

「わっ！」

「うわっ！！！」

確かに柚里の思惑通りにアキくんは後ずさるほど驚きました。けれどその声を聞いてもつと驚いたのはほかならぬ柚里でした。だってうさぎのアキくんでも、人間のアキくんでもない、聞いたことのない男の人の声だったからです。

「ええっっ！？……誰っ！！？」

「……アキです……泥棒ではありません」

「えっ？ アキくん……？？」

「……そうですね……信じてもらわれへんかもしれんけど」

柚里はこわごとと洗面所の入り口から顔をのぞかせました。

するとお風呂上がりのような格好でぺたんと座り込んでいる金髪の男の人が上目づかいにじっと柚里を見つめていました。

半分裸のその姿に真っ赤になって、素早く顔を引っ込めた柚里です。

アキ……くん？アキくんなんだ？

たしかにあのウエーブのかかった金色の髪はそうだし、話し方もアキくんだけど、でも。

「もしかして『本当の姿』ってこと？」

まさかと思って呟いた言葉に、アキくんはコクリと頷きました。

「そうやねん。これが俺の本当の姿やねん。でも、柚里に信じてもらわれへんかと思って……」

「どうして？」

「え？なんでって言われても……なんでやる？」

「私に聞かれてもわかんないよ？」

くすくす笑いながら柚里はこれからどうしようか考えました。

ちよつと見ただけですが、アキくんは裸のようです。服が要ります。

小さなアキくんときは自分の服で間に合いましたが、今回はそうはいかないようです。

けれど男の人の服なんて買ったことがない柚里ですから、アキくんのサイズがわかりません。

「アキくん？ちよつと出かけてきていいかな？」

「どこいくん？」

「まだお店が空いているところがあるから、アキくんの服、買ってくる。身長つてどのくらいあるの？」

「こつちの測り方、わからへんけど。でもさっきその入り口で頭打った」

「え？アキくんっておつきいんだね」

柚里の対応がアキくんが思っていたよりもはるかに普通で、アキくんは拍子抜けをしました。

よく考えてみたら、しゃべるうさぎであつた自分や、そのうさぎから人間になつた自分にも多少は驚きはしたものの結構普通に接していてくれた柚里ですから、大人に戻つた自分にもそんなに驚きがないのかもしれないのでしよう。

なんや。びくついて損したわ

「いつてらっしゃーい。おはようお戻り」

「うん。すぐもどるから」

ぱたぱたと柚里の小走りする音が床を伝つて聞こえてきました。そしてドアがゆっくりと音を立てずにしまる音も。

「はあつ。よかつたわー。もうどないなることかと思つたわ」

家に一人残されて、それでも思っていたよりも軽傷どころか無傷で済んだようで、アキくんは安堵のあまりほおっとほおっと大きく息を吐きだして、そのままずると床に滑り落ちて行きました。

片や柚里はといえば。

買い物に出るために家の玄関を静かに閉めたたん、ドアに凭れ

かかって目を閉じました。

そして今家の中で見た出来事を、頭の中でぐるぐると同じ場面ばかり再現をしていました。

アキくんは、本当は大人の男の人だったのです。

かわいいうさぎのアキくんではなくて、ちよつと元気すぎる男の子のアキくんでもなくて。

大人の男の人。

かああと耳たぶまで顔が赤くなりました。そして心臓がばくばくと鼓動を強めます。

どうしよう、どうしよう

実は柚里はアキくんが思っているほど冷静に対処しているわけでもなんでもありませんでした。

ただあまりのできごとに、脳が考えるのを拒否していただけのようでした。

それが一步外に出て、家の空気とは違う空気を吸うことで、一気に理性がもどってきたのです。

どうしよう。アキくんってば、男の人だよ

どうしよう。男の人とは一緒には暮らせられないよ

うさぎであつたり小さな子供であるアキくんとならば、柚里はいくらでも一緒に暮らすつもりでしたが、大人の男の人なんて、話が違いすぎました。

どうしよう、どうしよう

顔を真っ赤に染めながら、それでも本来の目的である買い物に向

かいつつ、柚里は一人悩んでいるのですた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6348u/>

雨の中のうさぎ

2011年12月5日23時48分発行